寺所遺跡

1999年2月

長野県飯田市教育委員会

寺所遺跡

1999年2月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市松尾地区は飯田市街地の南東部、天竜川河岸から高位の段丘面までの広い範囲を占め、川沿いの平坦地が多く優良な耕地が広がっています。また、古来交通の要衝に位置しており、下伊那最古の古墳といわれる代田山狐塚古墳等の埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を残しています。これらは私たちの地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できる限り現状のままで後世に伝えることが私たちの責務でしょう。けれども、同時に私たちはよりよい社会や生活を求めていく権利を持っています。ですから、日常生活の様々な場面で文化財の保護と開発という相容れない事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査を実施して記録にとどめることもやむを得ないものといえましょう。

松尾新井地区は、老朽化した地区の集会施設を新築することを計画しました。地域コミュニティー施設の果たす役割を考慮すれば、必要な事業といえます。しかし、当該事業地には寺所遺跡が所在し、工事実施によって壊されてしまうおそれがでてきました。そこで、次善の策ではありますが、工事実施に先立って緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることになりました。

調査成果は本文で述べられているとおりでありますが、調査で得られました様々な知見は、これからの地域の歴史を知っていく上で貴重な資料となると確信しています。

最後になりましたが、調査に当たって多大なご理解とご協力をいただいた地元新井地区と隣接地の方々、現地作業及び整理作業に従事された作業協力員の皆さんほか関係各位に深く感謝を申し上げますとともに、ここに発掘調査報告書が刊行できますことに対して厚くお礼申し上げます。

平成11年2月

飯田市教育委員会

教育長　小　林　恭之助

例　　言

1．本書は飯田市が実施した新井地区コミュニティー消防センター建設に先立って実施された、飯田市松尾「寺所遺跡」の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は、飯田市教育委員会の直営事業として実施した。

3．調査は、平成８年度に現場作業、平成９・10年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。

4．調査実施に当たり、基準点測量・航空測量・航空写真撮影を㈱ジャステックに委託した。

5．発掘作業・整理作業に当たり、ＴＲＤを一貫して用いた。なお、遺跡の中心地番である6132－1を略号に続けて付した。

6．本報告書では以下の遺構番号を使用している。竪穴住居址－ＳＢ、墳丘墓－ＳＭ、掘立柱建物址－ＳＴ、溝址－ＳＤ、土坑－ＳＫ、集石－ＳＩ

7．本報告書の記載順は竪穴住居址を優先した。遺構図は本文とあわせ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。

8．土層の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。

9．本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により山下誠一が行った。

10．本書の執筆と編集は調査員の協議により山下誠一が行った。なお、ＳＭ０４主体部の遺体埋葬に関する自然化学分析をパリノ・サーヴェイ㈱に委託して実施し、その結果を付編として掲載した。

11．本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。

12．本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本 文 目 次

序
例　言
Ⅰ　経　過……1
　1．調査に至るまでの経過……1
　2．調査の経過……1
　3．調査組織……2
　　1)　調　査……2
　　2)　指　導……2
　　3)　事務局……2
Ⅱ　遺跡の環境……3
　1．自然環境……3
　2．歴史環境……3
Ⅲ　調査結果……7
　1．調査の方法と概要……7
　2．遺構と遺物……7
　　(1)　基本層序……7
　　(2)　竪穴住居址……10
　　(3)　墳丘墓……13
　　(4)　掘立柱建物址……26
　　(5)　溝　址……27
　　(6)　土坑・集石・穴……32
　　(7)　馬の歯……34
　　(8)　遺構外出土遺物……36
　Ⅳ　まとめ……37
付編　墳丘墓主体部の遺体埋葬に関する自然科学分析調査……105
報告書抄録……111

挿 図 目 次

挿図1　寺所遺跡位置図……4
挿図2　寺所遺跡調査位置図及び周辺図……5
挿図3　寺所遺跡基本土層図……7
挿図4　基準メッシュ区画及び調査位置……8
挿図5　寺所遺跡遺構全体図……9

挿図６　ＳＢ１１……10
挿図７　ＳＢ１２……11
挿図８　ＳＢ１３……12
挿図９　ＳＢ１４……13
挿図10　ＳＭ０１……14
挿図11　ＳＭ０１主体部遺物出土状態……15
挿図12　ＳＭ０２……17
挿図13　ＳＭ０３……18
挿図14　ＳＭ０３遺物出土状態……19
挿図15　ＳＭ０４……21
挿図16　ＳＭ０４墳丘・周溝測量図……22
挿図17　ＳＭ０４主体部・石組遺構……23
挿図18　ＳＭ０４遺物出土状態……24
挿図19　ＳＭ０５……25
挿図20　ＳＴ０１……27
挿図21　ＳＤ０４……28
挿図22　ＳＤ０５・０６・０７・０８・０９……29
挿図23　ＳＤ１０・１１……30
挿図24　ＳＤ１２・１３……31
挿図25　ＳＫ０１・０２・０３・０４・０５……33
挿図26　ＳＩ０１……34
挿図27　馬の歯出土状態……35

図　版　目　次

第１図　ＳＢ１１出土土器……43
第２図　ＳＢ１１・ＳＢ１２出土遺物……44
第３図　ＳＢ１２・ＳＢ１３出土遺物……45
第４図　ＳＢ１３出土土器(1)……46
第５図　ＳＢ１３出土土器(2)……47
第６図　ＳＢ１３出土遺物……48
第７図　ＳＢ１３出土石器……49
第８図　ＳＢ１３・ＳＢ１４出土遺物……50
第９図　ＳＢ１４・ＳＭ０１出土遺物……51
第10図　ＳＭ０１・ＳＭ０２出土遺物……52
第11図　ＳＭ０２・ＳＭ０３出土土器……53
第12図　ＳＭ０３出土土器……54

第13図　ＳＭ０３・ＳＭ０４周溝出土遺物……55
第14図　ＳＭ０４周溝出土土器……56
第15図　ＳＭ０４周溝出土遺物……57
第16図　ＳＭ０４周溝・ＳＭ０４主体部・ＳＭ０５出土遺物……58
第17図　ＳＫ０１・ＳＫ０３・ＳＫ０５・ＳＩ０１出土遺物……59
第18図　ＳＭ０１出土鉄器……60
第19図　ＳＭ０４出土鉄器……61
第20図　ＳＭ０１・ＳＭ０４墳丘下出土遺物……62
第21図　ＳＭ０４墳丘下出土土器……63
第22図　ＳＭ０４墳丘下・ＳＢ１３上層出土遺物……64
第23図　ＳＢ１３上層出土石器……65
第24図　遺構外出土石器(1)……66
第25図　遺構外出土石器(2)……67
第26図　勾玉・小型石器……68

写真図版目次

図版１　調査前（南西から）　調査前（北西から）……69
図版２　ＳＢ１１　ＳＢ１２……70
図版３　ＳＢ１３　ＳＢ１３遺物出土状態……71
図版４　ＳＢ１４　ＳＢ１４甕出土状態……72
図版５　ＳＭ０１　ＳＭ０１貼石除去後……73
図版６　ＳＭ０１主体部遺物出土状態　ＳＭ０１鉄鏃出土状態　ＳＭ０１土偶出土状態……74
図版７　ＳＭ０２（南から）　ＳＭ０２（東から）……75
図版８　ＳＭ０３（北から）　ＳＭ０３（西から）……76
図版９　ＳＭ０３石検出状態（北から）　ＳＭ０３石検出状態（西から）……77
図版10　ＳＭ０３遺物状態（北から）　ＳＭ０３須恵器長頸壺出土状態
ＳＭ０３土師器高坏出土状態……78
図版11　ＳＭ０４（南西から）　ＳＭ０４墳丘除去後（南西から）……79
図版12　ＳＭ０４主体部検出状態　ＳＭ０４主体部完掘状態　ＳＭ０４主体部遺物出土状態
ＳＭ０４主体部遺物出土状態……80
図版13　ＳＭ０４主体部直刀出土状態　ＳＭ０４主体部直刀出土状態
ＳＭ０４主体部刀子出土状態……81
図版14　ＳＭ０４石組遺構　ＳＭ０４石組遺構直刀出土状態……82
図版15　ＳＭ０４周溝土師器甕出土状態　ＳＭ０４周溝須恵器甕出土状態
ＳＭ０４南東周溝石出土状態……83
図版16　ＳＭ０４墳丘土層　ＳＴ０１（南東から）……84

図版17　ＳＤ０４（西から）　ＳＤ０５・０６・０７・０８、柱穴（北から）……85
図版18　ＳＤ１０（北から）　ＳＤ１１（東から）……86
図版19　ＳＫ０１　ＳＫ０２……87
図版20　ＳＫ０４　ＳＫ０５　ＳＩ０１……88
図版21　ＳＫ０３　ＳＫ０３馬の歯出土状態……89
図版22　ＳＭ０２馬の歯出土状態　ＳＭ０３馬の歯出土状態　ＳＭ０４馬の歯出土状態……90
図版23　南側調査区全景（北から）　南側調査区全景（西から）……91
図版24　南側調査区全景（斜め上空南西から）　南側調査区全景（上空から）……92
図版25　北側調査区全景（斜め上空南から）　北側調査区全景（上空から）……93
図版26　ＳＢ１１磨製石斧　ＳＢ１２石器　ＳＢ１３甕　ＳＢ１３甕　ＳＢ１３台付甕
ＳＢ１３打製石斧　ＳＢ１３打製石斧……94
図版27　ＳＢ１３打製石斧　ＳＢ１３横刃型石包丁　ＳＢ１３有肩扇状形石器
ＳＢ１３横刃型石器　ＳＢ１３石器　ＳＢ１３磨製石鏃未成品　ＳＭ０１砥石……95
図版28　ＳＭ０１石器　ＳＭ０２甕　ＳＭ０２打製石斧　ＳＭ０２石器　ＳＭ０３直口壺
ＳＭ０３甕　ＳＭ０３坏　ＳＭ０３須恵器長頸壺……96
図版29　ＳＭ０３須恵器長頸壺　ＳＭ０３打製石斧　ＳＭ０３石器　ＳＭ０３有肩扇状形石器
ＳＭ０３石器　ＳＭ０３磨製石鏃未成品　ＳＭ０４土師器甑　ＳＭ０４須恵器甕……97
図版30　ＳＭ０４周溝弥生土器壺　ＳＭ０４周溝打製石斧　ＳＭ０４周溝横刃型石器
ＳＭ０４周溝磨製石鏃・同未成品　ＳＭ０４周溝磨製石斧　ＳＫ０３・０５石器……98
図版31　ＳＩ０１打製石斧　ＳＢ１３上層打製石斧　ＳＢ１３上層打製石斧
ＳＢ１３上層横刃型石包丁　ＳＢ１３上層有肩扇状形石器　ＳＢ１３上層横刃型石器
ＳＢ１３磨製石鏃・同未成品　遺構外出土打製石斧……99
図版32　遺構外出土打製石斧　遺構外出土打製石斧　遺構外出土石器　遺構外出土磨製石斧
遺構外出土磨製石鏃・同未成品　遺構外出土石匙　小型石器　ＳＭ０４勾玉……100
図版33　ＳＭ０１鉄鏃　ＳＭ０１刀子……101
図版34　ＳＭ０４主体部直刀　ＳＭ０４主体部刀子　ＳＭ０４鉄斧・刀子……102
図版35　ＳＭ０１土偶（正面）　ＳＭ０１土偶（裏面）　ＳＭ０１土偶（側面）
ＳＭ０１土偶（側面）　ＳＭ０１土偶（上面）……103
図版36　調査スナップ　調査スナップ……104

Ⅰ 経　過

1．調査に至るまでの経過

飯田市は、飯田市松尾新井地区からかねてから要望のあった老朽化した地区の集会施設を国の補助金を利用して新築することを計画した。当該地は埋蔵文化財包蔵地寺所遺跡に該当し、遺跡に影響が及ぶことが考えられた。そこで、飯田市交通防災課・松尾新井区・飯田市教育委員会社会教育課の三者による保護協議を実施した。その結果、遺跡の状況が明らかでないので、試掘調査を実施して、本調査の可否を判断することとした。

試掘調査は平成８年７月10日に実施した。事業予定地に重機によりトレンチを設定したところ、遺構・遺物などが分布することが確認され、本調査が不可欠であることが判明した。そこで、建物部分を対象として発掘調査を実施することとなった。

試掘調査が終了した段階からすぐに本調査の準備にかかり、平成８年度に発掘調査、平成９・10年度に整理作業を実施して発掘調査報告書を刊行することとなった。

2．調査の経過

平成８年７月17日に重機を導入して調査区の拡張を実施し、７月22日には作業員を使っての本調査を開始した。調査当初から遺物の出土が多く、竪穴住居址・墳丘墓・馬の墓などが検出され、順次掘り下げ調査を進めた。並行して写真撮影・図面作成作業を済ませ、８月13日には南側調査区の作業が終了した。当初は建物部分を対象とした南側調査区のみの調査予定であったが、北側に墳丘墓の大半が存在することが判明し、遺構面までが浅く、駐車場の造成で破壊されるおそれが生じたため、北側部分まで拡張することに調査計画を変更した。

北側部分の拡張は平成８年８月22・23日に実施し、耕土直下で墳丘墓主体部らしい箇所が確認された。８月25日には作業員を使っての調査を再開し、墳丘墓・竪穴住居址などの調査を進めた。並行して写真撮影・図面作成作業を済ませ、９月17日には作業員による作業が終了した。その後、調査員による図面作成・遺物取り上げ作業を進め、10月１日には埋め戻しを含めたすべての作業が終了した。作業途中であったが９月１日には現地見学会を実施して、約80名の参加があった。

調査終了後も地元の関心が高く、平成８年11月15日に新井区・新井公民館・新井区史学会共催の講演会、平成９年１月29日に新井区婦人会の講演会の要請があり、それぞれスライドなどを使って遺跡の概要を説明した。

平成９年度は整理作業を実施した。飯田市考古資料館において、出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、遺物実測・写真撮影作業、第２原図の作成・トレース・版組などを行った。

平成10年度は原稿を執筆して本発掘調査報告書を作成した。

3．調査組織

1）調　査

調査担当者　山下　誠一　佐々木嘉和

調　査　員　吉川　豊　馬場　保之　吉川　金利　福澤　好晃　下平　博行
伊藤　尚志　上沼　由彦（平成８・９年度）鳴海　紀彦（平成９年度）
西山　克己（平成10年度）

作　業　員　池田　幸子　岡島　亘　尾曽ちぶき　木下　義男　木下　貞子
木下　力弥　小池千津子　小林　定雄　林　員子　林　悟史
平栗　陽子　佐藤千代子　佐々木　阜　下田芙美子　関島真由美
高橋セキ子　田中　博人　塚原　次郎　中平　隆雄　仲村　信
鳴海　紀彦　原田四郎八　久田　誠　久田きぬゑ　平栗　陽子
福沢　育子　牧内　修　牧内喜久子

2）指　導

長野県教育委員会文化財保護課

3）事務局

飯田市教育委員会社会教育課（平成８年６月30日まで）

横田　穆（社会教育課長）　小林　正春（社会教育課文化係長）
吉川　豊（　〃　文化係）　山下　誠一（　〃　文化係）
馬場　保之（　〃　〃）　吉川　金利（　〃　〃）
福澤　好晃（　〃　〃）　下平　博行（　〃　〃）
伊藤　尚志（　〃　〃）　岡田　茂子（　〃　社会教育係）

飯田市教育委員会博物館課（平成８年７月１日から）

矢沢　与平（博物館課長　平成９年３月31日まで）
小畑伊之助（　〃　平成９年４月１日から）
小林　正春（　〃　埋蔵文化財係長）　吉川　豊（博物館課埋蔵文化係）
山下　誠一（　〃　埋蔵文化財係）　馬場　保之（　〃　〃）
吉川　金利（　〃　〃）　福澤　好晃（　〃　〃）
下平　博行（　〃　〃）　伊藤　尚志（　〃　〃）
牧内　功（　〃　庶務係）

Ⅱ　遺跡の環境

1．自然環境

寺所遺跡の所在する飯田市松尾地区は市街地の南西２～５kmにあり、飯田市のほぼ中央部に位置する。東は天竜川を挟み飯田市下久堅に、北は松川を挟み飯田市上郷に、南は毛賀沢を挟み飯田市竜丘と接し、西は明瞭な地形上の境界はないが、飯田市鼎に接している。

飯田市は赤石山脈と木曽山脈に挟まれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘がみられるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。

松尾地区の場合、地区の東端を天竜川が南流するため、その氾濫原を最下段に５～６段の段丘面で形成されている。それらは高位と低位とに２大別でき、その境は鳩ヶ峯八幡宮の境内を中心とする段丘崖である。

高位の段丘は、前述の段丘崖上に広がる八幡原をはじめとする安定したローム層に覆われた台地上で、その標高は480m前後である。低位の段丘は、前述の段丘崖下から天竜川氾濫原までの間で、松尾地区の大半が該当する。この中は、比高差２～５ｍ程度を測る５～６面の小段丘面があり、標高380～430mである。それぞれの段丘面の広さは一様でないが、いずれも南北方向に段丘崖の存在を確認できる。しかし、上位段丘からの小河川も何本かあり、これらにより、小規模な扇状地形の形成された部分もあり、その箇所においては段丘崖の把握は困難である。

寺所遺跡はこれらの段丘微地形からみると、天竜川氾濫原に面する最も低位の段丘面に立地し、標高は395m前後である。今次調査対象地は1000×400m程の範囲を占める寺所遺跡の北東端部にあたり、北側300mには天竜川支流の松川が東流している。微地形をみると、東側は段差３ｍ程の段丘崖となり、その東側は天竜川の氾濫原となり、新井遺跡が立地している。150m西側にも小段丘があり、その上の段丘面には妙前大塚（３号）古墳の発掘で知られる妙前古墳群が現存する。南側は比較的広い段丘面が広がっており、明遺跡へと続いている。総体とすれば、低位段丘上の遺跡立地となるが、松川の影響も受けており、その自然堤防上にもあたるといえる。

2．歴史環境

松尾地区の遺跡を概観すると、天竜川氾濫原及び段丘崖を除いてほぼ全面的に包蔵地であり、古墳の多い事は特筆され、前方後円墳９基と円墳60余基を数える。また、八幡町の旧道際で会所新築に伴う調査で現在の家並の下より石室の一部を検出し、記録の無いまま消滅した古墳が多数存在したことも推測できる。

松尾地区での遺跡発掘調査としては、学術調査により寺所遺跡の一部が昭和43年１月と昭和46年３月に、昭和46年国の補助事業として妙前大塚（３号）古墳が調査された（飯田市教育委員会1971）のが端

挿図１　寺所遺跡位置図

挿図２　寺所遺跡調査位置図及び周辺図

緒とし、その後は事業実施に伴う緊急発掘調査が増加している。それは、工場新築に伴う南の原遺跡（飯田市教育委員会1972・1974）・毛賀御射山遺跡（飯田市教育委員会1978）・天竜川護岸工事と国道152号取付及び雇用促進住宅建設による清水遺跡（飯田市教育委員会1976・1991Ａ）、松尾地区公民館建設に先立つ松尾城遺跡（飯田市教育委員会1991Ｂ）、中学校プール建設が原因の田圃遺跡（飯田市教育委員会1993Ａ）、送電線鉄塔建設による久井遺跡（飯田市教育委員会1993Ｂ）などが調査報告されている。これら、調査された遺跡はそれぞれ重要な遺構・遺物が発見されており、当地方の歴史解明に大きな意味を持つものが多い。

昭和49・50年、平成２年の清水遺跡、平成元年に行われた松尾城遺跡の調査により、弥生時代後期及び古墳時代前期の集落址が発見され、かなり大規模に、かつ安定した生活が営まれていたと判断される。妙前大塚古墳からは、県宝に指定された「眉庇付冑」が出土し、当地域で最も古い古墳の一つとされる。

南の原遺跡では、中世小笠原氏の重臣居館址と見られる屋敷跡・堀・柵列が調査され、完形の茶臼・天目茶碗等が出土している。

毛賀御射山遺跡からは、平安時代の布目瓦の出土があり、古代寺院の存在が確認できる。

以上が、発掘調査で確認された歴史であるが、中世に入ると諸記録等残っている。鳩ヶ峯八幡宮の神像銘には、建仁３年（1203）より造率立をはじめたとあり、重要文化財になっている。南の原の南端部に築かれた松尾城は、北条氏滅亡後信濃守護職となった小笠原氏の居城で毛賀沢川を隔てた鈴岡城との親族間の確執は史実に明らかである。

歴史的に松尾地区を概観したが、平坦で肥沃な地であり、原始より古代、そして現代まで大いに栄えた地ということができる。

終わりに、寺所遺跡の発掘調査について触れておく。昭和43・46年に小規模な発掘調査がされていて、当地方弥生時代中期前半の「寺所式土器」が型式設定されている（神村1967・佐藤1982）。これを第１次・第２次調査とする。しかし、古い時期の小規模な調査であるという制約があり、今一つその内容や位置づけについて明らかでない部分があった。その後、平成５年に寺所地区コミュニティー施設建設に先立ち実施された発掘調査により、寺所式土器が大量に出土しており、報告書の刊行によりその内容が明らかになると期待されている。これを第３次調査とする。よって、今次調査は、寺所遺跡の第４次調査となる。

Ⅲ　調査結果

1．調査の方法と概要

当初は建物部分を対象として調査区を設定し、北側の駐車場部分は調査対象外であった。調査を進めると墳丘墓の大半が駐車場部分にかかり、破壊されるおそれがでたため、北側部分も拡張して調査することとなった。

測量用の基準杭設置は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、㈱ジャステックに委託して実施した。なお、基準メッシュ図の区画については『三尋石遺跡　三尋石（Ⅱ）遺跡』（飯田市教育委員会1996）に詳しく記述されているので、そちらを参照していただきたい。本調査地の区画は挿図４で示したようにＬＣ８５　１３―１９である。

今次調査で検出された遺構は以下のとおりである。

墳　丘　墓……５基
竪穴住居址……４軒
掘立柱建物址……１棟
溝　　址……10本
土　　坑……５基
集　　石……１基
埋　葬　馬……４頭

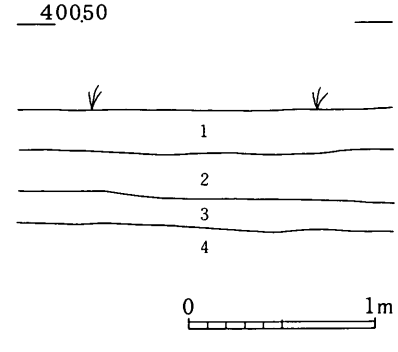
2．遺構と遺物

(1)　基本層序

ＳＭ０５周溝北西側、用地外との北東に面する壁面の層序を挿図４で示した。

１層：褐灰色土（10ＹＲ4/1）、耕土
２層：灰黄褐色土（10ＹＲ4/2）、旧耕土
３層：黒褐色土（10ＹＲ3/2）
４層：にぶい黄褐色砂土（10ＹＲ5/4）

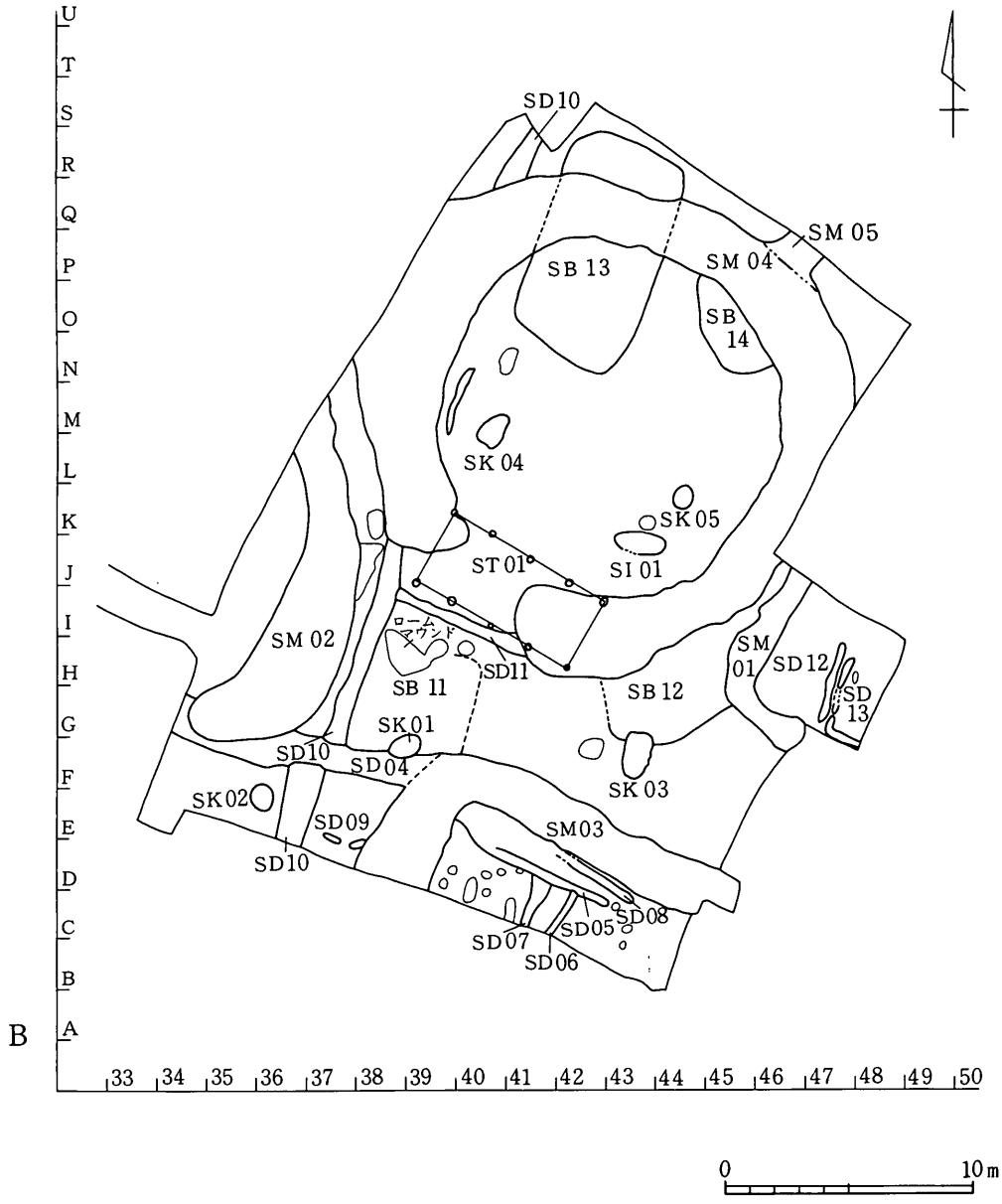
遺構検出面は基盤の４層上面で、比較的容易に検出できた。松川の自然堤防上に立地するため、全体に粘性が弱い砂質土であり、遺構壁面等が崩れやすい土質であった。



１．褐灰色土（10ＹＲ4/1）…耕土
２．灰黄褐色土（10ＹＲ4/2）…旧耕土
３．黒褐色土（10ＹＲ3/2）
４．にぶい黄褐色砂土（10ＹＲ5/4）

挿図３　寺所遺跡基本土層図

挿図４　基準メッシュ図区画及び調査位置



挿図５　寺所遺跡遺構全体図

(2) 竪穴住居址

① ＳＢ１１（挿図６、第１・２図、図版２・26）

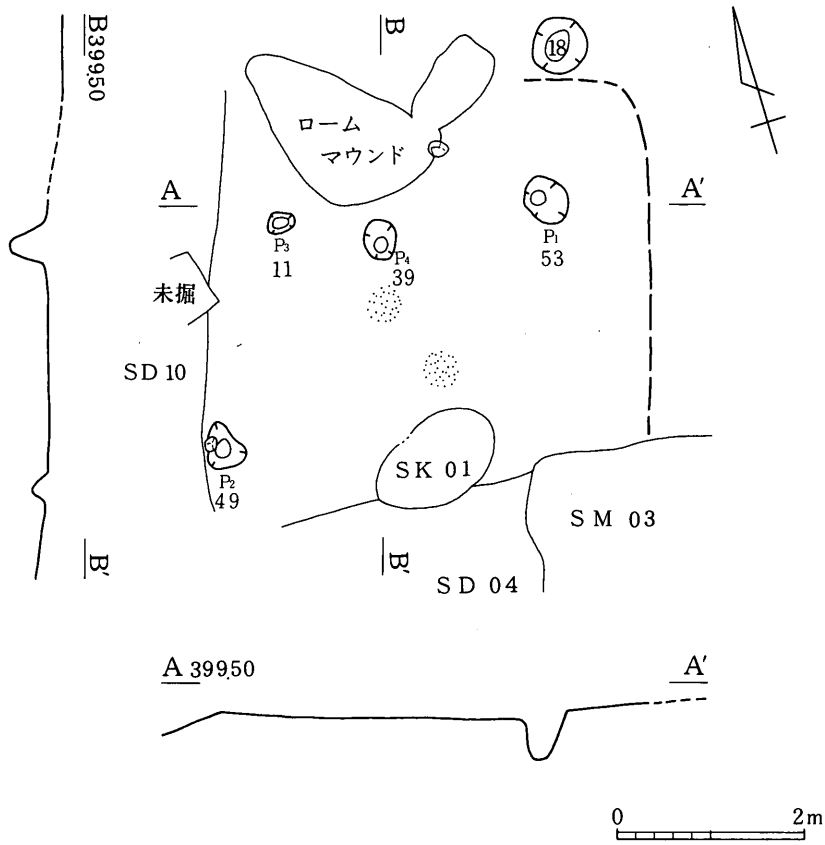
遺構　ＢＧ38・39を中心にして検出した。上層調査時から比較的遺物の出土が多く、竪穴住居址の存在は予想された。しかし、土層による落ち込みが確認できなかったために、床面調査によってようやく本址と断定できた。古墳時代中期のＳＭ０３、時期不明のＳＤ０３・１１に切られる。規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址で、壁面は残存せずに東壁の点線は推定による。床面は中央部がわずかに窪んでおり、全体が砂層であるために軟らかくきわめて不良である。主柱穴はＰ１・Ｐ２と考えられるが、全体形が明らかでないので断定はできない。炉址は床中央部２箇所に直径40cm程の焼土が確認され、地床炉と考えられる。

遺物　土器・石器があり、本址付属遺物として把握できた遺物は少なかったので、上層グリット出土遺物も含めてある。壺（１－１～29）は櫛描横線文に篦による連続山形文や列点文が施されるものが主体を占め、櫛描文での組み合わせの例（25～27）は少ない。他に、縄文と篦描文による施文の個体（28）がある。甕（１－30～54、２－１～８）は細かい櫛描の単方向の条線文が最も多く、縄文（２－１～３）や櫛描波状文（２－４～６）が施文される個体がわずかにみられる。

石器は扁平片刃磨製石斧（２－10）がある。

先行する時期からの紛れ込み遺物として、縄文時代早期押型文土器（２－９）がある。

出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。



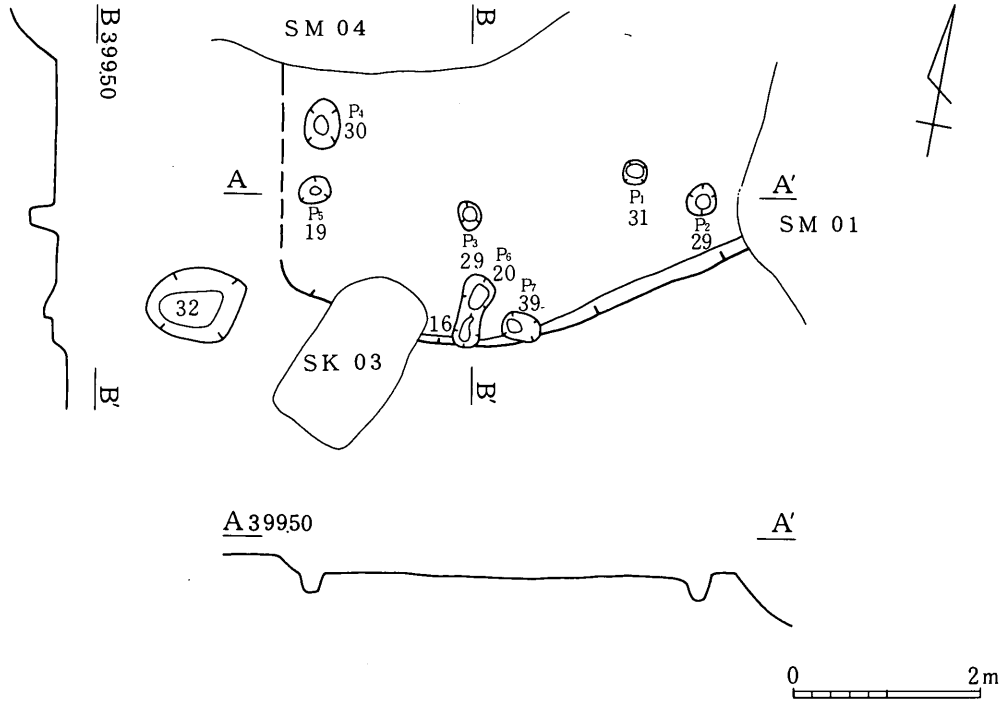
挿図６　ＳＢ１１

② ＳＢ１２（挿図７、第２・３図、図版２・26）

遺構　ＢＧ・H44を中心にして検出した。古墳時代中期のＳＭ０１・０４に切られる。規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址で、壁面は壁高８～４cmを測る南壁のみを把握した。床面はほぼ平坦で、全体が砂層であるために軟らかくきわめて不良である。柱穴はＰ１～Ｐ７を検出し、Ｐ３が主柱穴と考えられる。炉址は確認できなかった。

遺物　土器・石器があり、本址付属遺物として把握できた遺物は少なかったので、上層グリット出土遺物も含めてある。壺（２－11～35）は櫛描横線文に箆描文が組み合わされるものがほとんどで、櫛描横線文のみの個体（11・14）がわずかに認められる。甕（２－36～42）は細かい櫛描条線文が単方向に施文される。他に台付甕の脚台部（２－43）がみられる。石器は、打製石斧（３－１・２）・横刃型石庖丁（３－３）・横刃型石器（３－４）・凹石（３－５）・側面に擦り切り痕のある石器未成品（３－６）がある。

出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。



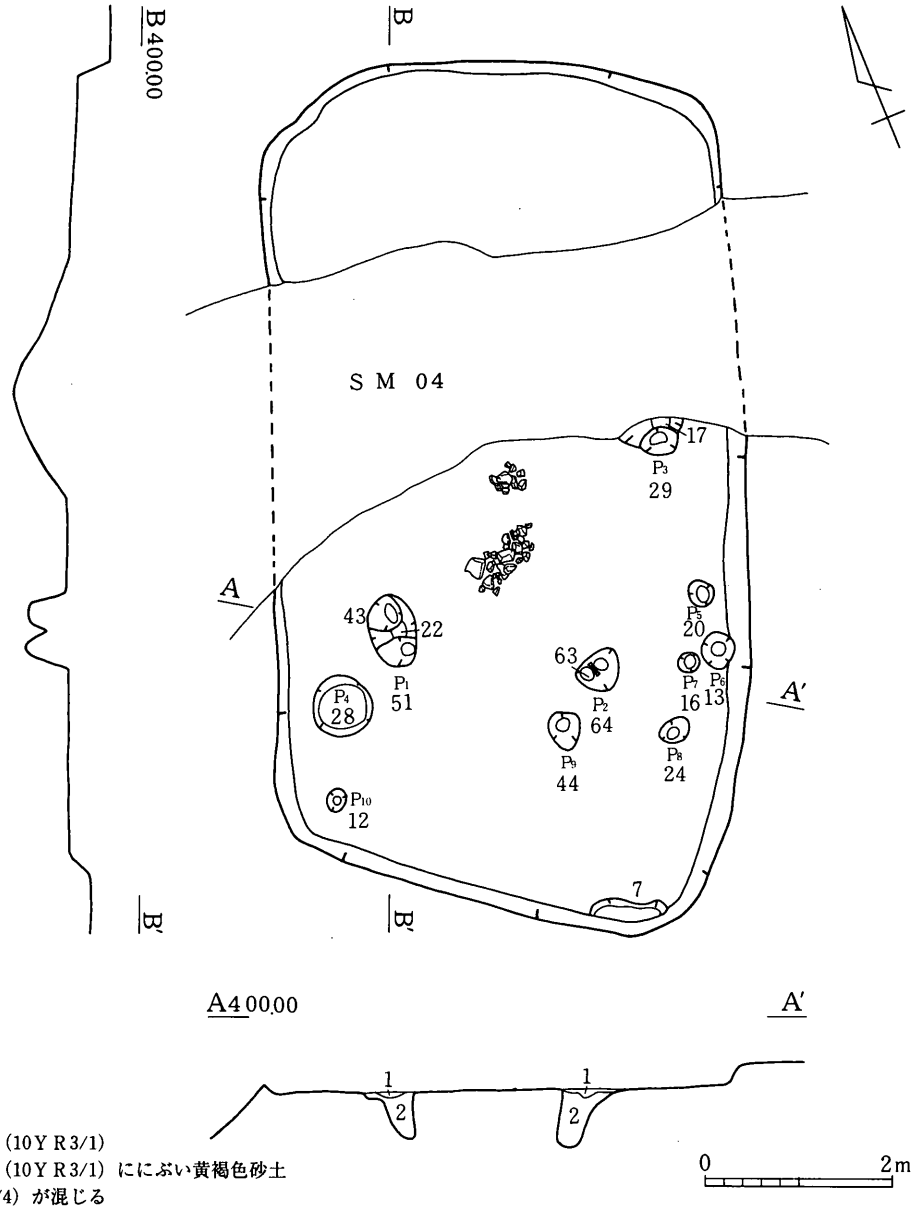
挿図７　ＳＢ１２

③ ＳＢ１３（挿図８、第３～８・22・23図、図版３・26・27・31）

遺構　ＳＭ０４墳丘下のＢＯ42を中心にして落ち込みを検出し、同周溝北側のＢＲ43付近で同様の落ち込みを確認して同一遺構と判明した。古墳時代中期のＳＭ０４に切られる。8.8×5.0mの隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN18°Ｅを示す。壁高は34～４cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はほぼ平坦で、全体が砂層であるために軟らかくきわめて不良である。主柱穴はＰ１・Ｐ２で、穴の重複からいずれも新旧２本の柱を立てたと考えられる。穴は内傾させて掘られており、やや外側に傾けて

柱が立てられたと推定される。その他の穴で役割が特定できたものはない。北側主柱穴及び炉址はＳＭ０４周溝部分にあったものか、確認できなかった。

遺物　土器・石器がある。主に壁沿いの床面上から出土しており、一括性の高い比較的良好な資料である。壺（３－７～28、４－１～32）は大半が櫛描横線文と箆描文が施文される。甕（４－33・34、５－１～38、６－１～25）はほとんどが細かい櫛描条線文が施文される。図化できた個体が３点あり、頸部から緩く外反する口縁部を持つ器形（４－33・34）と深鉢形を呈する台付甕（５－１）である。内・外面とも丹彩される鉢が２点（４－26・27）あり、口縁部がやや受け口状をなす個体（26）は壺の可能性もある。石器（６－28～30、７－１～15、８－１～16）は、打製石斧（６－28～30、７－１～８）・横刃型石庖丁（７－９～12）・有肩扇状形石器（７－13・14）・横刃型石器（７－15、８－１～６）・打製石錐（８－７）・敲打器（８－８）・磨製石鏃（８－10）・磨製石鏃未成品（８－11～16）がある。



挿図８　ＳＢ１３

他に、本址遺構検出面より上層で出土し、グリット出土遺物として扱った石器がある。遺構把握にやや手間取ったこともあり、本址と関連する可能性が高いので第22・23図で示し、ここで記述する。打製石斧（22－12～21）・横刃型石庖丁（23－１～６）・有肩扇状形石器（23－７～10）・横刃型石器（23－11～14）・磨製石斧（23－15～17）・磨製石鏃（23－18）・磨製石鏃未成品（23－17～26）がある。

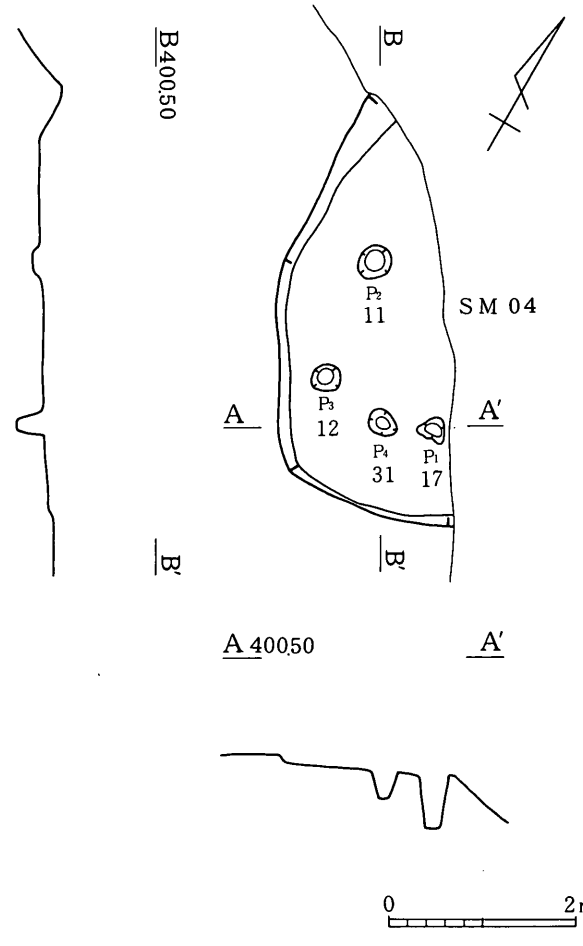
出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。

④　ＳＢ１４（挿図９、第８・９図、図版４）

遺構　ＳＭ０４墳丘下のＢＯ45付近で南隅と南東壁と北西壁の一部を検出し、竪穴住居址と判明した。古墳時代中期のＳＭ０４に切られる。規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は24～８cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は全体が砂層であるために軟らかくきわめて不良である。主柱穴はＰ４と考えられるが、全体形が不明であるので断定はできない。その他の穴で役割が特定できたものはない。

遺物　土器がある。壺（８－17～22、９－１）はラッパ状に開く口縁（８－17）と受け口口縁（８－18）があり、櫛描文と箆描文が施文される。甕（９－２～14）はほとんどが細かい櫛描条線文が施される。完形に図化できた個体（９－２）は、胴中央部に最大径を持ち、口唇部に縄文・胴部内外面は細かいハケ調整が施される。

出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。

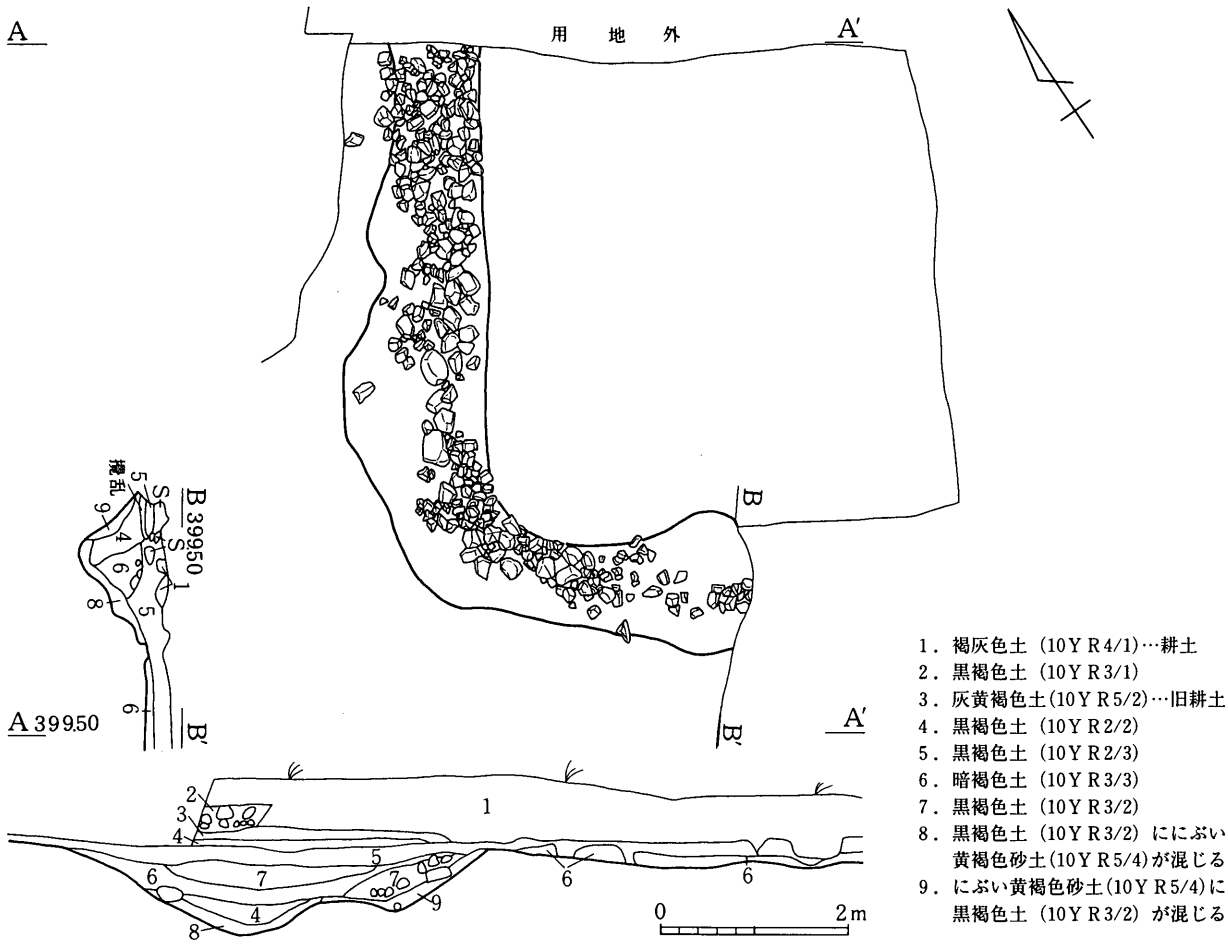


挿図９　ＳＢ１４

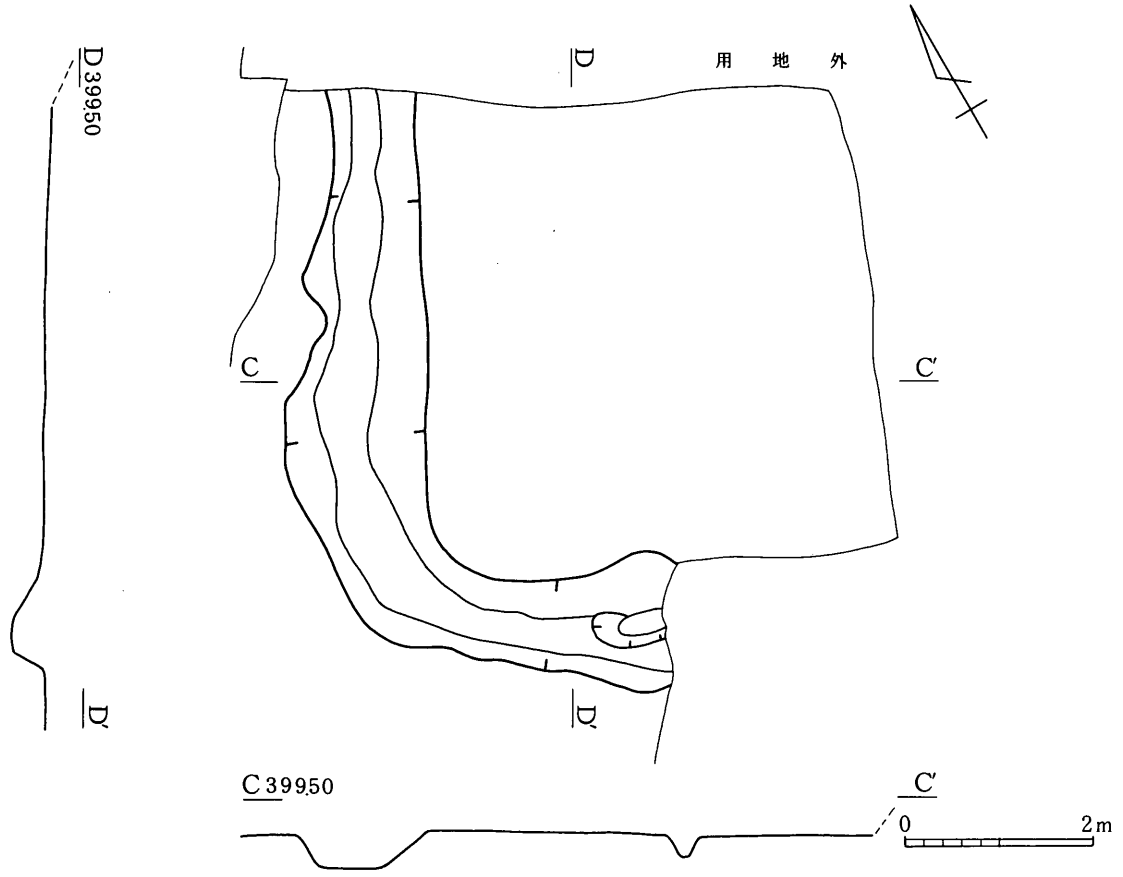
(3) 墳丘墓

①　ＳＭ０１（挿図10・11、第９・10・18・20図、図版５・６・27・28・33・35）

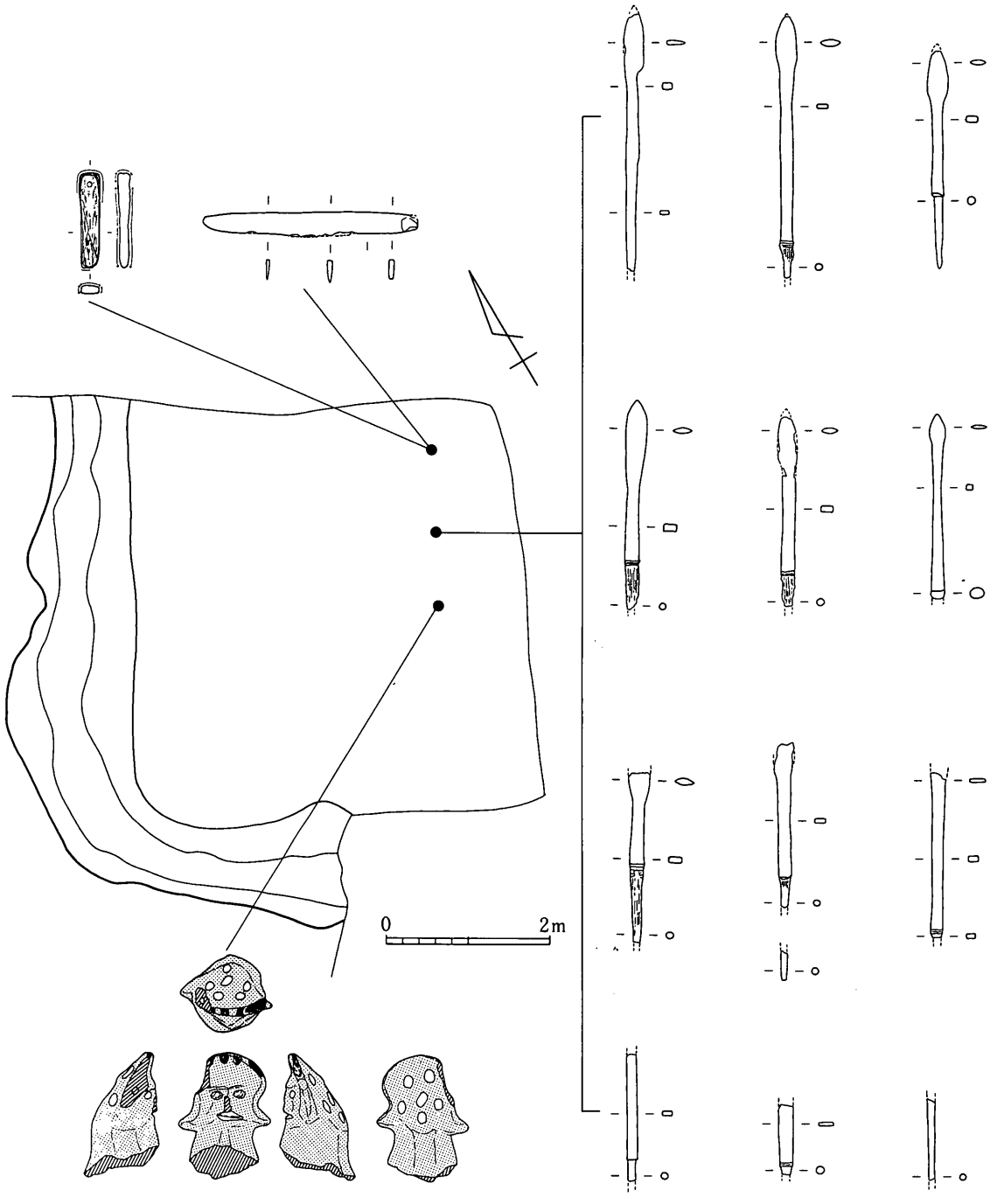
遺構　調査区東端で南西側周溝3.5m・北西側周溝5.5mを検出し、北東・南東側は用地外で調査できなかった。規模・主軸方向とも不明の方形の墳丘墓で、古墳時代中期のＳＭ０４に切られる。周溝は南西側で幅1.5～0.4m・深さ41～27cm、南西側で幅1.5～0.9m・深さ59～35cmを測り、逆台形の断面形をなす。周溝内には、40～５cmの石が多量にあり、周溝内側に多い傾向が認められる。この石は本来の位置に残っているものはないが、墳丘墓周溝から墳丘に貼られた石が、周溝内に転落して残ったものといえる。



1．褐灰色土（10Y R 4/1）…耕土
2．黒褐色土（10Y R 3/1）
3．灰黄褐色土（10Y R 5/2）…旧耕土
4．黒褐色土（10Y R 2/2）
5．黒褐色土（10Y R 2/3）
6．暗褐色土（10Y R 3/3）
7．黒褐色土（10Y R 3/2）
8．黒褐色土（10Y R 3/2）ににぶい黄褐色砂土（10Y R 5/4）が混じる
9．にぶい黄褐色砂土（10Y R 5/4）に黒褐色土（10Y R 3/2）が混じる



挿図10　ＳＭ０１



挿図11　ＳＭ０１主体部遺物出土状態

土層図は北東側用地外のものを提示したが、耕作の攪乱が検出面直上まで認められ、墳丘の有無の確認はできなかった。

主体部　周溝内側のＢＨ48で鉄鏃13点・刀子１点・砥石１点が出土した。その直上まで耕作の攪乱を受けていて、遺構としての把握はできなかったが、主体部に副葬された遺物と考えられる。よって、この位置付近に主体部があったと想定される。鉄鏃はまとまって出土しており、胡籙に入れられた状態で埋納されたと想定される。鉄鏃出土位置が主体部の底部とすれば、掘り方はかなり上面から掘られていると推定され、墳丘があったことが考えられる。刀子と砥石は並んで出土した。なお、主体部付近から出土した遺物については、挿図11でその状態を示した。

遺物　土器・石器・鉄器があり、周溝内と主体部から出土している。本址に直接付属する遺物は、周溝から出土した土師器甕（９－15・16)、主体部の鉄鏃（18－１～13)・刀子（18－14)・砥石（９－17）である。鉄鏃はすべて長頸鏃で、頸部・鏃身部が残存する個体が11点、茎部のみが残存する個体が２点あり、後者が前者に接合することも考えられるので、最低11点があったことが考えられる。鏃身部の形態から片刃鏃（１）と長三角形鏃（２～８）がある。茎部に樺（２・４・５・７・９・11）や木質（２・４・５・７・９）が残っている個体があり、矢柄に装着した状態で埋められたと想定される。刀子は鹿角装の柄が装着されていたと考えられ、わずかにその痕跡が認められる。

その他は先行する時期からの混入遺物で、土器は、縄文時代早期押型文土器（10－１）・弥生土器壺（10－２）・同甕（10－３～10）である。石器は、打製石斧（10－11・12)・横刃型石器（10－13)・大型粗製石匙（10－14)・磨製石錐（10－15）がある。他に、主体部想定箇所付近のＢＨ48から弥生時代中期の土偶頭部（20－１）が出土した。全体が赤彩され、頭部には髪を表現した黒色顔料が塗られ、頭部裏面は竹管による刺突がある。

出土遺物から古墳時代中期に位置づけられる。

②　ＳＭ０２（挿図12、第10・11図、図版７・28)

遺構　調査区西端で周溝14mを検出し、西側は調査区外で調査できなかった。南周溝の上面をＳＤ０４に切られる。規模・主軸方向とも不明の墳丘墓である。周溝は調査した範囲で幅3.5～1.5m・深さ108～44cmを測り、逆台形の断面形をなす。南側で溝が途切れて陸橋部をなすが、その幅は西側の調査区外にかかるため不明である。周溝内に40～５cmの石が認められたが量は少なく、周辺からの転落と考えられ、貼石はなかったと判断できる。土層図は西側のものを一部提示した。１層から４層は水田及び旧水田面と把握され、６層から８層が旧地表面と考えられる。周溝内側で水田耕土と旧地表面の層が斜めに分かれており、墳丘があったためにこうした層位となったと考えられる。人為的な盛り土部分は確認できなかったが、何らかの墳丘があったといえる。

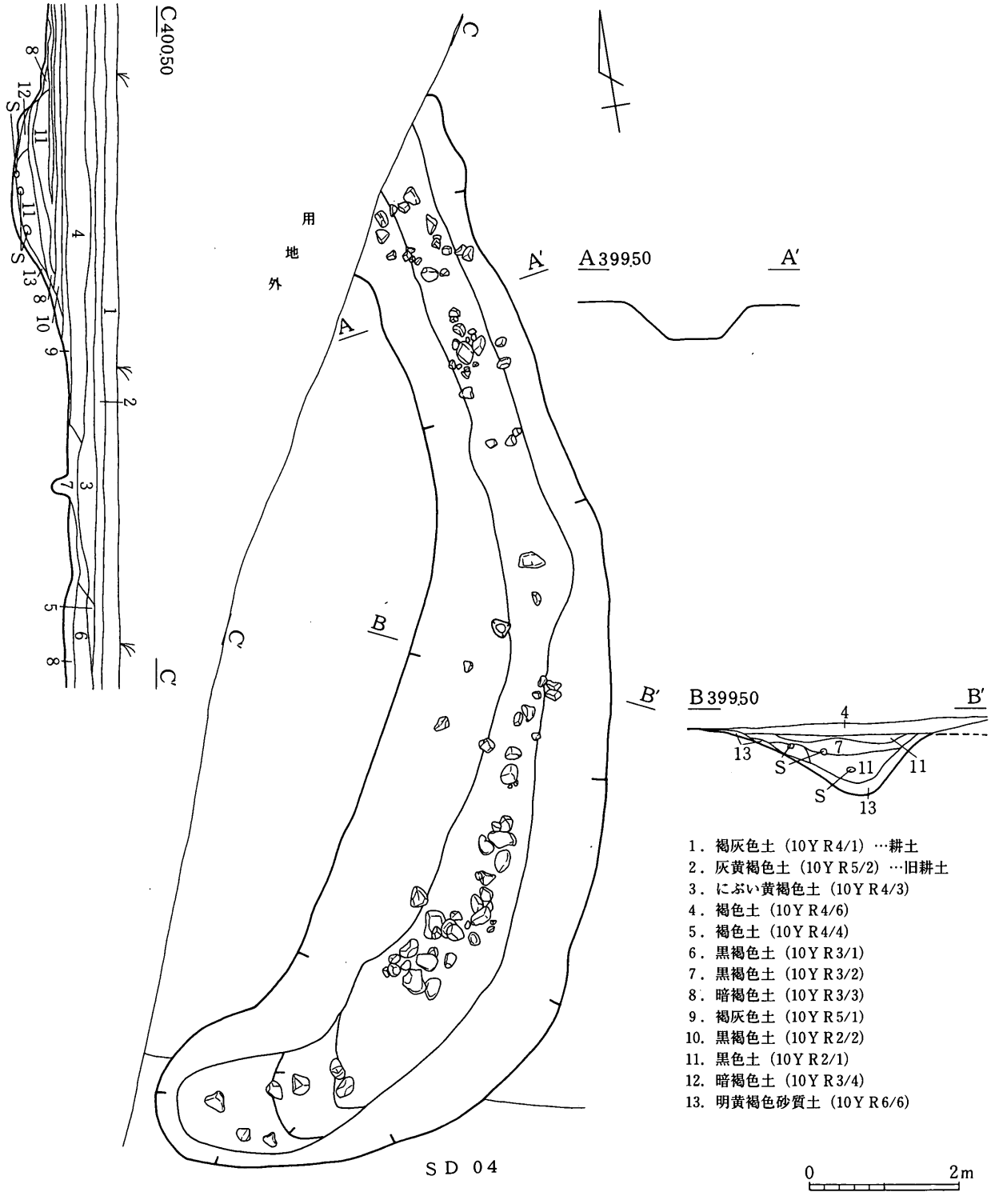
平面形であるが、全体が調査できなかったので判断には困難が伴うのであるが、周溝外側の形態が丸みを帯びることからすれば、円形の墳丘墓とするのが妥当といえる。

埋葬施設は確認されなかった。西側調査区外に存在すると想定される。

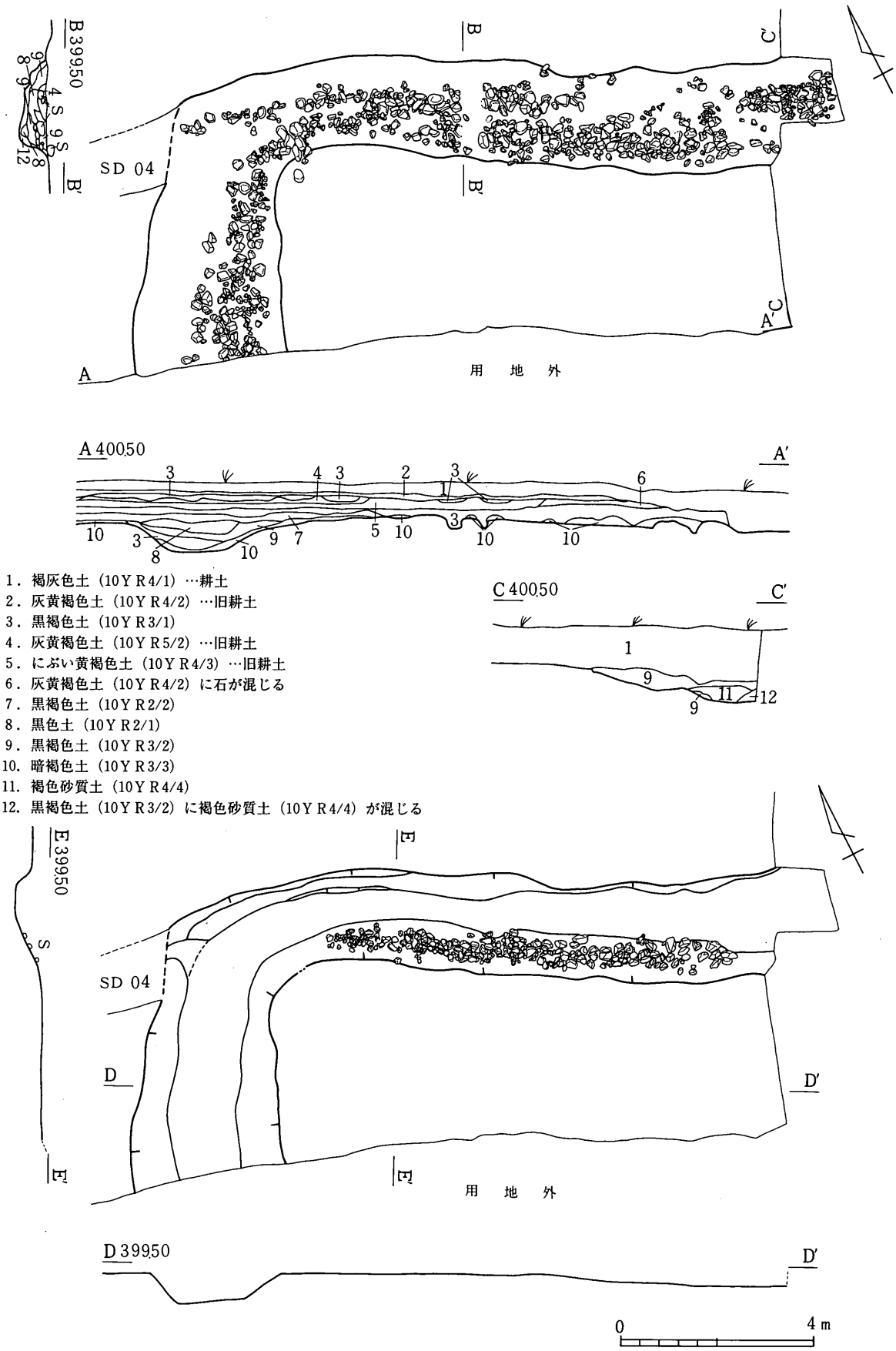
遺物　土器・石器があり、周溝内から出土した。土師器甕（10－16)・坏（10－17）が本址に直接関係する遺物といえ、底部からやや浮いた位置から出土した。他には、縄文時代押型文土器（10－18)・弥生時代中期壺（10－19～23)・同甕（10－24・25)・糸切り高台の須恵器坏（10－26)、打製石斧（11－１～３)・横刃型石庖丁（11－４)・打製石錐（11－５)・有肩扇状形石器（11－６)・磨製石斧（11－７)・磨製石鏃（11－８)・同未成品（11－９・10）がある。

他に、北側の周溝内ＢＬ37から馬の歯が出土した。これについては、その他の馬の歯と一括して別項で記述する。

出土遺物から古墳時代中期に位置づけられる。


C 400.50
C
用
地
外
A
A'
A 399.50
A'
B
B'
B 399.50
B'
SD 04
1. 褐灰色土（10YR4/1）…耕土
2. 灰黄褐色土（10YR5/2）…旧耕土
3. にぶい黄褐色土（10YR4/3）
4. 褐色土（10YR4/6）
5. 褐色土（10YR4/4）
6. 黒褐色土（10YR3/1）
7. 黒褐色土（10YR3/2）
8. 暗褐色土（10YR3/3）
9. 褐灰色土（10YR5/1）
10. 黒褐色土（10YR2/2）
11. 黒色土（10YR2/1）
12. 暗褐色土（10YR3/4）
13. 明黄褐色砂質土（10YR6/6）
0
2m

挿図12　SM02

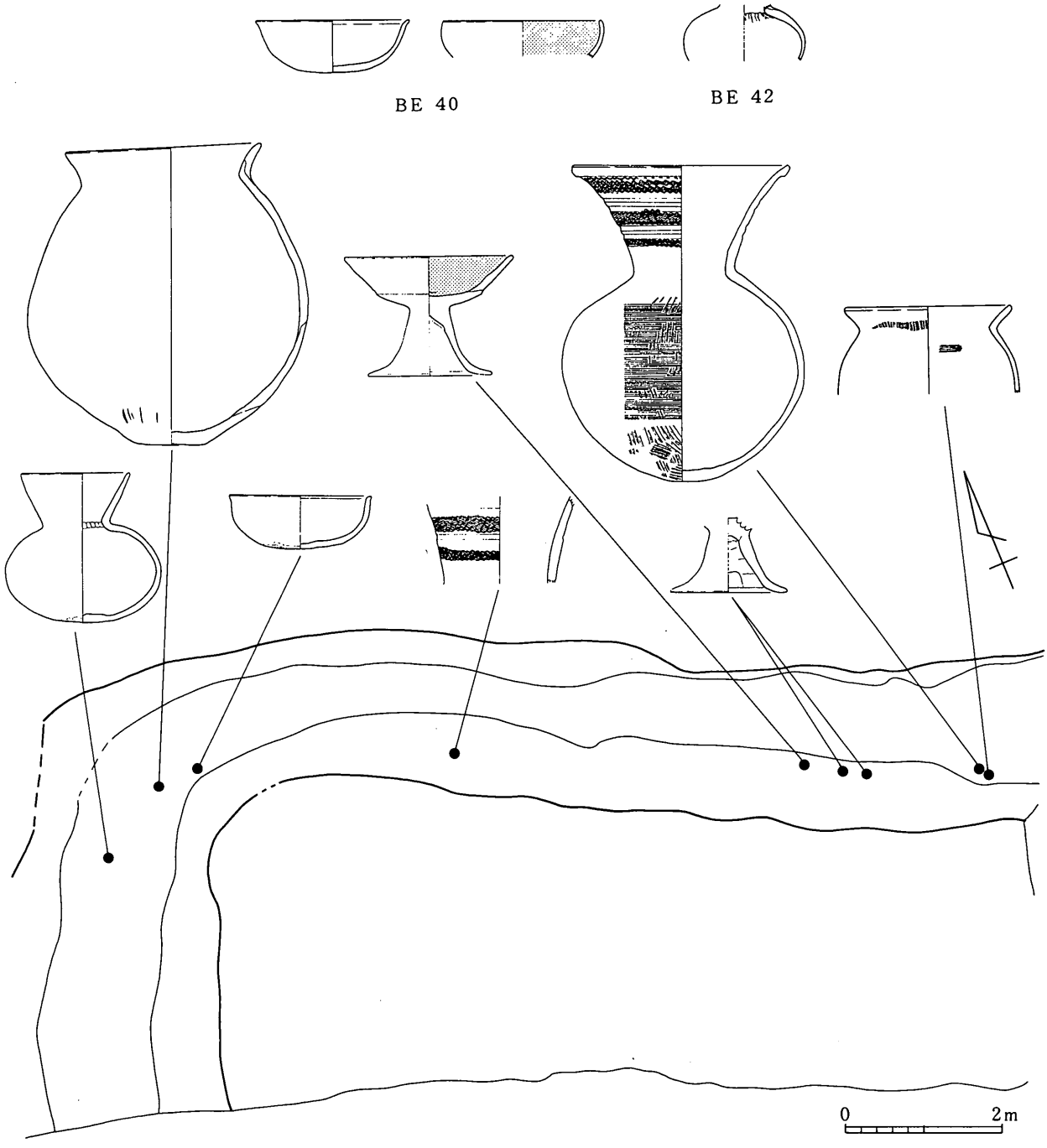


1．褐灰色土（10Y R4/1）…耕土
2．灰黄褐色土（10Y R4/2）…旧耕土
3．黒褐色土（10Y R3/1）
4．灰黄褐色土（10Y R5/2）…旧耕土
5．にぶい黄褐色土（10Y R4/3）…旧耕土
6．灰黄褐色土（10Y R4/2）に石が混じる
7．黒褐色土（10Y R2/2）
8．黒色土（10Y R2/1）
9．黒褐色土（10Y R3/2）
10．暗褐色土（10Y R3/3）
11．褐色砂質土（10Y R4/4）
12．黒褐色土（10Y R3/2）に褐色砂質土（10Y R4/4）が混じる

挿図13　ＳＭ０３

③　ＳＭ０３（挿図13・14、第11～13図、図版８～10・28・29）

遺構　調査区南東端で北東側周溝14m・北西側周溝5.5mを検出し、東・南側は用地外で調査できなかった。規模・主軸方向とも不明の方形の墳丘墓で、古墳時代以降のＳＤ０４に切られる。周溝は北東側で幅2.1～1.8m・深さ49～17cm、北西側で幅3.2～2.2m・深さ74～58cmを測り、逆台形の断面形をなす。周溝内には、40～５cmの石が多量にあり、周溝内側に多い傾向が認められる。大半が周溝底面・側面からやや浮いた位置にあり、墳丘墓周溝から墳丘に貼られた石が、周溝内に転落して残ったものといえる。こうした石を除去して本来の位置に残っていた貼石を把握すると、北西周溝で８m程確認できた。周溝底面付近の側面に80cm程度貼られており、転落石の量からすれば更に墳丘部にも続いていたことが考えられる。土層図は南東側用地外のものを提示した。１・２・４・５層は水田面及び旧水田面と考え



挿図14　ＳＭ０３遺物出土状態

られ、遺構検出面直上にある３層が旧地表面と想定される。周溝から周溝内側にかけてこの３層が厚くなって盛り上がっていく状況が観察でき、墳丘との関連が考えられる。人為的な盛土層は把握できなかったが、前述した貼石の状況も考慮すれば、何らかの墳丘があったと判断できる。

埋葬施設は確認されなかった。

遺物　土器・石器があり、周溝内から出土した。本址に直接関連する遺物の出土状態は挿図13で示した。土師器壺（11－11・12）・同甕（11－13・14）・同坏（12－１～３）・同高坏（12－４・５）・須恵器長頸壺（11－６・７）がある。北隅を中心として土師器壺・甕・坏、北東周溝に土師器高坏・須恵器長頸壺があり、いずれも転落した石の間から壊れた状態で出土しており、調査範囲で周溝内における２回の祭祀行為があったことが考えられる。

他に、弥生時代中期壺（12－８～13）・同甕（12－14～22）、打製石斧（13－１～３）・横刃型石庖丁（13－４）・有肩扇状形石器（13－５～７）・磨製石斧（13－８）・磨製石鏃未成品（13－９・10）・掻器（13－11）・礫器（13－12）がある。

出土遺物から古墳時代中期に位置づけられる。

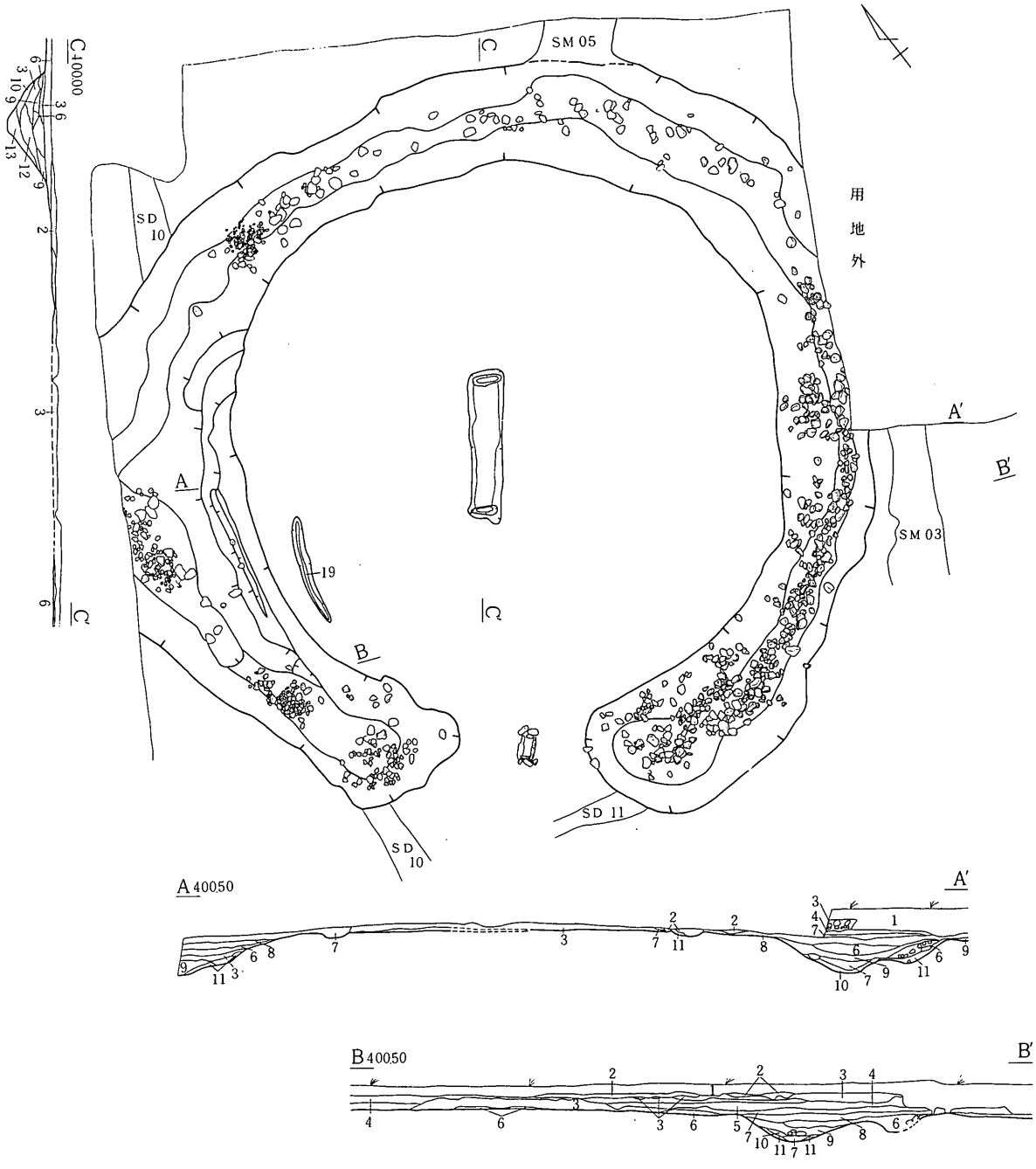
④　ＳＭ０４（挿図15～18、第13～16・19図、図版11～16・29・30・34）

調査の経過　当初は建物部分を対象として調査区を設定し、駐車場予定地の北側はトレンチ調査で状況を確認する予定であった。その段階の調査でＳＭ０４の周溝と陸橋部が確認され、かなり規模の大きな墳丘墓が北側に存在することが判明した。土層から遺構面が浅いことも確認されたので、急遽北側部分も調査対象に含めることとした。南側の調査が終了した段階でＳＭ０４のほぼ全体が確認できるよう調査区を拡張した。西側・東側の周溝の一部が確認できなかったが、ほぼ全体を調査することができた。古墳時代中期のＳＭ０３・０５を切り、ＳＤ１０に切られる。

周溝　全体形は、南西側ＢＩ・Ｊ40で3.2mの陸橋部が認められ、それ以外で周溝がほぼ円形に巡っている。幅は3.0m以上～1.8m・深さ113～72cmを測り、逆台形の断面形をなす。西側は調査区外にかかって幅の確認ができないが、その他の幅に比べると広くなっている。土層の埋没状態は規則的な堆積をなし、自然埋没と考えられる。周溝内には、40～10cmの天竜川の河原石が大量に認められ、南から東周溝の12m程の範囲が特に顕著に確認された。その出土位置は、検出面下から底部に密着するものまであった。その他は底面に密着するものはなく、周溝覆土中に散在していた。その性格であるが、数量と全体に粗密が認められることから、貼石の転落等は想定できない。ただし、集中する部分では底面や側面に並べられたような状況も確認されているので、何らかの人為的な意図があったとも考えられる。

周溝内からは、土器・石器・鉄器・玉類が出土した。本址と直接関連する遺物には、土師器甕（13－13）・手づくね（13－14）、須恵器甕（13－16）、鉄斧（19－５）・勾玉（26－１）がある。

甕は西側周溝ＢＯ39の底付近から置かれたような状態で出土した。須恵器甕は北側周溝ＢＱ42の底面から20cm程浮いた位置で細かく破壊された状態で確認され、その周辺や間には比較的多く石が認められた。また、同じ場所から手づくねも出土した。いずれも、周溝内での祭祀行為が想定される。鉄斧は西側周溝ＢＮ38の上層から出土し、本来の位置で確認されたのではなく、周溝が埋まった段階で墳丘上から転落したものと考えられる。勾玉は北西側周溝ＢＰ45底面から50cm程上面の北側壁面に近い位置から出土した。



1．褐灰色土（10Y R4/1）…耕土
2．灰黄褐色土（10Y R4/2）…旧耕土
3．黒褐色土（10Y R3/1）
4．灰黄褐色土（10Y R5/2）…旧耕土
5．にぶい黄褐色土（10Y R4/3）…旧耕土
6．黒褐色土（10Y R3/2）
7．黒褐色土（10Y R2/2）
8．黒褐色土（10Y R2/3）
9．暗褐色土（10Y R3/3）
10．黒褐色土（10Y R3/2）ににぶい黄褐色砂土（10Y R4/3）が混じる
11．にぶい黄褐色砂土（10Y R4/3）に黒褐色土（10Y R2/2）が混じる
12．黒色土（10Y R2/1）
13．灰黄褐色砂土（10Y R4/2）

挿図15　ＳＭ０４

墳丘　現況では水田として利用されていたので、墳丘は確認できなかった。しかし、土層図B～B′で示した表土からの層位では中央部に黒褐色（10ＹＲ3/1）が平たいお椀を伏せたような形で高まっており、墳丘が残存したと想定される。その横の層位は水平堆積をなして水田耕土等と考えられ、周囲の耕地化に従って墳丘を削平していって、わずかに中央部が残ったものと考えられる。こうした想定を裏付けるように、調査中に複数の地権者から、明治時代には墳丘状の高まりがあったと伝えられているとの証言が得られている。また、次で記述する主体部の検出位置からも墳丘の存在は確実なものである。

挿図16　ＳＭ０４墳丘・周溝測量図

主体部　墳丘のほぼ中央部ＢＬ42～ＢＭ46の表土下３層黒褐色上面で検出した。3.7×0.8mの長方形を呈し、主軸方向はＮ40°Ｅを示す。検出面からの深さは８～５cmを測り、底面はわずかに船底状に窪んでいた。北西端に長さ78cm・幅24cm・深さ４cm、南東端に長さ66cm・幅18cm・深さ９cmの小口痕が認められる。小口痕間の長さは3.2mを測る。底面下の断ち割り調査を実施したが、粘土は確認できなかった。

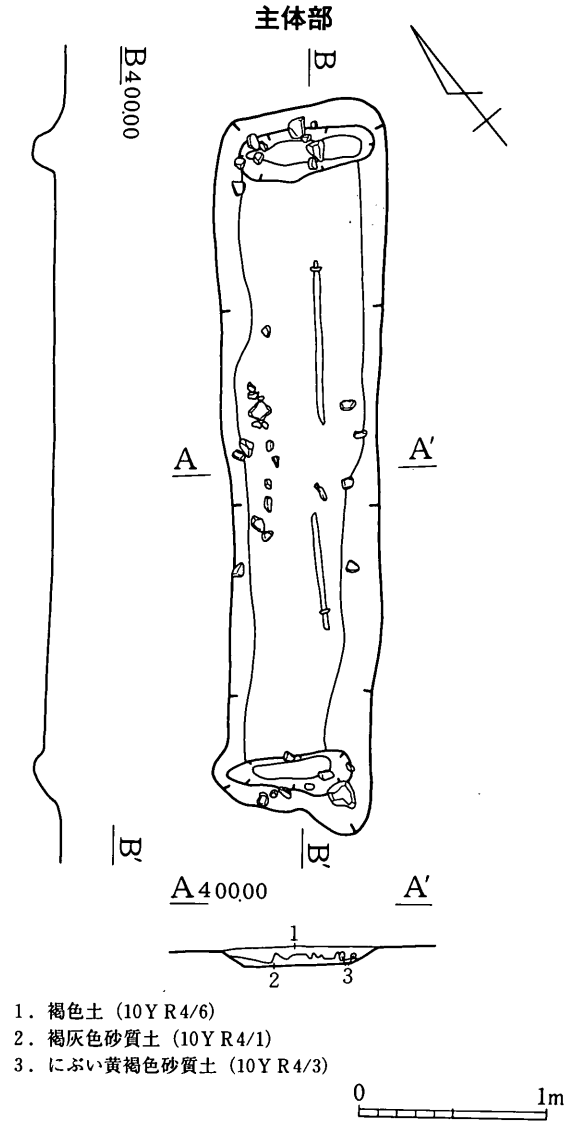
出土遺物は、北西側に残存長さ84.5cmの直刀（19－１）、南東側に残存長さ65.5cmの直刀（19－２）があり、中央部南東壁寄りから刀子（19－３）が出土した。刀子脇からはわずかに骨片も認められ、その周辺の土から微細な骨片が確認できた。棺内に遺体と共に埋納された遺物が残ったものと考えられる。

以上が主体部の様相であるが、確認できた範囲の形状から推定すれば、棺材は割竹形木棺が使われていたことが推定される。全体からすれば割竹形木棺が置かれた底面とその上部わずかが把握できたものといえ、土壙の全体は耕作の削平を受けて把握できなかった。

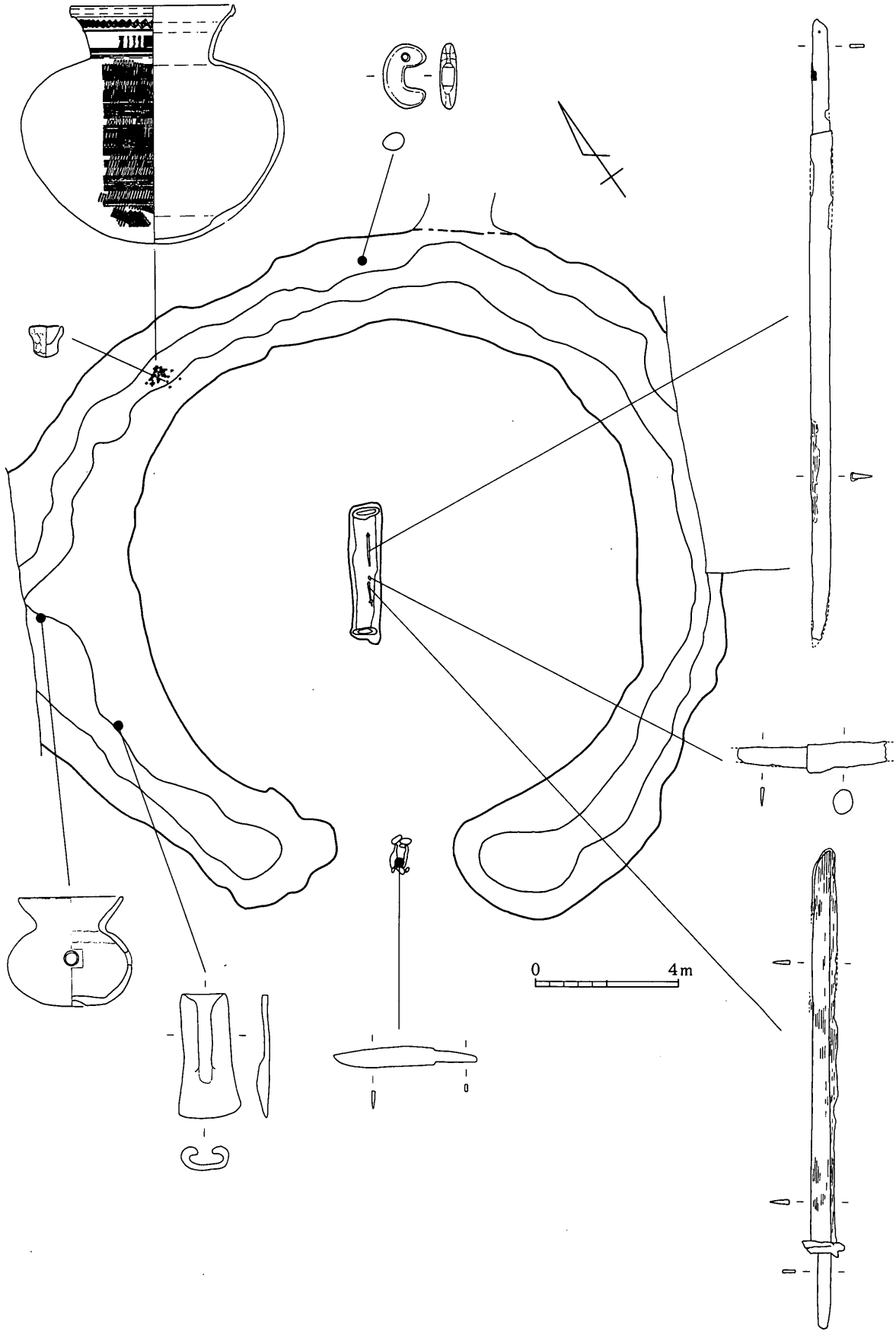
石組遺構　陸橋部ＢＪ40で石組施設を検出し、墳丘墓に関連する遺構と考えて調査した。北西側に長さ66cm・幅15cm、南東側に長さ62cm・幅９cmのいずれも細長い石を用いて側面となし、北東側は内側に長さ19cm・幅８cmのやや小さい石を使って区画し、その外側に長さ28cm・幅15cmと長さ26cm・幅15cmの石を置いている。南西側は長さ23cm・幅６cmの石で壁をなし、その外側に長さ25cm・幅12cm、長さ15cm・幅11cm、長さ12cm・幅12cmの石３個を置いている。石の間には小さな石１個が補強用に入れられている。石は地山を石の形に掘り込んで埋めており、内部の層位は基本的には２層に分けられる。内径は50×20cm・外径は100×43cm・深さは17cmを測り、長軸方向はＮ50°Ｅを示す。

刀子１点（19－４）が出土した。

遺構の性格であるが、鉄器が出土したこともあり、墳丘墓に関連した埋納施設と考えられる。ただし、鉄器１点のみの埋納したとは考えられず、他にも何かが埋められたことも想定される。



挿図17　ＳＭ０４主体部・石組遺構



挿図18　ＳＭ０４遺物出土状態

以上が各遺構の様相であるが、墳丘の内径は14×13.5m、周溝を含めた外径は18.5×－mを測り、主軸方向はN40°Eを示す。

遺物　周溝・主体部・石組遺構から遺物が出土した。遺物の出土状態は挿図18で示した。

周溝からは土器・石器・鉄器・玉類が出土した。直接遺構と関連する遺物は、土師器甕（13－13）・手づくね（13－14）、須恵器甕（13－15）、鉄斧（19－５）・鉄鏃茎部（19－６）、勾玉（26－１）がある。土師器甕は須恵器の器形を真似したものといえる。須恵器甕は口縁部に波状文が施文され、胴部はたたきの後にろくろによるカキメの調整が認められる。勾玉は蛇紋岩製の小形品である。

先行する時期からの紛れ込み遺物として、縄文時代早期の押型文土器（14－１～４）、弥生時代中期壺（14－６～27）・同甕（14－28～36、15－１～28）がある。14－８は千曲川流域に分布する栗林式土器そのものといえる。14－25は東海からの外来系土器と考えられる。石器も先行する弥生時代中期に属すると考えられ、打製石斧（15－29～32）・横刃型石庖丁（16－１～３）・磨製石斧（16－４）・磨製石鏃（16－５～７）・磨製石鏃未成品（16－８）がある。

主体部からは、直刀２点（19－１・２）、刀子１点（19－３）が出土した。１は切っ先がわずかに破損する。刀身部には鞘の木質が確認できる箇所があり、鞘に収められた状態で副葬されたものである。２は刀身全体に鞘の木質部が確認でき、１と同様に鞘に収められて副葬されたものである。柄は鹿角装で、関部に鍔状に確認できる。刀子は切っ先・柄の尻が破損し、現存部分では鹿角装の柄が良好な状態で残存している。他に、縄文時代後期土器片（16－９・10）・弥生時代中期土器片（16－11～18）があるが、いずれも先行する時期からの紛れ込みによるものである。

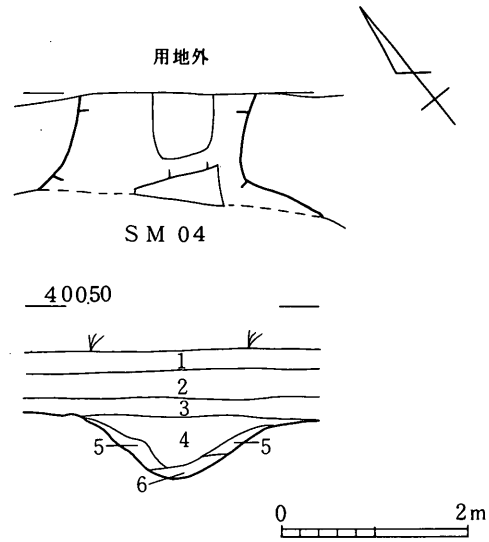
石組遺構には刀子（19－４）があり、鉄の箇所は完存する。

⑤　ＳＭ０５（挿図19、第16・17図）

遺構　調査区西北東端ＢＰ46・47で周溝0.9mを検出し、北側は調査区外で調査できなかった。古墳時代中期のＳＭ０４に切られる。規模・平面形・主軸方向とも不明の墳丘墓である。周溝は調査した範囲で幅1.8m・深さ84cmを測り、逆台形の断面形をなす。土層は３層から下が自然埋没の状況を示す。わずかな溝址を検出したのみで墳丘墓としたのは、ＳＭ０４の溝を共有して北側に墳丘墓があると想定することが、今次調査地の全体の状況からみて最も無理のない解釈であると考えたからである。

遺物　土器があり、先行する弥生時代中期の混入遺物である。弥生土器甕（16－19～26）で、細かな櫛描文が施される。

遺構の状況から古墳時代中期に位置づけられる。



1．褐灰色土（10ＹＲ4/1）…耕土
2．灰黄褐色土（10ＹＲ4/2）…旧耕土
3．黒褐色土（10ＹＲ3/2）
4．黒色土（10ＹＲ2/1）
5．黒色土（10ＹＲ2/1）ににぶい黄褐色砂土（10ＹＲ5/4）が混じる
6．にぶい黄褐色砂土（10ＹＲ5/4）に黒色（10ＹＲ2/1）が混じる

挿図19　ＳＭ０５

なお、墳丘墓出土鉄器については以下の一覧表で示す。

第２表　墳丘墓出土鉄器一覧表

図版No	遺　構	出土位置	器種	法量(長さ/幅/厚さcm)	遺存状態	備　　考
18－１	ＳＭ０１	主体部	長頸鏃	15.3×1.2×0.4	刃部先端・茎部欠	片刃鏃
18－２	ＳＭ０１	主体部	長頸鏃	15.6×0.8×0.4	茎部欠	矢柄の木質一部残
18－３	ＳＭ０１	主体部	長頸鏃	13.0×1.3×0.4	刃部先端欠	
18－４	ＳＭ０１	主体部	長頸鏃	12.5×1.3×0.4	茎先端部欠	矢柄の木質一部残
18－５	ＳＭ０１	主体部	長頸鏃	11.3×1.2×0.4	刃・茎部一部欠	矢柄の木質一部残
18－６	ＳＭ０１	主体部	長頸鏃	11.0×1.0×0.6	茎部欠	
18－７	ＳＭ０１	主体部	長頸鏃	10.3×1.3×0.4	刃・茎部一部欠	矢柄の木質一部残
18－８	ＳＭ０１	主体部	長頸鏃	10.0×1.1×0.4	刃・茎部大半欠	矢柄の木質一部残
18－９	ＳＭ０１	主体部	長頸鏃	10.0×0.9×0.4	頸部残	
18－10	ＳＭ０１	主体部	長頸鏃	7.7×0.6×0.4	頸・茎部一部残	
18－11	ＳＭ０１	主体部	長頸鏃	4.3×0.9×0.4	頸・関部一部残	
18－12	ＳＭ０１	主体部	長頸鏃	4.9×0.5×0.4	茎部一部残	
18－13	ＳＭ０１	主体部	長頸鏃	1.7×0.4×0.4	茎部一部残	
18－14	ＳＭ０１	主体部	刀　子	13.0×1.4×0.3	刃部わずかに欠	
19－１	ＳＭ０４	主体部	直　刀	84.5×3.0×0.7	切っ先わずかに欠	鞘の木質一部残
19－２	ＳＭ０４	主体部	直　刀	65.5×2.7×0.7	ほぼ完存	鞘残存、鹿角装柄
19－３	ＳＭ０４	主体部	刀　子	10.3×2.0×1.4	刃・茎柄部一部欠	鹿角装柄
19－４	ＳＭ０４	石組遺構	刀　子	1.0×1.4×0.3	ほぼ完存	
19－５	ＳＭ０４	周溝上層	鉄　斧	8.6×4.3×0.4	ほぼ完存	
19－６	ＳＭ０４	周　溝	長頸鏃	7.6×0.5×0.5	茎部残	

(4)　掘立柱建物址

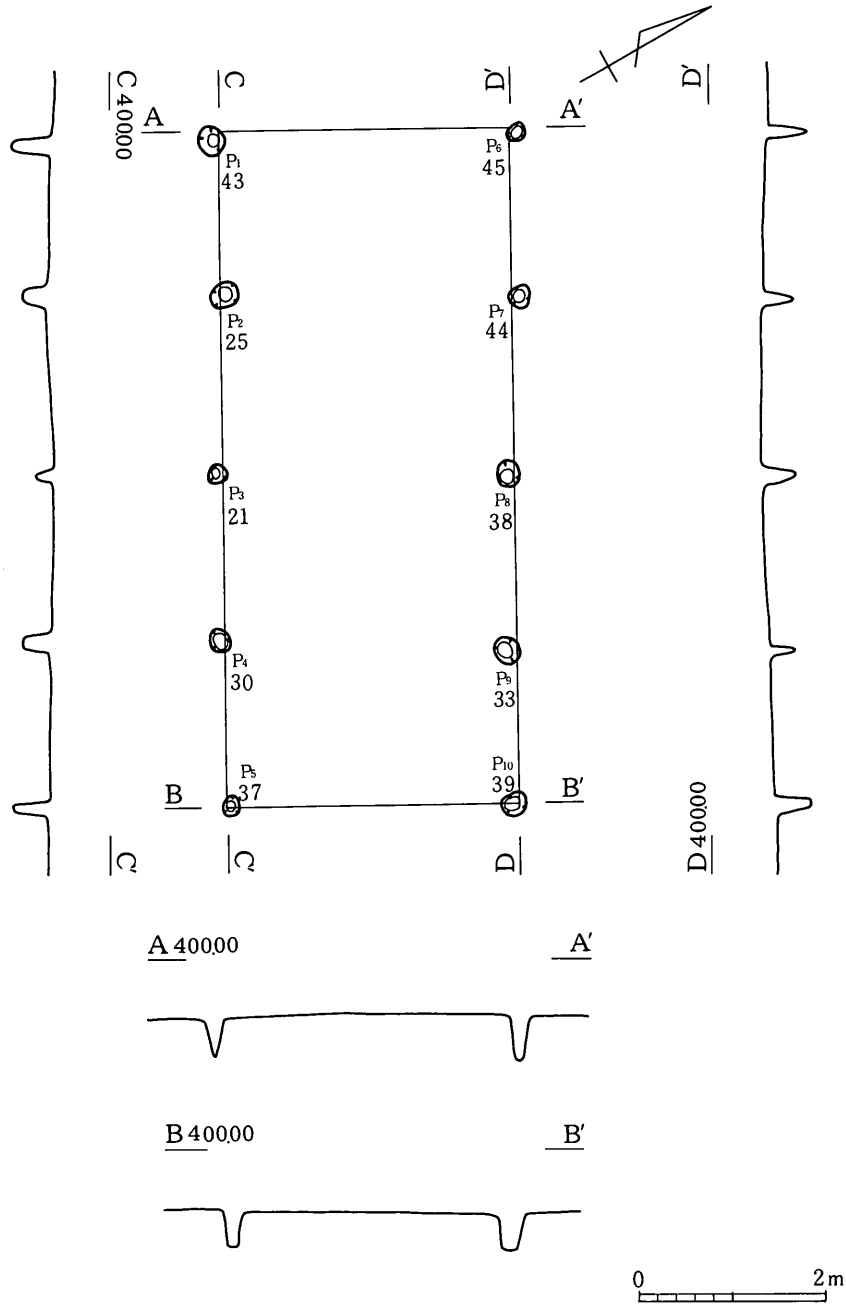
①　ＳＴ０１（挿図20、図版16）

遺構　ＢＩ41を中心として検出し、全体を調査した。古墳時代中期のＳＭ０４を切る。１×４間の掘立柱建物址で、桁行7.0m・梁行3.0mを測る。柱間は桁行1.7・1.8mを測り、桁行方向はN61°Wを示す。

柱掘り方は円形もしくは楕円形を呈し、径30～16cm・深さ45～21cmを測る。

出土遺物はない。

出土遺物がなく確定した時期を示すことは不可能であるが、遺構の状況からみて、中世以降に位置づけられる。



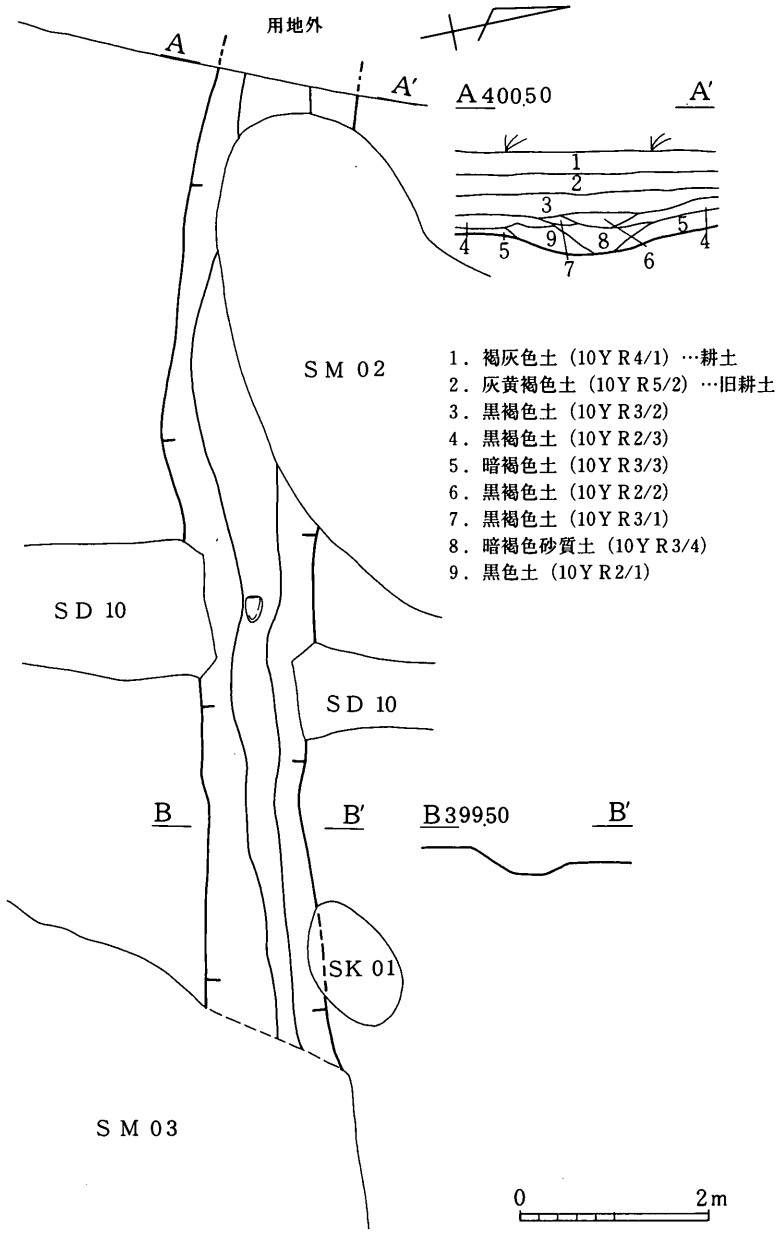
挿図20　ＳＴ０１

(5) 溝　址

① ＳＤ０４（挿図21、図版17）

遺構　調査区の南西部ＢＧ34からＢＦ39にかけて検出した。西側に延長し、東側はＳＭ０３と重複する。調査延長は10.5mで、幅1.6～1.0m・深さ40～21cmを測り、方向はN78°Wを示す。断面形は逆台形を呈し、土層は中央部に砂質土がみられ、水が流れたことが考えられる。ＳＭ０３と重複する箇所では土層や転落石の状況からみて、周溝を利用して続いていたと考えられる。

遺物　出土遺物は少なく、弥生時代中期壺片４点・同甕片１点がある。



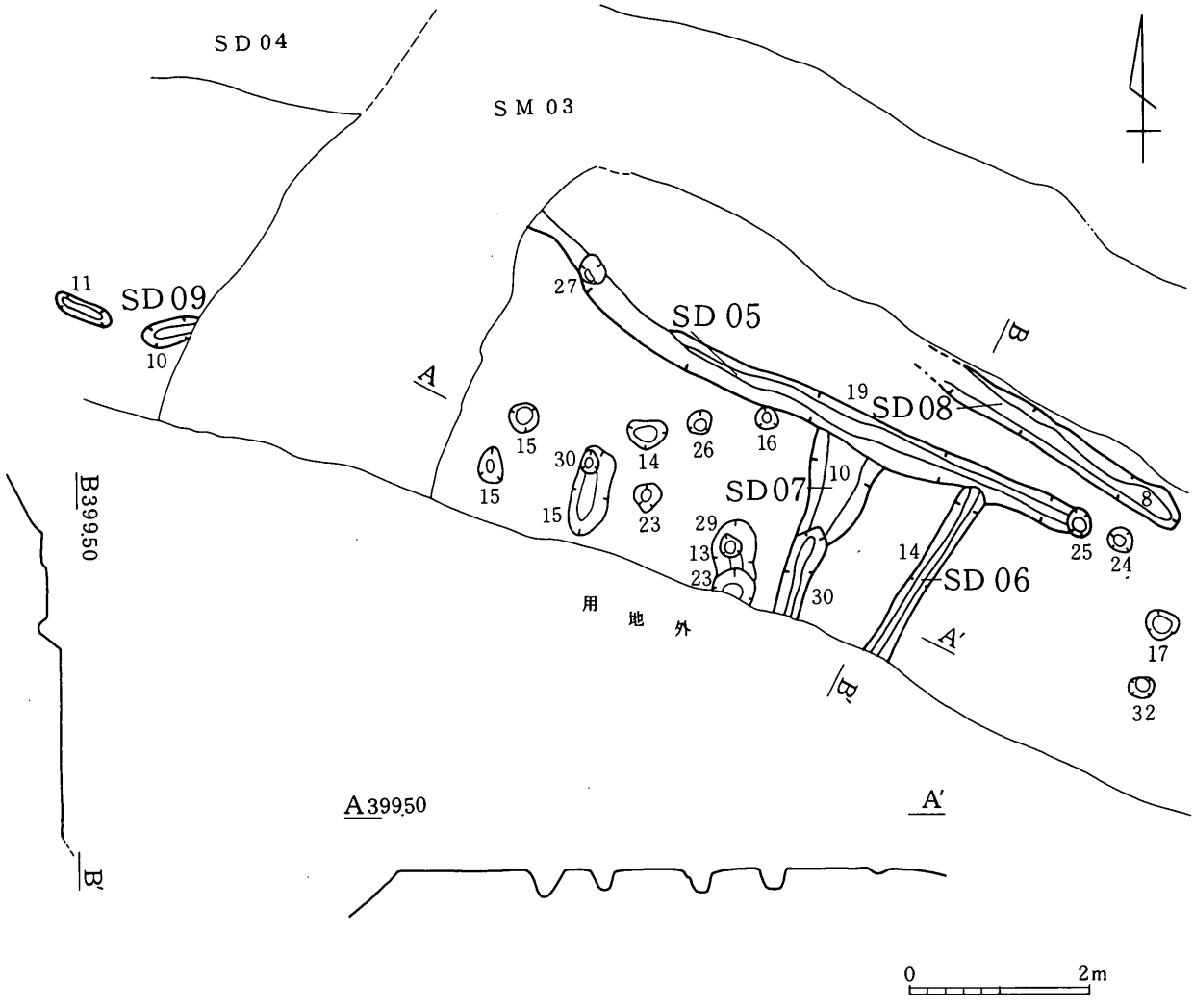
挿図21　ＳＤ０４

② ＳＤ０５・０６・０７・０８（挿図22、図版17）

遺構　調査区南部ＳＭ０３の墳丘下で検出した。それぞれに遺構番号を付して調査したが、関連があると考えられるので、一括して記述することとする。ＳＤ０５の調査延長は5.0mで、幅40～30cm・深さ22～11cmを測り、方向はN65°Wを示す。ＳＤ０６の調査延長は2.1mで、幅25cm前後・深さ14～６cmを測り、方向はN33°Eを示す。ＳＤ０７の調査延長は2.0mで、幅80～27cm・深さ28～８cmを測り、方向はN20°Eを示す。ＳＤ０８の調査延長は3.0mで、幅43～32cm・深さ９～４cmを測り、方向はN59°Wを示す。覆土はいずれも黒褐色（10YR3/1）が主体となり、遺構確認面直上の土と同様であった。

墳丘下にあるという検出所見からも古墳時代より古い遺構と考えられ、弥生時代にみられるいわゆる囲溝址に共通性が強い。囲溝址自体その性格は不明であるが、同様なものと把握しておく。方向や溝の規模の共通性から、ＳＤ０５とＳＤ０６、ＳＤ０７とＳＤ０８が同一遺溝となる可能性がある。

出土遺物はない。



挿図22　ＳＤ０５・０６・０７・０８・０９

③　ＳＤ０９（挿図22）

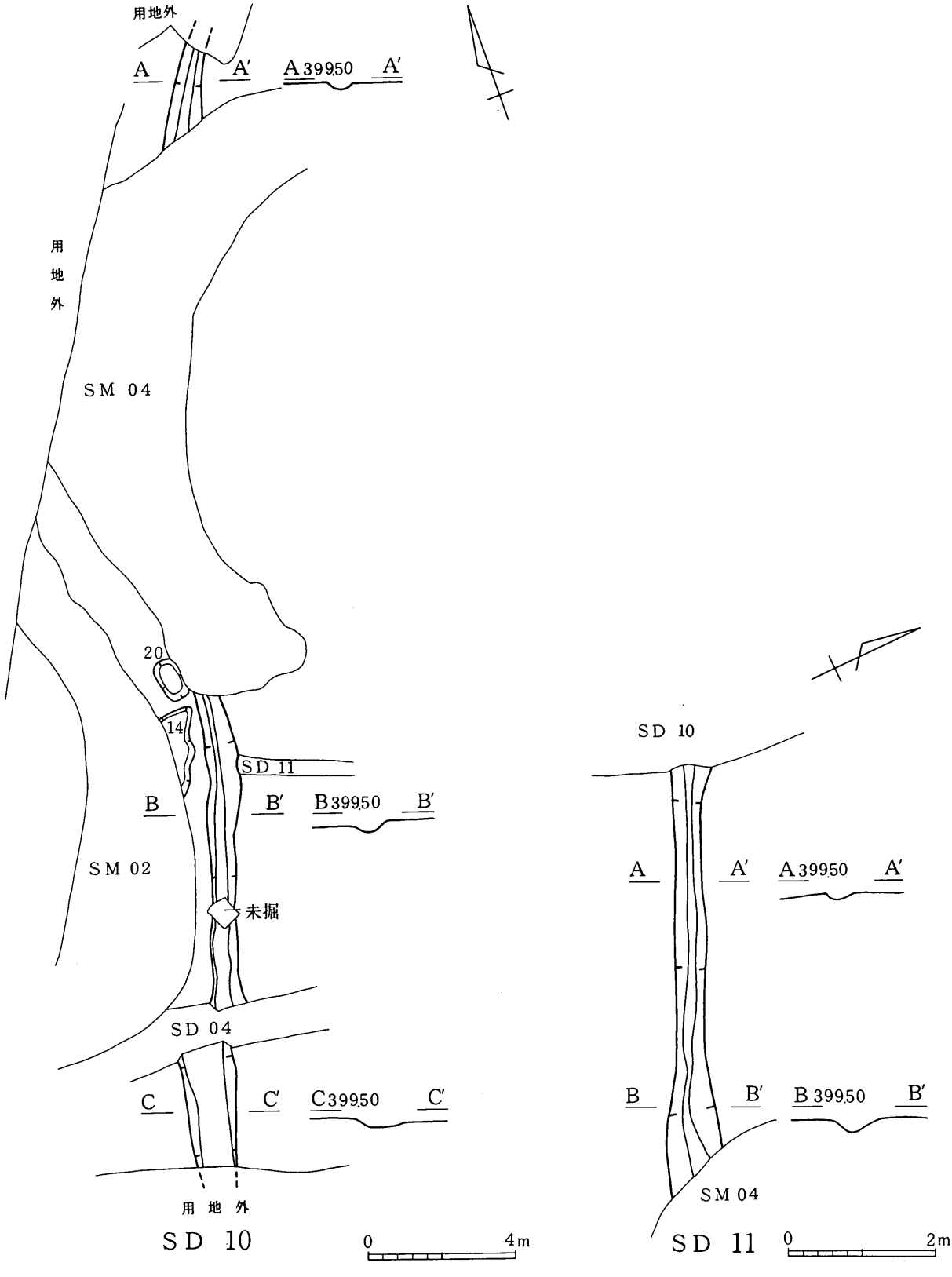
遺構　調査区南部ＢＥ37・ＢＤ38で検出した。西側で長さ70cm・幅20cm・深さ10cm、東側で長さ80cm・幅28cm・深さ９cmを測り、東側は古墳時代中期のＳＭ０３に切られる。中間で44cm途切れる。ＳＤ０５～０８と同様に囲溝址的な性格と考えられる。

遺物　縄文時代中期深鉢片２点・弥生時代中期甕片３点がある。

④　ＳＤ１０（挿図23、図版18）

遺構　調査区西部ＢＥ36～ＢＲ41で検出し、両側に延長する。ＳＤ０４と重複し、ＳＭ０４の周溝内では明確に確認できなかったが、土層の観察から続いていたと考えられる。調査延長は29.5mで、幅86～58cm・深さ46～12cmを測り、方向はＮ19°Ｅを示す。断面形は逆台形をなす。ＳＤ０４南側は幅をやや広く掘りすぎてしまった。

遺物　縄文時代中期深鉢片３点・弥生時代中期壺片26点・同壺底部１点・同甕片10点があるが、図示・拓影できる個体はない。


用地外
A
A′
A 399.50
A′
用地外
SM 04
20
14
SD 11
B
B′
B 399.50
B′
SM 02
未掘
SD 04
C
C′
C 399.50
C′
用地外
SD 10
0
4m
SD 10
A
A′
A 399.50
A′
B
B′
B 399.50
B′
SM 04
SD 11
0
2m

挿図23　ＳＤ１０・１１

⑤　ＳＤ１１（挿図23、図版18）

遺構　調査区中央部ＢＩ38～ＢＨ41で検出した。西側でＳＤ10・東側でＳＭ０４と重複し、5.5mを調査した。幅50～34cm・長さ17～11cmを測り、方向はＮ66°Ｗを示す。土層は暗褐色（10ＹＲ3/4）のほぼ一層で、断面形は逆台形をなす。

出土遺物はない。

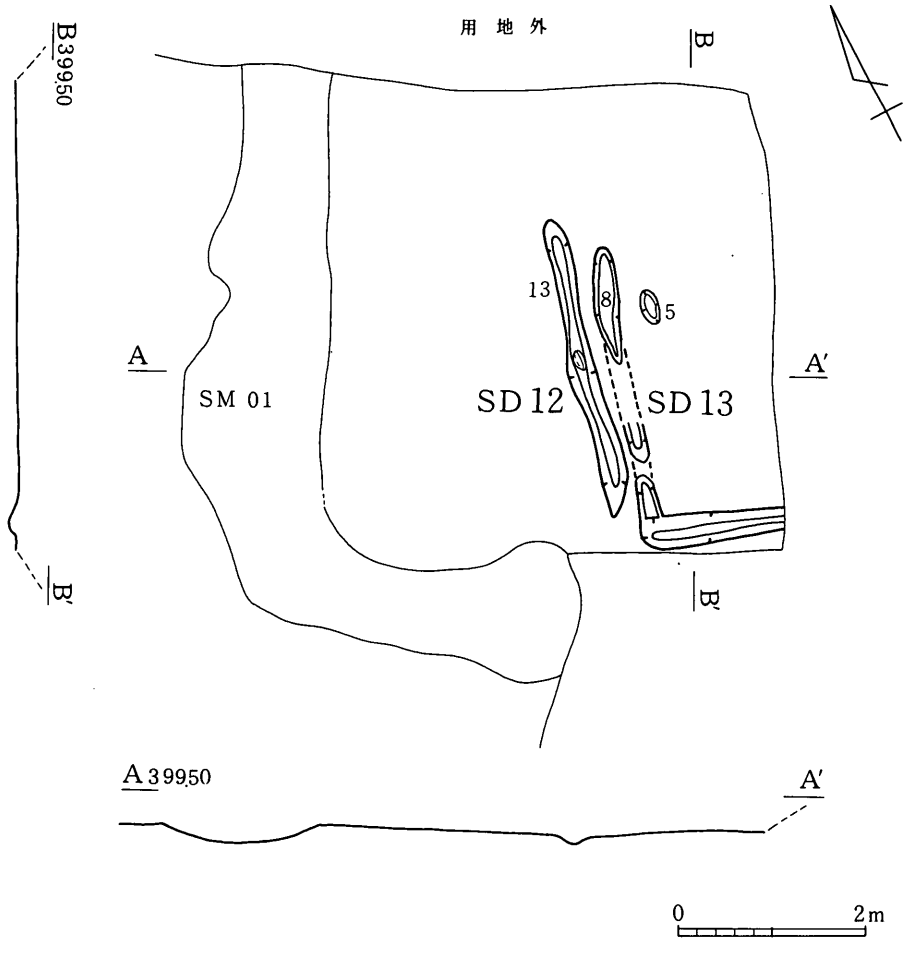
⑥　ＳＤ１２・１３（挿図31）

遺構　調査区東端部ＳＭ０１墳丘下で検出した。ＳＤ１２は、調査延長は3.2mを測り、両側に延長はしない。幅28～18cm・深さ22～10cmを測り、方向はＮ16°Ｅを示す。

ＳＤ１３は調査範囲ではＬ字状をなし、西溝は２箇所の断絶を持ちながら長さ3.2mで、幅26～16cm・深さ11～７cmを測り、方向はＮ19°Ｅを示す。南溝は調査延長は1.5mで、東側に延長する。幅32～22cm・深さ18～７cmを測り、方向はＮ67°Ｗを示す。

いずれも出土遺物はない。

ＳＤ１２・１３は遺構の状況から当地方弥生時代にみられるいわゆる囲溝址に類似する。方向がわずかに異なるため、同一時期とは考えられないが、前後する時期で同じ構造であったことが想定される。



挿図24　ＳＤ１２・１３

(6) 土坑・集石・穴

① ＳＫ０１（挿図25、第17図、図版19）

ＢＦ38・39で検出し、弥生時代中期のＳＢ11を切る。140×84cmの楕円形を呈し、深さは31cmを測る。断面形は浅い逆台形を呈する。

弥生時代中期土器片（17－１～５）があるが、ＳＢ11からの紛れ込み遺物の可能性が高い。

② ＳＫ０２（挿図25、図版19）

ＢＥ36で検出した。92×90cmの円形を呈し、深さは38cmを測る。断面形は浅い逆台形を呈する。

出土遺物はない。

③ ＳＫ０３（挿図25・27、第17図、図版21・30）

ＳＭ０４南周溝とＳＭ０３北東周溝の中間ＢＬ・M40で検出し、全体を調査した。土壙の平面形は184×104cmの長方形を呈し、深さは54cmを測る。壁面はほぼ垂直をなし、底面は平坦である。馬の歯が南西側壁面に沿いの底面から10cm浮いた位置で確認された。南西側を頭をにして馬一頭分が埋葬されたと考えられる。

出土遺物は弥生中期土器片３点と打製石斧（17－６）があるが、近接するＳＢ12からの紛れ込み遺物と考えられる。

遺構の状況から馬の埋葬土壙である。

④ ＳＫ０４（挿図25、図版20）

ＳＭ０４墳丘下のＢＬ・M40で検出した。144×98cmの不整楕円形を呈し、深さは54cmを測る。断面形は皿状を呈する。

弥生時代中期壺片８点・同甕片３点がある。土器で図化・拓影できる遺物はない。

出土遺物から弥生時代中期に位置づけられる。

なお、約１ｍ北側にある穴も同一図版で示した。この穴からの出土遺物はない。

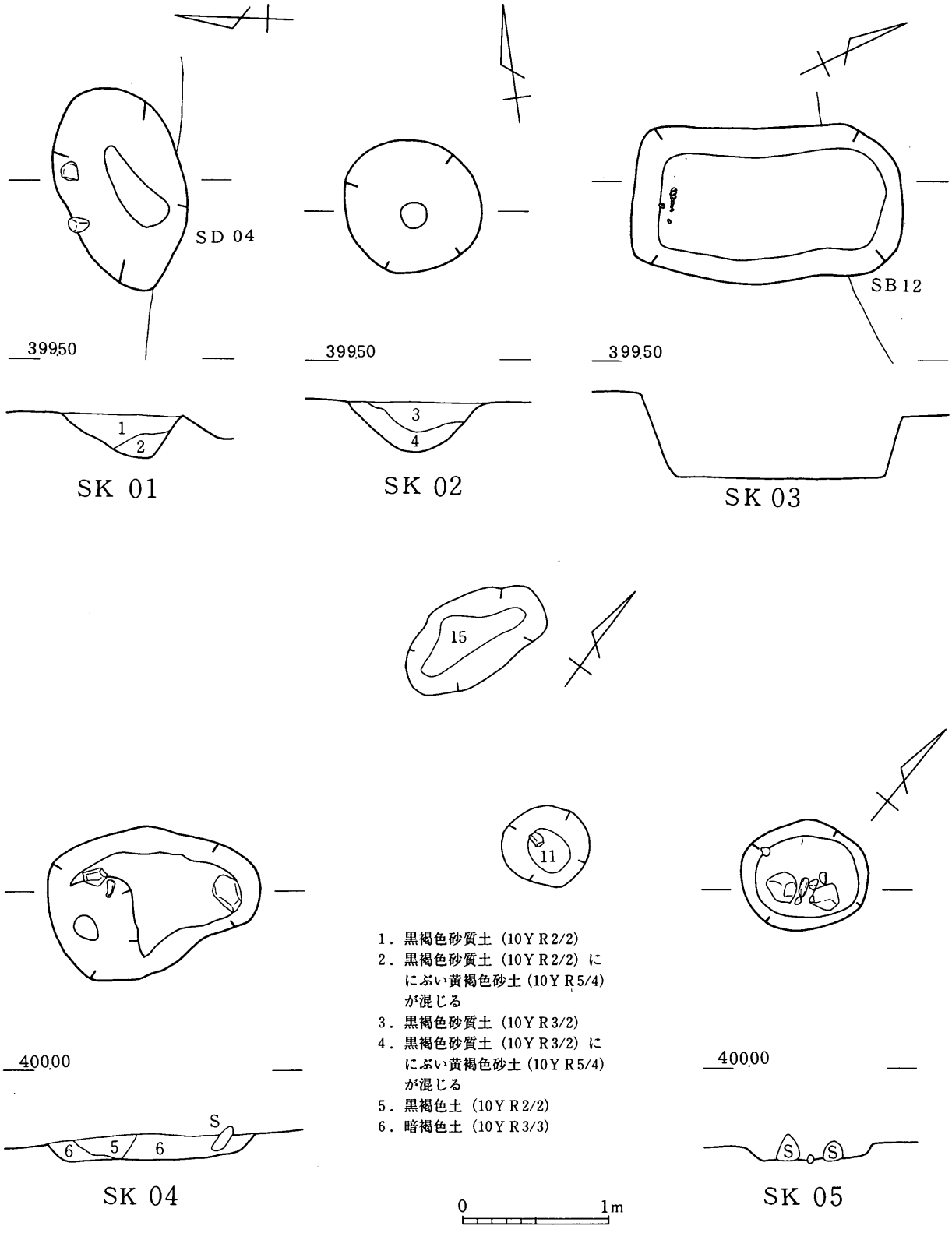
⑤ ＳＫ０５（挿図25、第22図、図版20・30）

ＢＫ41で検出した。86×74cmの楕円形を呈し、深さは12cmを測る。断面形は皿状を呈し、底面に20cmの石２個と５～10cmの石５個が認められた。覆土は基本土層２層の灰黄褐色土（10ＹＲ4/2）とほぼ同一である。

打製石斧１点（17－７）がある。

土層から旧耕土とほぼ同一の新しい時期と考えられるが、確定した時期は不明である。

なお、約１ｍ北西側にある穴も同一図版で示した。この穴からの出土遺物はない。



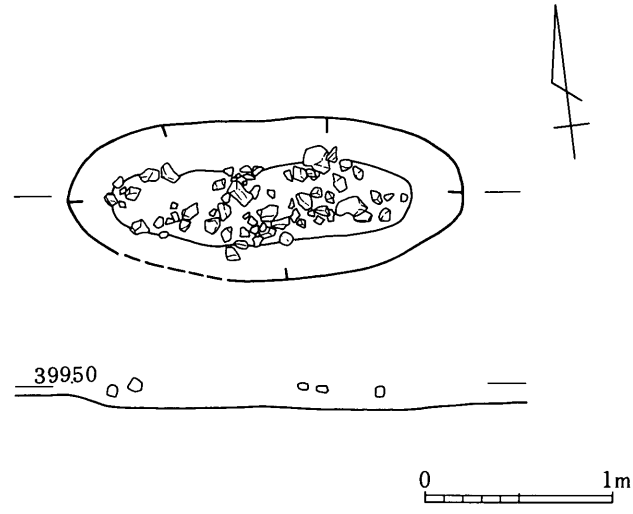
挿図25　ＳＫ０１・０２・０３・０４・０５

⑥　ＳＩ０１（挿図26、第17図、図版20）

遺構　ＳＭ０４墳丘下のＢＩ41で検出した。５～15cmの石40個余りが散在し、石の間には土器片が入り集石と把握した。石下の調査で、210×82cmの長楕円形で深さ９cmを測る落ち込みがあることが判明した。石・土器片は底面から20cm程浮いた位置にあり、底面に密着したものはなかった。

遺物　弥生時代中期の土器・石器がある。壺(17－８・９)・甕（17－10～23)、打製石斧（17－24）で、17－８は東海系土器と考えられる。

出土遺物から弥生時代中期に位置づけられる。



挿図26　ＳＩ０１

(7)　**馬の歯**

土壙や墳丘墓周溝内から馬の歯が４頭分確認された。それぞれに説明を加える。

①　ＳＫ０３（挿図27、図版21）

馬の歯はＳＫ０３の南西側壁面に沿いの底面から10cm浮いた位置で検出した。臼歯６本分がある。南西側を頭にして馬一頭分が埋葬されたと考えられる。

馬の埋葬に伴う遺物はない。

②　ＳＭ０２周溝内（挿図27、図版22）

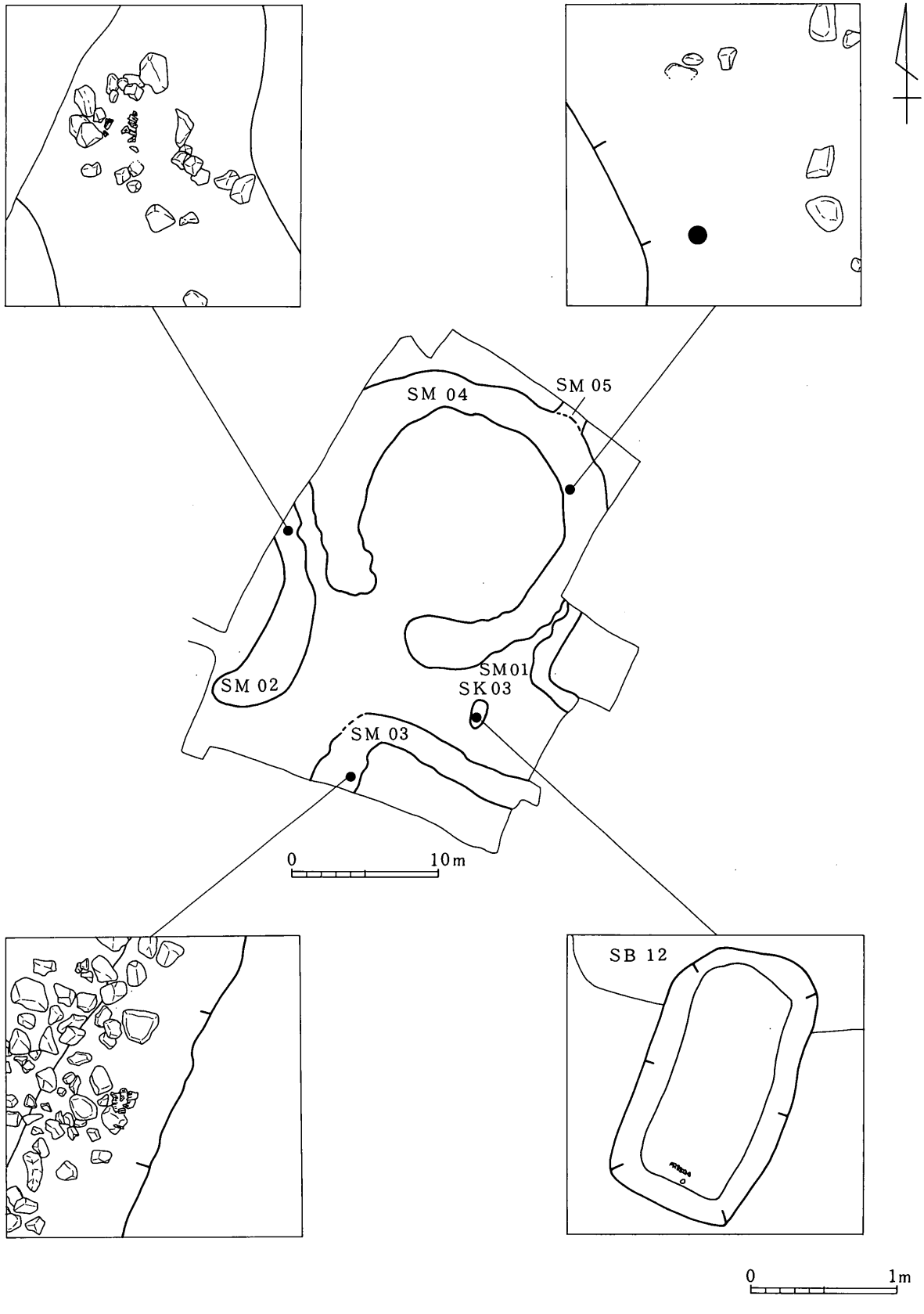
馬の歯は周溝のほぼ中央部ＢＬ37の底面から20cm浮いた位置で検出した。下顎臼歯６本がある。歯の周囲には石が20個程認められるが、直接関連するとは考えられない。底面が埋まっていない段階での埋葬が考えられる。

③　ＳＭ０３周溝内（挿図27、図版22）

馬の歯は北西周溝の南東壁面沿いＢＤ39の底面から30cm浮いた位置で検出した。この箇所は貼石からの転落した石が多量にあり、その石の下から検出した。前歯を含めてほぼ一頭分の歯が残っていた。貼石が転落する前の埋葬が考えられる。

④　ＳＭ０４周溝内（挿図27、図版22）

馬の歯は北東周溝の南西壁沿いのＢＭ46の底面から50cm程浮いた位置で検出した。臼歯４本分があり、若い個体と考えられる。検出位置は周溝壁面にかなり密接しており、層位も底面に最初に堆積した土と同じであり、周溝が埋まっていない段階で、南東壁面に寄りかける形で埋葬したと考えられる。



挿図27　馬の歯出土状態

(8) 遺構外出土遺物

遺構に直接結びつかない遺物を第20～22・24・25図で示す。縄文土器・石器、弥生土器・石器がある。なお、ＳＭ０４墳丘下から出土した土器については、ＳＭ０４に直接関連するものではないので、ここで一括して扱った。

縄文土器（20－２～９）は、早期の細久保式に位置づく押型文土器（２～５）・繊維を含んで撚り糸で施文される高山寺式土器（６・７）、後期後葉の口縁部片（８・９）がある。

弥生土器は中期後半に位置づくほぼ同一の時期と考えられ、壺（20－10～28、21－１～23）と甕（21－24～48、22－１～11）がある。壺は単純に外反する口縁の外面が無文の個体（20－10～13）と受け口口縁で文様がみられる個体（20－14・15）がある。胴上部の文様は、櫛描の横線文と箆描の連続山型文が施文される個体（20－16～28、21－１）が多い。甕はほとんどが細かい櫛描条線文が施される。

石器は大半が弥生時代に属すると考えられる。打製石斧（24－１～９、25－１～４）・有肩扇状形石器（25－５）・横刃型石器（25－６～９）・磨製石斧（25－10・11）・磨製石鏃未成品（25－12～15）・石匙（25－16）がある。

黒曜石を石材とした小型石器は打製石鏃が多く（26－２～８）、すべてＳＭ０４墳丘下から出土していることもあり、縄文時代早期に所属すると考えられる。

Ⅳ まとめ

今時調査によって検出された遺構・遺物はすでに述べたとおりである。時間等の制約により、十分な説明や検討が加えられていないのは遺憾である。ここでは、調査によって得られた成果・問題点を時期ごとに指摘してまとめとしたい。

(1) 縄文時代

縄文時代では、縄文時代早期の押型文が比較的まとまって出土した。細久保式土器と考えられる山型や楕円の押型文が施文されるものと、撚り糸で施文され胎土に繊維を含む高山寺式土器である。出土状態から流れ込み遺物とは考えられないので、生活の痕跡の結果といえる。当該期の遺跡立地は、いうまでもなく山地に近い扇状地や上位段丘面に多い。そうした中、天竜川の氾濫原に近い低位段丘上からの発見は、当時の生活範囲を考える上でも貴重な資料となる。飯田市内でも、もっとも低位に位置する早期土器出土遺跡のひとつといえる。明確な遺構の確認がないので、どういった性格で土器が出土したかは推定することはできなかった。集落等の恒常的な生活の場と想定するより、別の役割を考えるべきかもしれない。松尾地区では同一段丘上の明集会所付近からも押型文土器が出土している（大沢1982)。今後、より明確な遺構に伴って当該期の資料が出土し、その性格が解明されることが期待される。

(2) 弥生時代

弥生時代では、竪穴住居址4軒とそれに伴う遺物が得られた。また、墳丘墓等時期の新しい遺構内にも、該期の遺物が比較的多く含まれていた。遺物・集落の両面を考えてみる。

① 土器について

出土した土器は図化できた個体が少ないので、資料的な限界は認められるが、まずその特徴を摘出してみる。器種は壺・甕・鉢があり、前二者がほとんどを占める。

壺の形態は細い頸部から短くラッパ状に外反する単純口縁部を持つ。全体形が判明した個体がないので、その胴部の様相は不明であるが、拓影で示した個体の大半は、単純口縁壺の胴部と考えられる。その文様構成は、頸部から胴上部にかけて施文され、櫛描の横線文に篦描の文様が組み合わされる。篦描で最も多いのは、中を縦書きの直線文で充填した連続山型文で、櫛描横線文の間に施される。他には、横線文の上下に篦による列点文が施文されるものも多い。受け口状口縁となる器形もあるが、図化できたものがないので、その形態や文様構成は不明である。

甕は口縁部が緩やかに外反し、端部が面取りされる。頸部が緩やかに屈曲してはっきりしないことが特徴となる。拓影で示した個体には頸部がない深鉢形を呈するものが多く、甕の一定の割合を占めていたことが想定される。台付甕は深鉢に脚台部が付けられる。文様構成は、器形によって変わることはないと考えられ、面取りされた口縁端部角を篦による刻みを付け、胴部には細かい櫛描条線文が単方向に施文される。羽状の条線文はほとんどなく、頸部の波状文はない。

鉢は内・外面とも赤色塗彩される。

以上が今次調査で出土した弥生土器であるが、既存の資料と比較する中で編年的な位置を考えてみる。

壺の形態・文様構成は北原遺跡から出土した北原式土器（高森町教育委員会1972）に類似する。甕の文様構成は、北原式土器で盛行する櫛描波状文と櫛描羽状条線文がなく、単方向の櫛描条線文が主体を占める。深鉢形を呈する器形を含め、文様は阿島式土器との類似性が強い。以上の点からみて、従来の北原式に先行し、阿島式との間を埋める資料といえる。これまで、こうした段階の資料は丹保遺跡から出土しているのみで（上郷町教育委員会1993）、他に類例はみられなかった。丹保遺跡と比較すると、壺・甕の形態や文様構成に当遺跡の資料の方が新しい傾向が認められる。いずれにせよ、資料の少ない現時点では、同一時期の新旧の様相を示すと捉えておく。編年的位置であるが、櫛描文系土器として次につながっていく様相がみられるので、弥生時代中期後半の北原式土器の範疇に含まれ、その古い様相を示すと考える。

ＳＭ０４の周溝から千曲川流域を主体として分布する栗林式土器（14－８）が出土した。新しい時期の遺構から出土したものではあるが、まず弥生時代中期の集落に伴ったと考えて差し支えないものといえる。頸部から胴上部まで残存し、縄文を地文として箆描文が施される。この土器は、文様等の特徴から栗林式土器古段階に位置づけられる。一点のみの出土で極めて危険な判断ではあるが、栗林式土器と北原式土器のいずれも古い段階が併行関係を持つことを想定できる資料になることが考えられる。

② 石器について

弥生時代の石器は竪穴住居址の他、墳丘墓周溝等からも出土した。全体の様相をつかむため、新しい遺構や遺構外から出土したものも、図示できる限り取捨選択せずに提示した。一部の小型石器を除いて該期に属するものと考えられる。

耕起具としての大小の打製石斧、収穫具としての横刃型石包丁・有肩扇状形石器・横刃型石器、木工具としての磨製石斧、工具としての磨製石錐・打製石錐・敲打器、狩猟具・武器としての磨製石鏃等がある。いわば、生活に必要な石器が機能分化した形でほぼ揃っており、そこには安定して石を利用していた姿をみることができる。縄文時代晩期から弥生時代中期にかけては、石器の組成が縄文的な様相から段階を分けて、大陸系磨製石斧を含めた弥生的な組成に変わる時期といわれている（百瀬1997）。今次調査地の様相は明確に弥生的な組成を示しており、これ以前のどの段階からそうした組成となるかは今後の課題である。

③ 土偶について

ＳＭ０１主体部付近から土偶が出土した。出土状態からは所属時期が明らかでないので、その特徴から時期を判断することとなった。頭部左側と鼻の先端が欠けてはいるが、頸部から頭部にかけてほぼ全体が残存していた。頭部は丸く表現され、耳と考えられるやや大きめの突出部が両側面にある。目は竹管の刺突によって表され、口は箆状工具によって作出される。頭部裏面には目の表現に用いた同じ竹管によって７箇所が刺突される。口・目を除いた全面が赤彩され、頭部には髪を表現したと考えられる黒色顔料が塗られ、顔料塗彩前の調整は全面指ナデである。胎土や赤色顔料は弥生土器と共通し、その他の特徴も含めて、本遺跡の土器の大半を占める弥生時代中期に位置づけられる。当地方の弥生土偶については、松川町玄与原遺跡の土偶形容器（神村1967）が知られるくらいで、ほとんど類例がない。寺所遺跡第３次調査で出土した容器形土偶との関連が考えられる人面付土器も含めて、県内や周辺地域を包括した検討が必要といえる。

④　集落について

前述した土器の様相や切り合い関係からみれば、４軒の竪穴住居址は同時存在したと考えられ、１時期で営まれた集落の一部を調査したこととなった。調査が一部に限られたため集落の範囲を推定することはできないが、大規模集落になるとは考えがたい。当地の弥生時代は、前期から中期前半にかけて東海地方の人々によってもたらされた稲作が、天竜川に近い位置に立地する箇所に定着し、その後畑作を含めた農耕によって、高位段丘面や扇状地まで集落を広げていったといわれている。当該地の集落は、そうした流れの中では、天竜川に近い低位段丘の先端部に位置し、早い段階に定着した農耕集落といえる。これまで、中期後半までの集落は、北原遺跡（高森町教育委員会1972）や恒川遺跡群（飯田市教育委員会1986）で知られるだけで、１時期新しい集落である。ほぼ同一時期と把握できるのは丹保遺跡（上郷町教育委員会1993）があり、集落の一部が調査されている。さらに古い中期前半から中葉の時期では、従来の阿島遺跡（宮沢他1967）や寺所遺跡（佐藤1982）が知られるのみで、調査されたのが昭和30年代と古いこともあり、その性格が今ひとつ分かりにくいものであった。最近では、平成９年度に飯田市教育委員会で調査した井戸下遺跡から阿島式段階と考えられる集落が調査されている。また、第３次調査の寺所遺跡も遺構は明確ではなかったが、集落的な性格が強いと考えられる。いずれも未報告で詳細は明らかでないが、稲作定着期の集落遺跡と把握して多寡ないと考える。遺跡立地をみると、いずれも天竜川の低位段丘上にあり、井戸下遺跡にいたっては天竜川氾濫原に面する場所といえる。まず、周囲に容易に水田化できる場所のある箇所に居住域を定め、農耕技術を修得・習熟していったものと考えられる。技術が高まると広く安定した耕地が望める低位段丘の奥まで進出し、恒川遺跡群のように後期まで継続する集落を形成したものといえる。

(3)　古墳時代

古墳時代では、近接して築造された墳丘墓５基を調査した。

ほぼ全体形が判明したのはＳＭ０４のみで、その他は一部の調査にとどまった。まず、ＳＭ０４について考え、その後に派生する問題を考えてみたい。

①　ＳＭ０４について

ＳＭ０４の特徴を示すと以下のようである。南西側に陸橋部を持つ円形の平面形を示す。周溝内のほぼ中央部には割竹形の木棺と想定される埋葬施設があり、直刀・刀子が副葬されていた。陸橋部には埋納施設である石組遺構があり、刀子が出土した。盛土があったことは土層から推定できるが、人為的な盛土層の確認はできなかった。陸橋部には埋納施設である石組遺構があり、刀子が出土した。周溝内では何点か土器が出土し、出土状態も様々である。また、北東周溝では馬の歯があり、周溝内に馬を埋葬したことも確かめられた。周溝内には石が多量にみられた部分はあるが、周溝や墳丘全体に貼石をしていたとは考えられない。それぞれの施設についてもう少し詳しくみてみる。

主体部　底部の一部を確認したのみであるが、その形状から割竹形木棺を使って埋葬していたと判断した。当地方では、物見塚古墳（飯田市教育員会1992Ａ）・八幡原遺跡方形周溝墓11（飯田市教育委員会1992Ｂ）等で知られ、５世紀代に大和王権との関わりの中で流入したと考えられている。遺物は直刀２点・刀子１点が出土し、刀はそれぞれ切っ先の方向を互い違いにして、鞘に収められた状態で棺内に副葬されていた。

埋納施設　陸橋部に石組遺構があり、刀子が出土した。他の遺物等の出土はなかったが、埋納施設と判断した。土壌の分析結果からも、この判断は支持されている。陸橋部を使って墓前祭が執り行われたことが考えられる。

周溝内出土遺物　土師器甕・手づくね、須恵器甕が出土した。土師器甕は西側周溝部底に置かれたような状態で、須恵器甕は周溝中層から意図的に壊された状態で出土し、手づくねは須恵器と同じ位置から得られた。出土位置からの判断で、周溝が埋まらない段階とやや埋まった時点での２回の祭祀行為があったことが考えられる。

墳丘　調査前は水田として利用されており、墳丘の痕跡は認められなかった。前節で示したように、地山面での高まりは認めたが、人為的な盛土は確認できなかった。しかし、明治時代には墳丘がみられたということを地権者からうかがうことができた。築造当初の盛り土の状況を判断することはできないが、主体部の検出位置からすれば、際だった高さがあったとは想定しにくい。現状では、周溝の土を盛った程度と考えておく。

② 墳丘墓について

ＳＭ０１・０３では方形の貼り石墳丘墓が調査された。用地外にかかるため全体形や規模が確定できなかったが、周溝内壁面から墳丘に天竜川の川原石を使って石が貼られていたことが確認できた。貼石墳丘墓や周溝墓は、蒜田遺跡で調査されてから、松尾城遺跡方形周溝墓２（飯田市教育委員会1991）・八幡原遺跡方形周溝墓７（飯田市教育委員会1992Ｂ）・田圃遺跡方形周溝墓１（飯田市教育委員会1993Ａ）が報告され、未報告ではあるが上の坊遺跡にも１基の方形周溝墓に貼石が確認されている。当遺跡の調査でさらに２基を加えることとなった。平面形はいずれも方形を呈し、確認できたものでは周溝が全周するものが多く、陸橋部を２箇所にもつ城遺跡の例がやや異なっている。時期は弥生時代後期後半に位置づく城遺跡例が最も古く、八幡原遺跡例や当遺跡例が古墳時代中期と最も新しくなる。弥生時代後期後半から古墳時代まで継続して築造されていたといえる。

当遺跡では、近接した範囲の中に５基の墳丘墓が築造されていた。土層等の切り合い関係から新旧関係が把握できるのは、ＳＭ０４がＳＭ０１・０５を切っていることだけである。出土土器から検討してみると、ＳＭ０１の土師器甕、ＳＭ０２土師器甕・坏、ＳＭ０３の土師器直口壺・甕・坏・高坏、須恵器長頸壺、ＳＭ０４の土師器甕、須恵器甕に明確な時期差を認めることはできない。いずれも、古墳時代中期（５世紀）後半から終末の範囲に収まることが考えられ、１世代に１基というような構築のされかたではない。いわば、一集団の共同墓域的な性格を示すと考えられる。

平面形を考えると陸橋部をもつ円形のものと方形のものが混在している。当地方の方形周溝墓を含めた墳丘墓の平面形は圧倒的に方形のものが多く、円形のものは少ない。かつ、円形で確認されているもの規模を比べると、ツルサシ遺跡円形周溝墓１の6.8×6.5mなのにＳＭ０４は主軸方向の長さが18.5mと圧倒的に規模が大きくなる。系譜がつながるものかは検討を要す。

当遺跡周辺には、眉庇付冑をはじめとして多量の鉄器・円筒埴輪をもつ妙前大塚古墳（飯田市教育委員会1971）等妙前古墳群がある。妙前大塚古墳は古墳時代中期５世紀中頃と考えられ、当遺跡と大きな時期差はない。しかし、墳丘規模や出土遺物に際だった差が認められ、墓域を構築した集団の階層差を表していると考えられる。本遺跡例は墳丘墓が弥生時代から続く様相が強いことを考えれば、旧来の墓制を遵守する集団の姿をみることができる。

③　埋葬馬について

墳丘墓周溝や土壙から４頭分の馬の歯が検出された。歯のみの確認であるが、それぞれ一頭ずつ埋葬されたと考えられる。当地方の古墳時代の埋葬馬は第２表で示したように27例に上る。上郷・松尾・座光寺地区に多く、中でも松川を挟んだ上郷・松尾地区に集中し、その古墳群・墳丘墓群の周溝や周辺の土壙に埋葬される。時期は高森町の１例を除けば古墳時代中期（５世紀）に位置づき、そのなかでも後半から終末のものが多いと考えられる。そこには、畿内の大和政権と結びついた馬匹生産が考えられており（小林1994）、５世紀以降盛行する前方後円墳の築造や際だった馬具副葬古墳多さもそうした裏付けとなる。

第２表　飯田・下伊那の古墳時代の埋葬馬

遺　跡	遺　構	出土地区	出土部位	時　期	備　考	文　献
寺所遺跡	ＳＫ０４	飯田市松尾新井	歯	５世紀		
寺所遺跡	ＳＭ０２周溝	飯田市松尾新井	歯	５世紀		
寺所遺跡	ＳＭ０３周溝	飯田市松尾新井	歯	５世紀		
寺所遺跡	ＳＭ０４周溝	飯田市松尾新井	歯	５世紀		
新井原遺跡	馬の墓１	飯田市座光寺	歯	５世紀		飯田市教育委員会1986
新井原遺跡	馬の墓２	飯田市座光寺	歯・骨	５世紀	馬具伴出	飯田市教育委員会1986
新井原遺跡	ＳＫ４７	飯田市座光寺	歯	５世紀	平成10年調査	未報告、1999年３月刊行予定
新井原２号古墳	70号土壙	飯田市座光寺	歯	５世紀	昭和57年調査、周溝内	小林1994
新井原２号古墳	70号土壙	飯田市座光寺	歯	５世紀	昭和57年調査、周溝内	小林1994
新井原２号古墳	71土壙	飯田市座光寺	歯	５世紀	昭和57年調査、周溝内	小林1994
宮垣外遺跡	ＳＫ10	飯田市上郷別府	歯・骨	５世紀	平成９年調査	未報告
宮垣外遺跡	ＳＫ11	飯田市上郷別府	歯	５世紀	平成９年調査	未報告
宮垣外遺跡	ＳＭ周溝	飯田市上郷別府	歯	５世紀	平成９年調査	未報告
宮垣外遺跡	ＳＭ周溝	飯田市上郷別府	歯	５世紀	平成９年調査	未報告
宮垣外遺跡	ＳＭ周溝	飯田市上郷別府	歯	５世紀	平成９年調査	未報告
物見塚古墳	周溝	飯田市八幡町	歯	５世紀	轡伴出	飯田市教育委員会1990
茶柄山９号古墳	馬の墓１	飯田市松尾上溝	歯・骨	５世紀	周溝内	小林1994
茶柄山９号古墳	馬の墓２	飯田市松尾上溝	歯	５世紀	周溝内	小林1994
茶柄山９号古墳	馬の墓３	飯田市松尾上溝	歯	５世紀	周溝内	小林1994
茶柄山９号古墳	馬の墓４	飯田市松尾上溝	歯	５世紀	周溝内	小林1994
茶柄山９号古墳	馬の墓５	飯田市松尾上溝	歯	５世紀	周溝内	小林1994
茶柄山９号古墳	馬の墓６	飯田市松尾上溝	歯	５世紀	周溝内	小林1994
茶柄山９号古墳	馬の墓７	飯田市松尾上溝	歯・骨	５世紀		小林1994
茶柄山９号古墳	馬の墓８	飯田市松尾上溝	歯	５世紀		小林1994
茶柄山古墳群中	馬の墓９	飯田市松尾上溝	歯	５世紀		小林1994
茶柄山古墳群中	馬の墓10	飯田市松尾上溝	歯・骨	５世紀	三環鈴伴出	小林1994
北林５号古墳	溝内土壙	高森町	歯	７世紀		

終わりに、これまで墳丘墓という名称を、何の説明もないままに使ってきた。これについての考えを述べたい。古墳・墳丘墓・周溝墓の定義については、立地・平面形・墳丘のあり方等様々の解釈があり、研究者によって使い方があり、定まっていないのが現状である。本遺跡例の場合、立地・平面形や墓域の形成等定型化した古墳の影響下に成立したとは考えにくく、弥生時代からの伝統によって築造された様相が強い。周溝墓との把握もできるが、墳丘をもっていた墓の総称として墳丘墓とした。石野博信氏の古墳と墳丘墓を区別する上での、よそから墳丘の土運んできたら古墳とし、周溝の土のみで墳丘を構成するのは墳丘墓とするとの明快な定義に（石野1994)、該当させても同様の位置づけになる。

いずれにせよ、当地方で発見された周溝墓・墳丘墓は100基を越え、弥生時代後期から古墳時代中期まで継続して造られていたことが分かってきている。平面形も様々であり、埋葬形態も一定ではない。当然、古墳時代前期には代田山狐塚古墳が築造され、中期以降の古墳は枚挙のいとまがないほど盛行する。こうした、古墳を含めた墳丘を持つ墓のあり方を総合的に検討する中で、本遺跡の墳丘墓の意義も明らかになると考えられる。すべて今後の課題である。

引用・参考文献

飯田市教育委員会　1971　『妙前大塚（３号）古墳』

飯田市教育委員会　1972　『南の原遺跡』

飯田市教育委員会　1974　『南の原遺跡』

飯田市教育委員会　1978　『毛賀御射山遺跡』

飯田市教育委員会　1986　『恒川遺跡群』

飯田市教育委員会　1991Ａ　『清水遺跡』

飯田市教育委員会　1991Ｂ　『城遺跡』

飯田市教育委員会　1992Ａ　『八幡原遺跡　物見塚古墳』

飯田市教育委員会　1992Ｂ　『八幡原遺跡』

飯田市教育委員会　1993Ａ　『田圃遺跡』

飯田市教育委員会　1993Ｂ　『久井遺跡』

石野博信　1994　「大和からみた信濃の前期古墳文化」『長野県考古学会誌』71・72号　長野県考古学会

大沢和夫他　1982　『松尾村誌』

上郷町教育委員会　1993　『丹保遺跡』

神村透　1967　「寺所遺跡とその他の遺跡」『長野県考古学会誌』４号　長野県考古学会

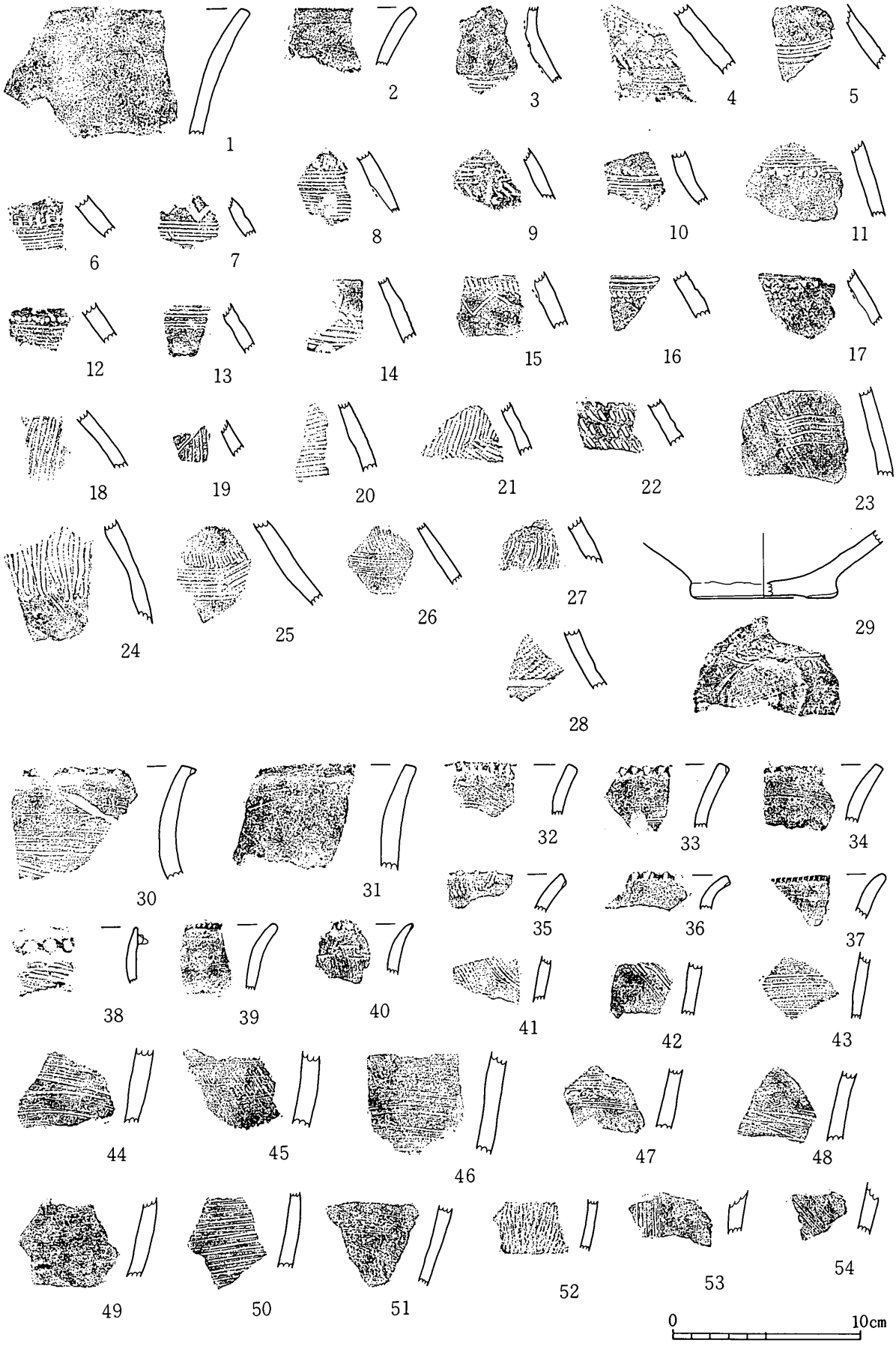
小林正春　1994　「長野の古墳－下伊那の古墳時代の埋葬馬－」『日本考古学協会1994年度大会研究発表要旨』　日本考古学協会

佐藤甦信　1982　「寺所遺跡と寺所式土器」『中部高地の考古学』Ⅱ　長野県考古学会

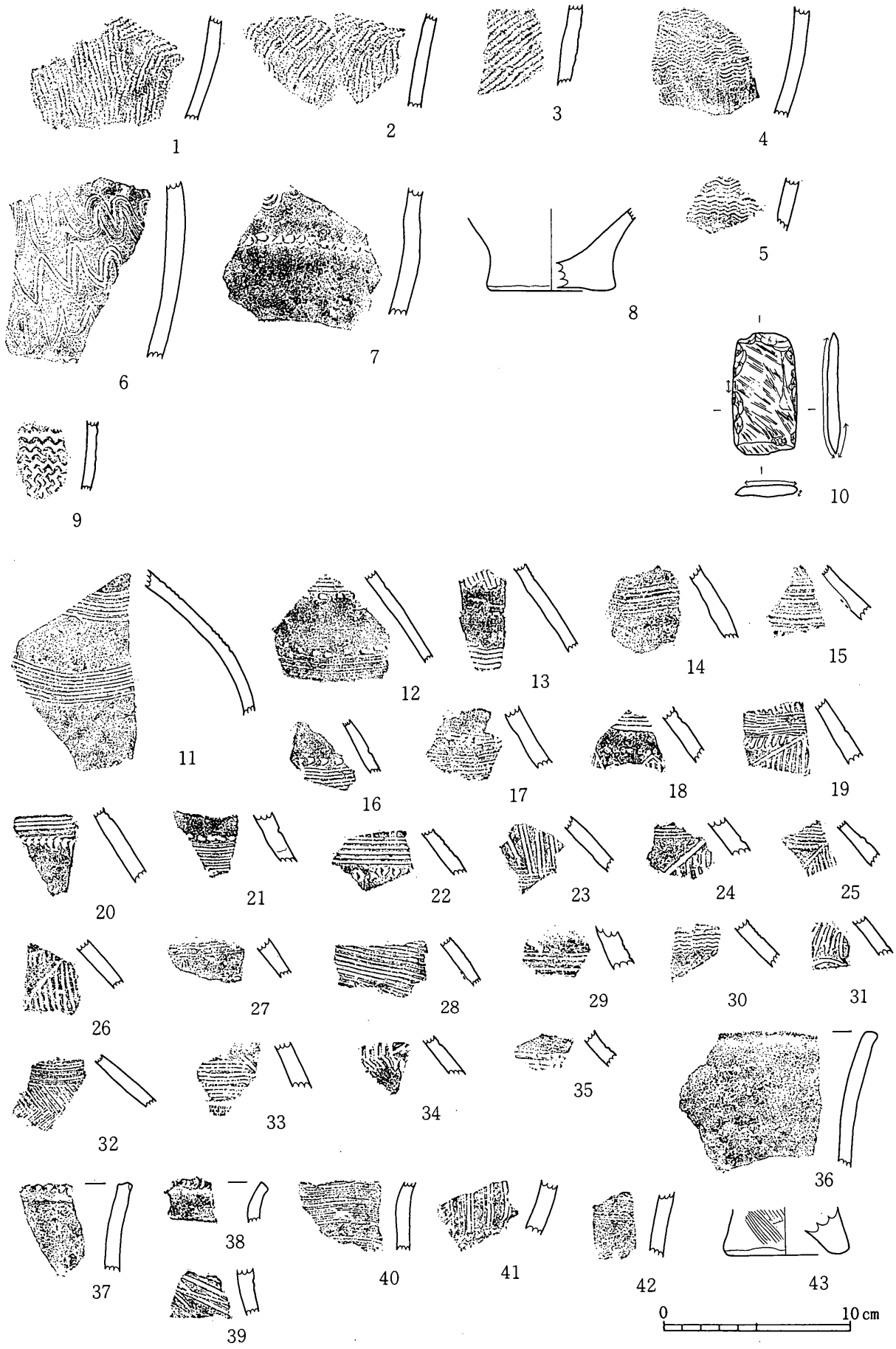
高森町教育委員会　1972　『北原遺跡』

宮沢恒之他　1967　「喬木村阿島遺跡」『長野県考古学会誌』４号　長野県考古学

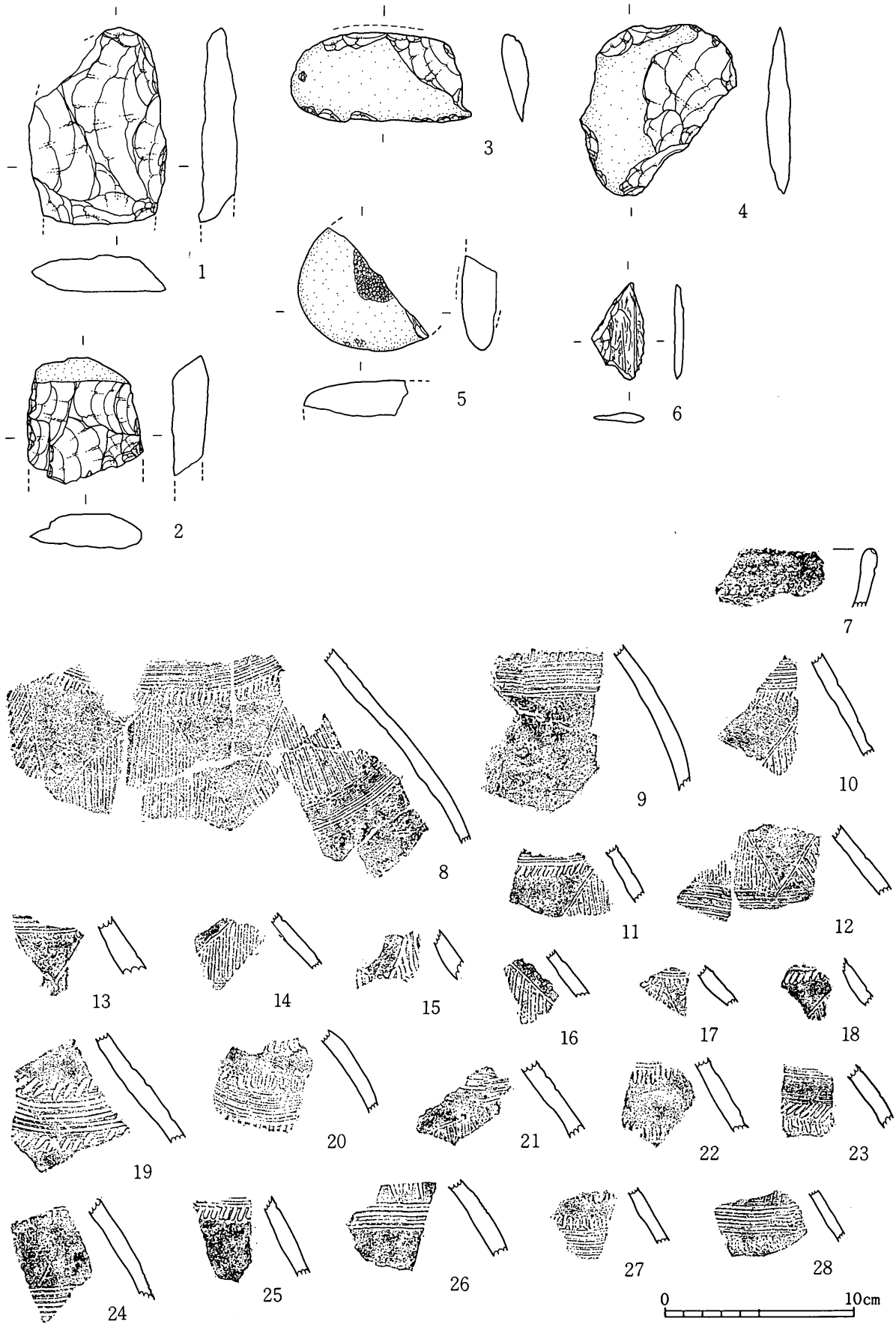
百瀬長秀　1997　「長野県中・南部（松本・諏訪・下伊那地域）の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成４』　国立歴史民族博物館



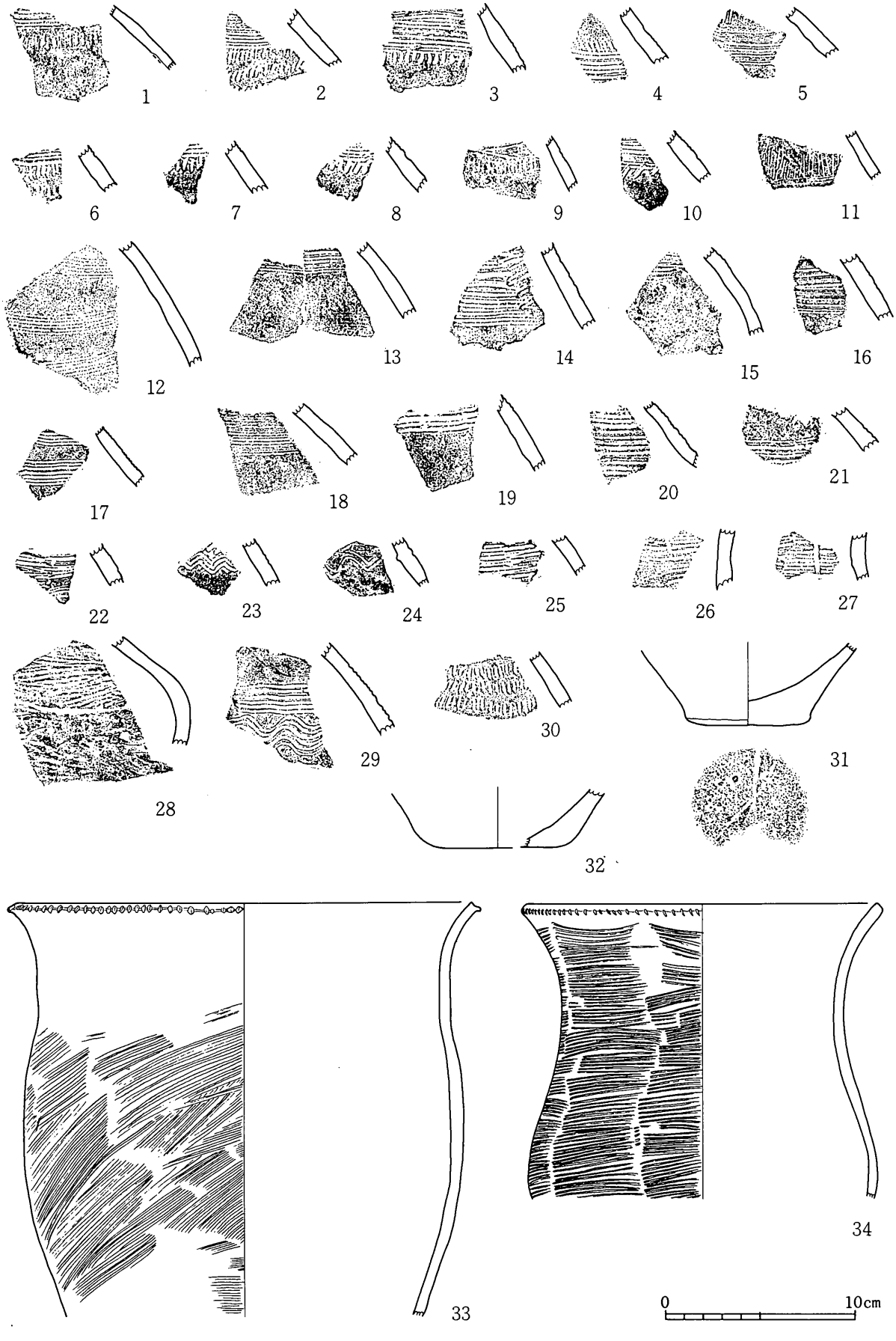
第１図　ＳＢ１１出土土器



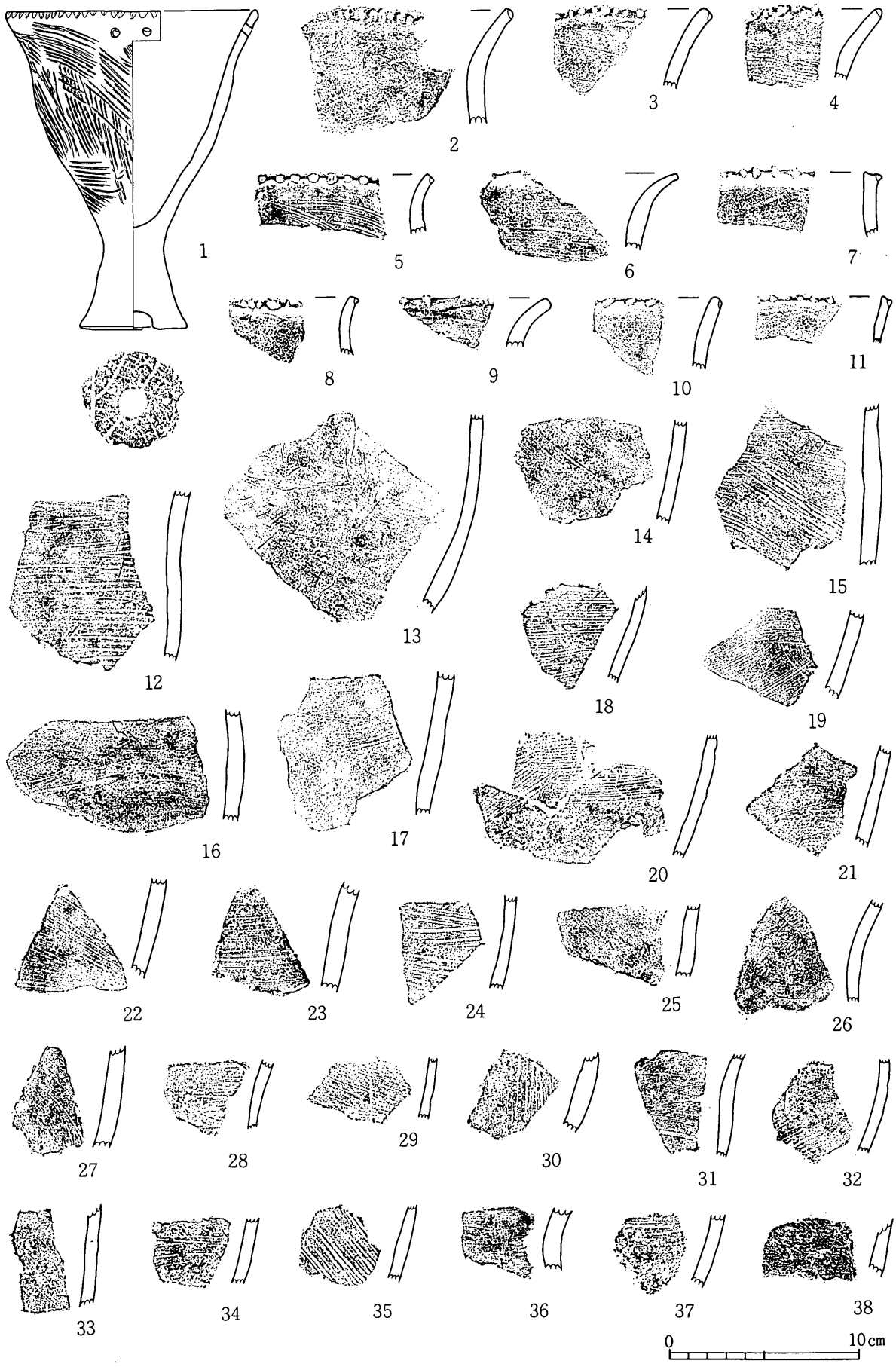
第２図　ＳＢ１１（１～10）・ＳＢ１２（11～43）出土遺物



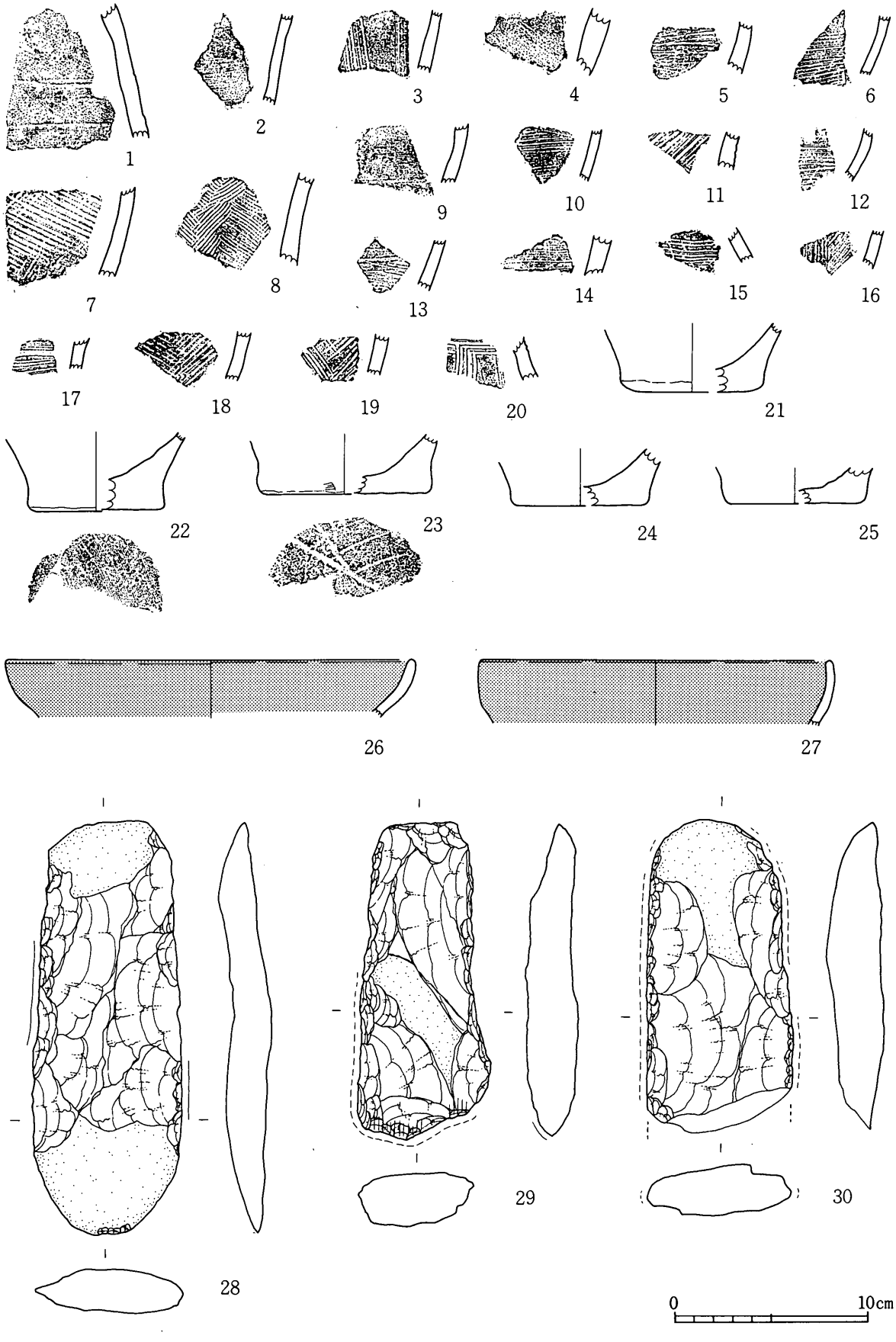
第３図　ＳＢ１２（１～６）・ＳＢ１３（７～28）出土遺物



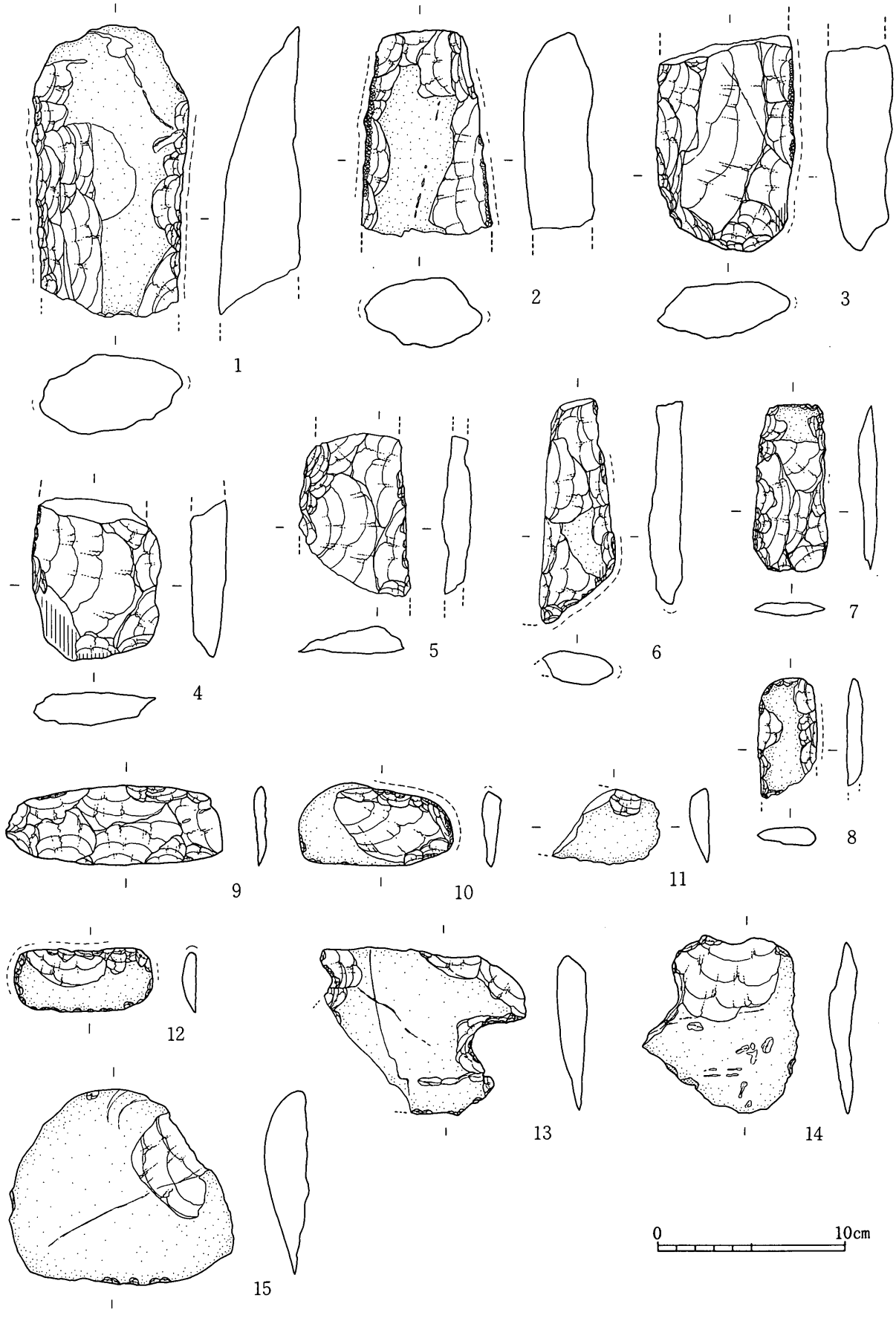
第4図　ＳＢ１３出土土器(1)



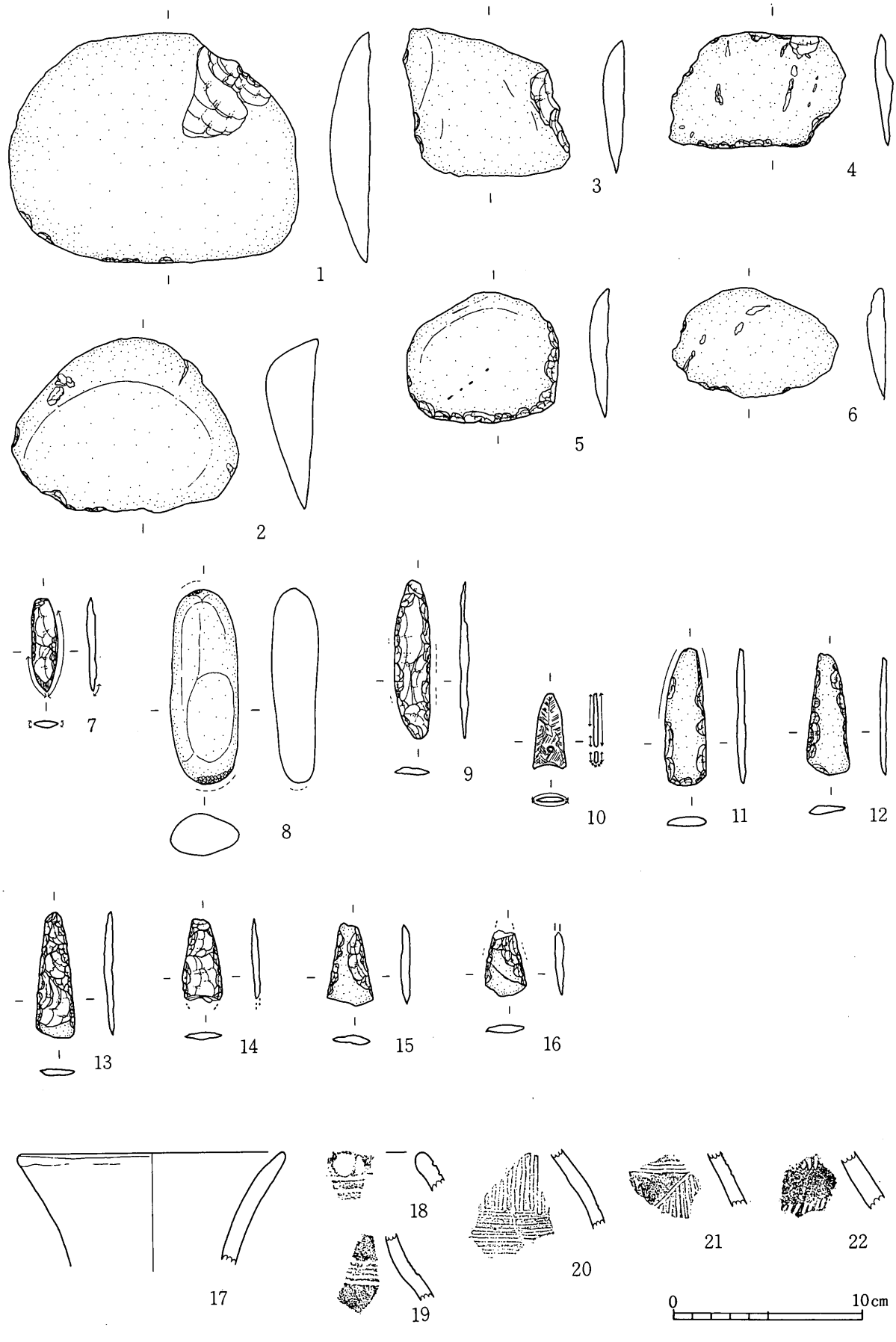
第５図　ＳＢ１３出土土器(2)



第6図　ＳＢ１３出土遺物

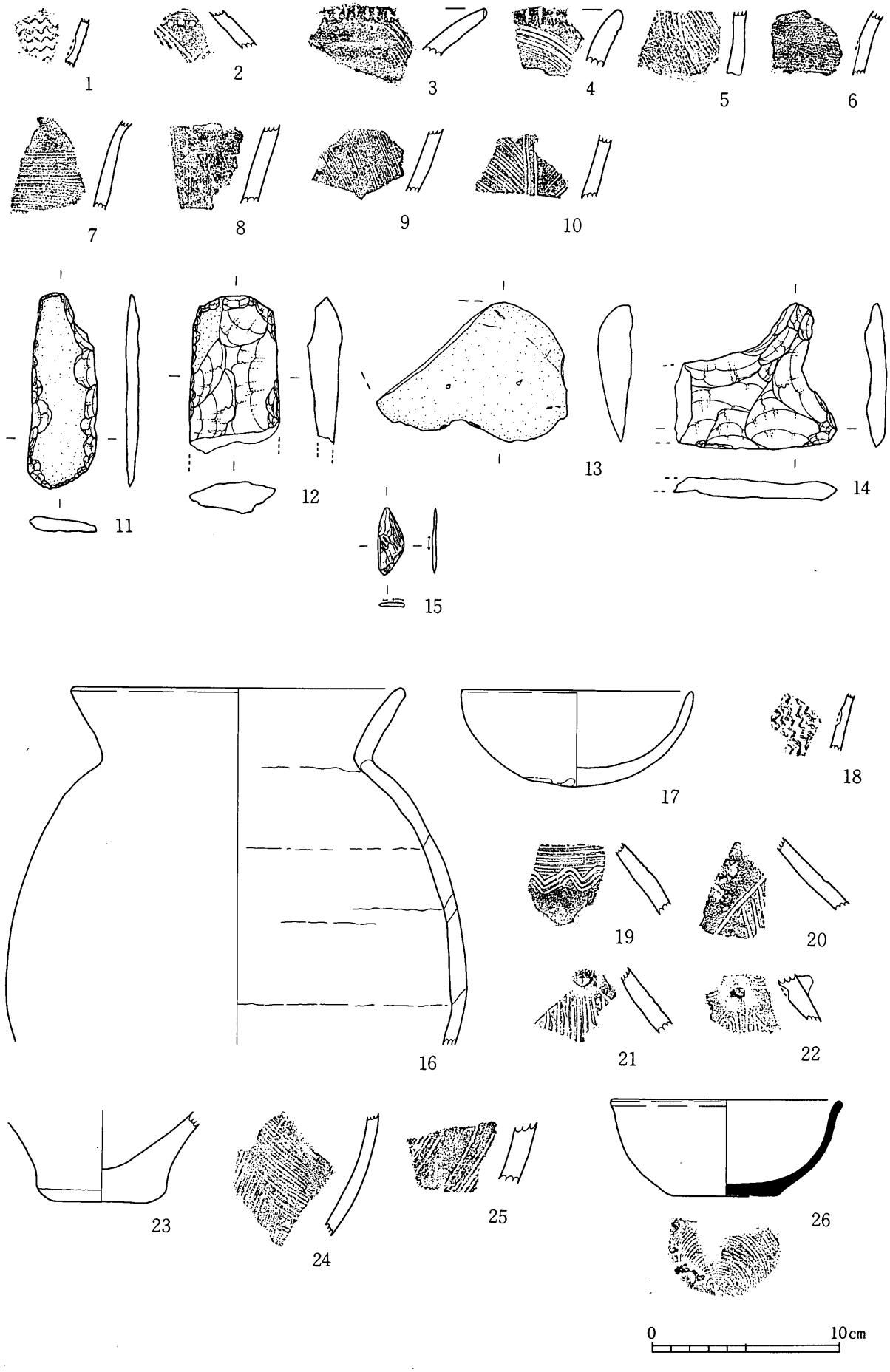


第７図　ＳＢ１３出土石器

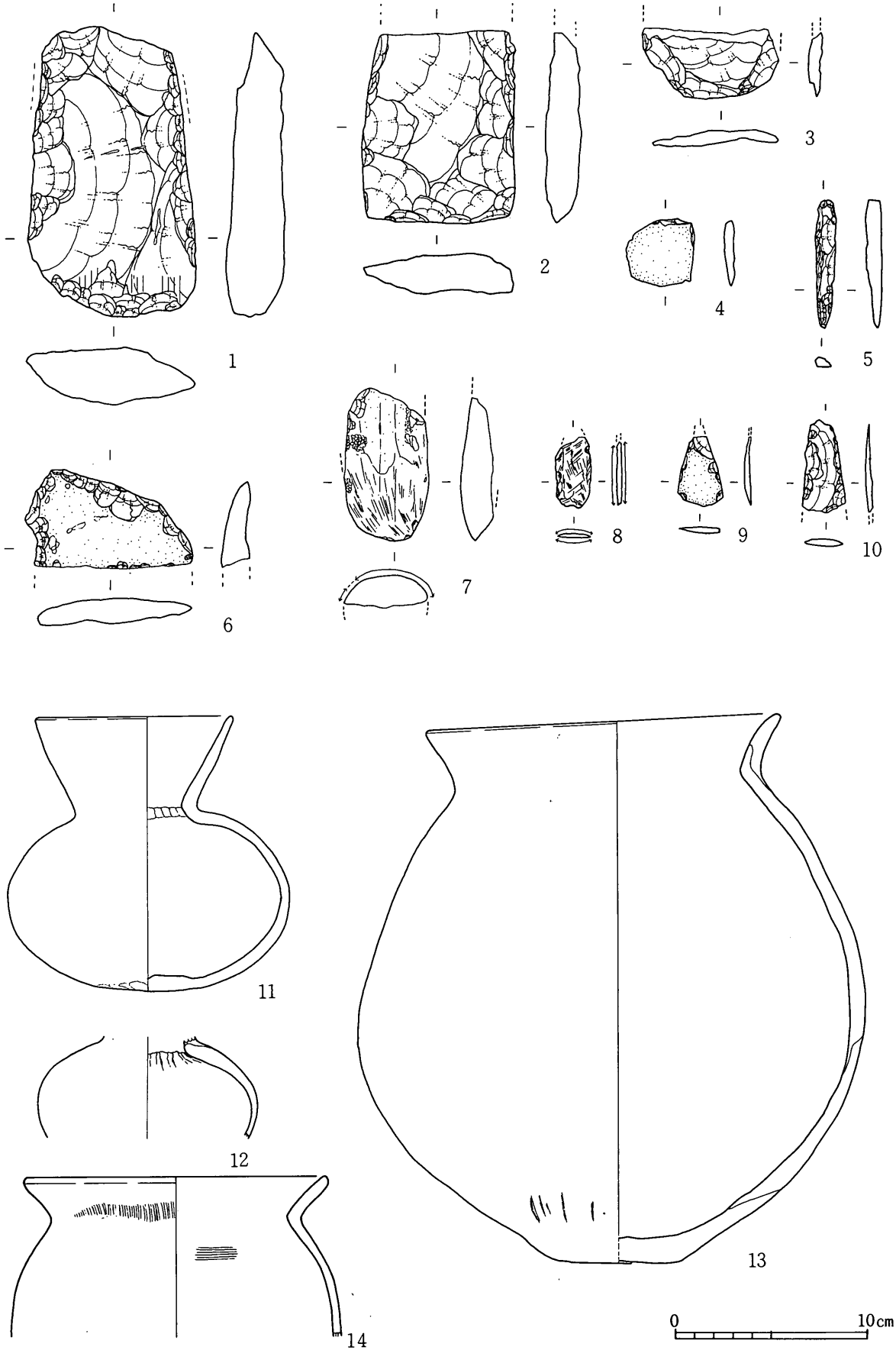


第8図　ＳＢ１３（１～16）・ＳＢ１４（17～22）出土遺物

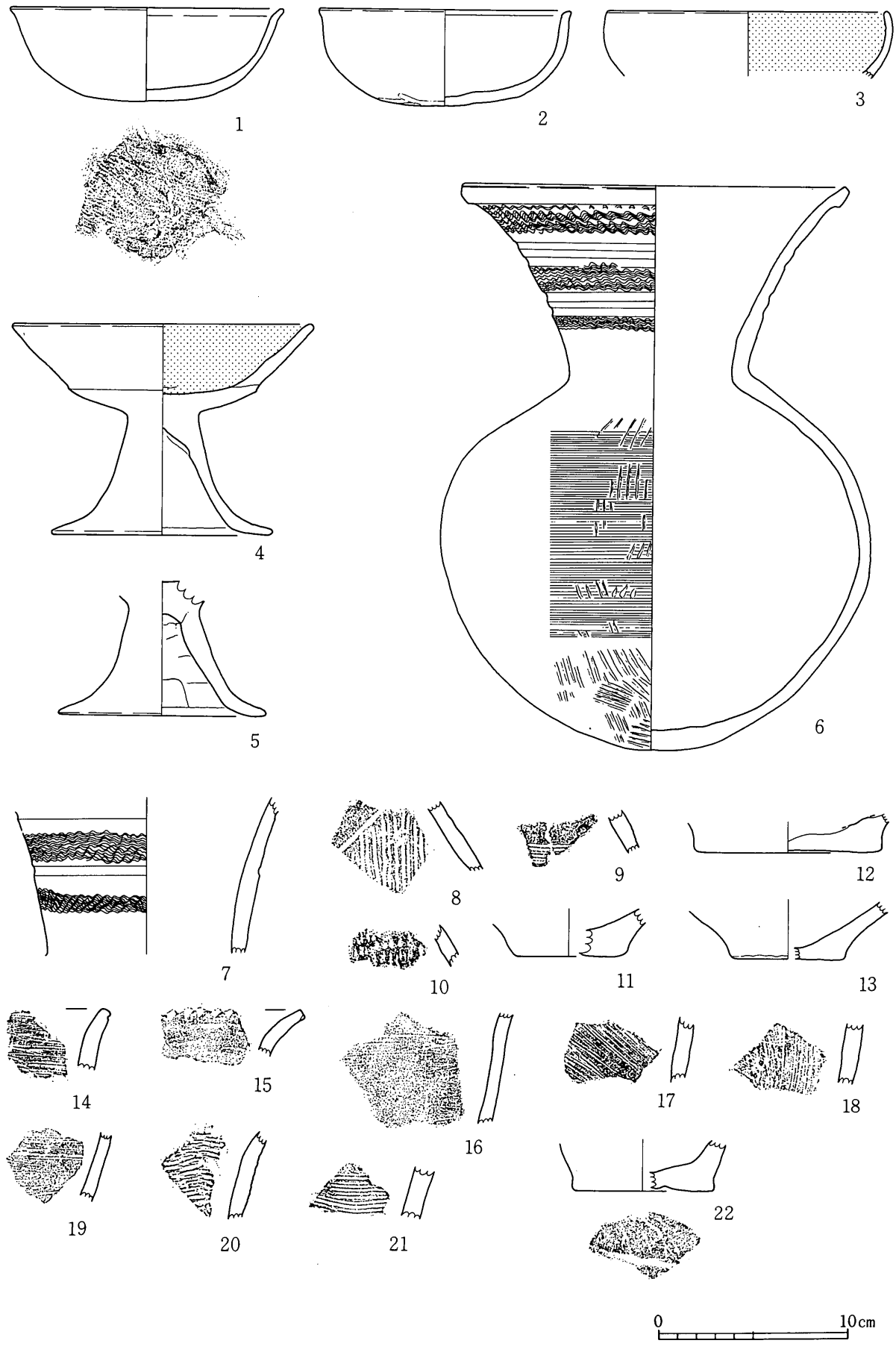
第9図　ＳＢ１４（１～14）・ＳＭ０１（15～17）出土遺物



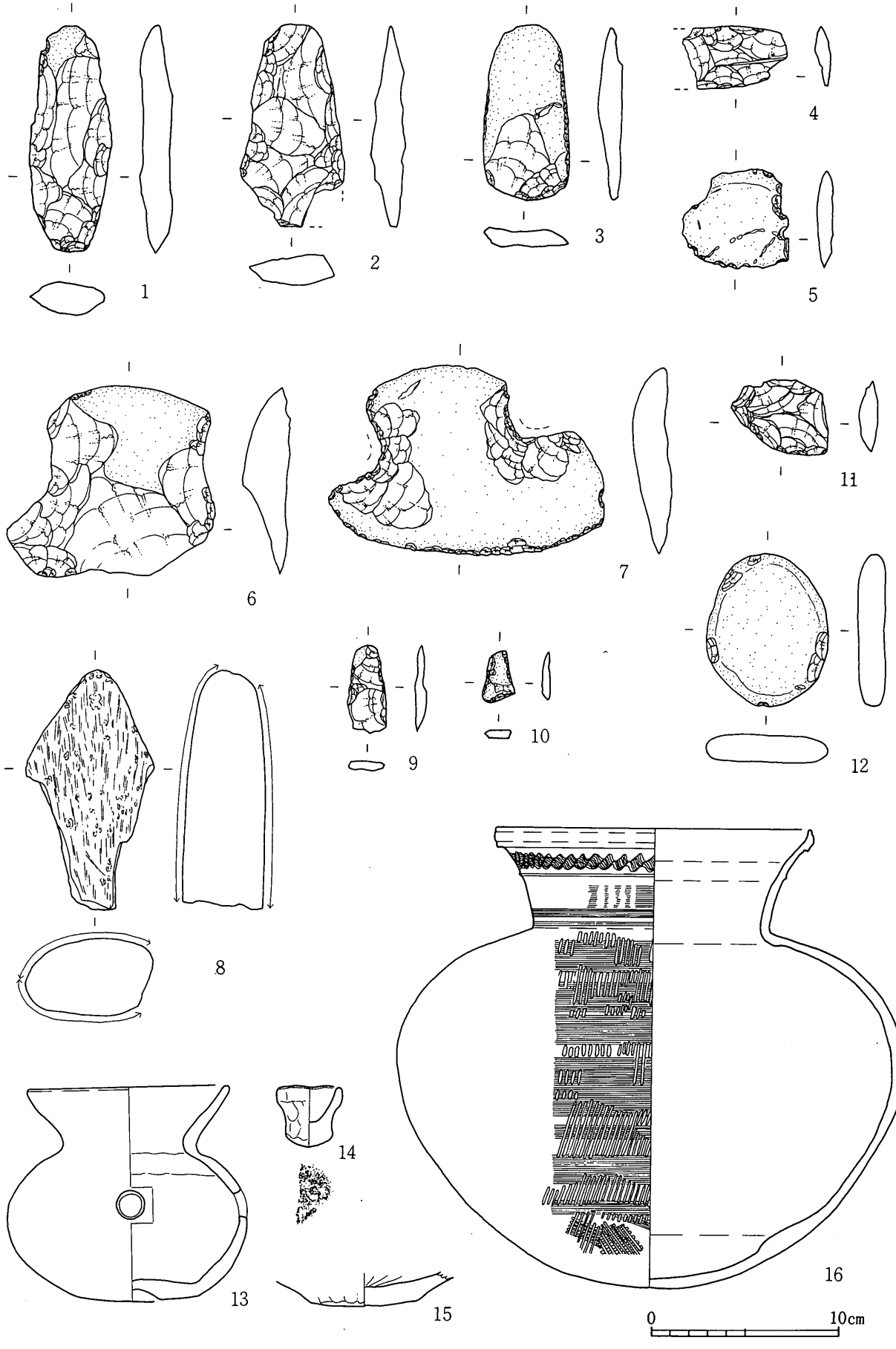
第10図　ＳＭ０１（１～15）・ＳＭ０２（16～26）出土遺物



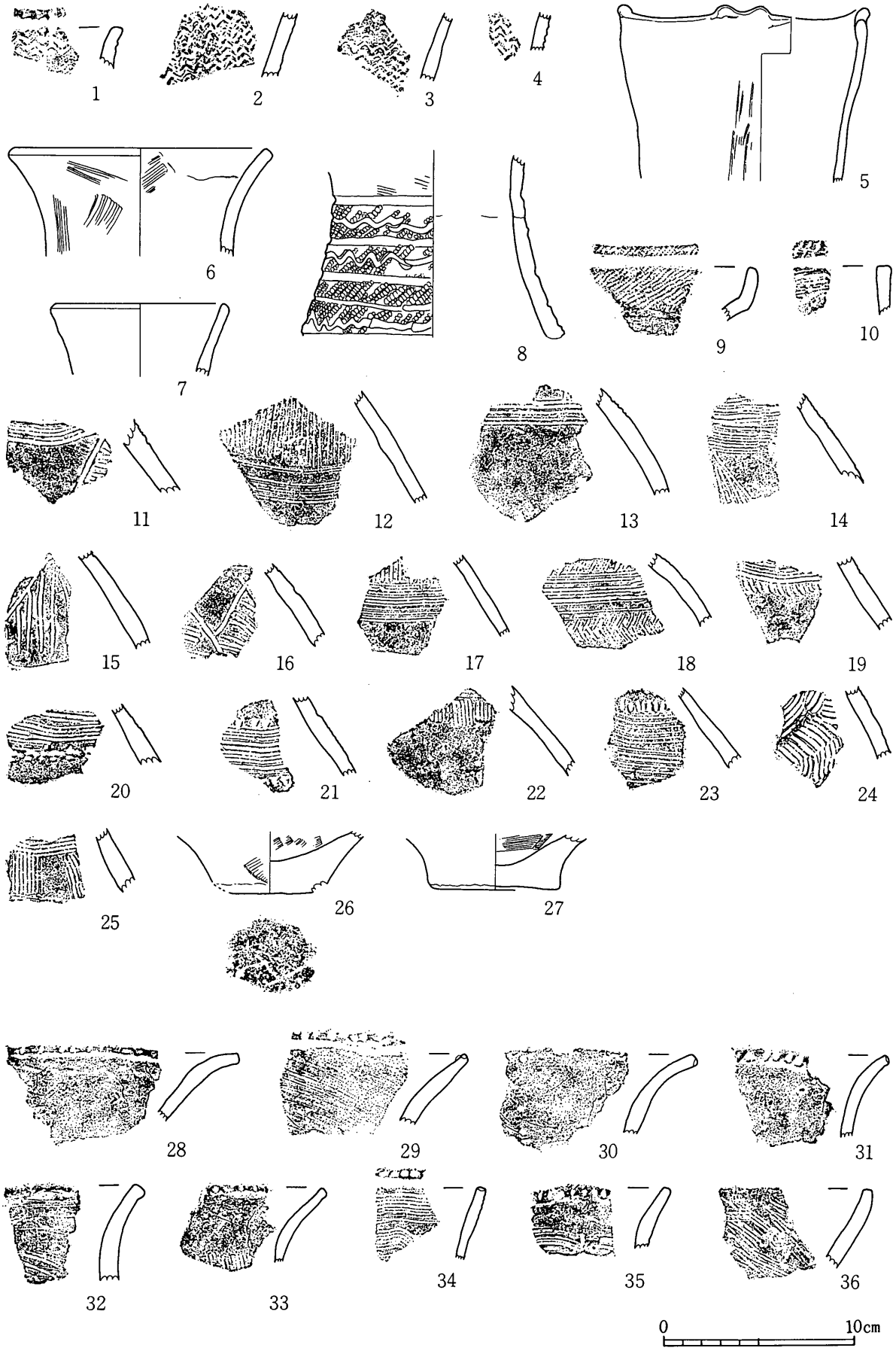
第11図　ＳＭ０２（１～10）・ＳＭ０３（11～14）出土土器



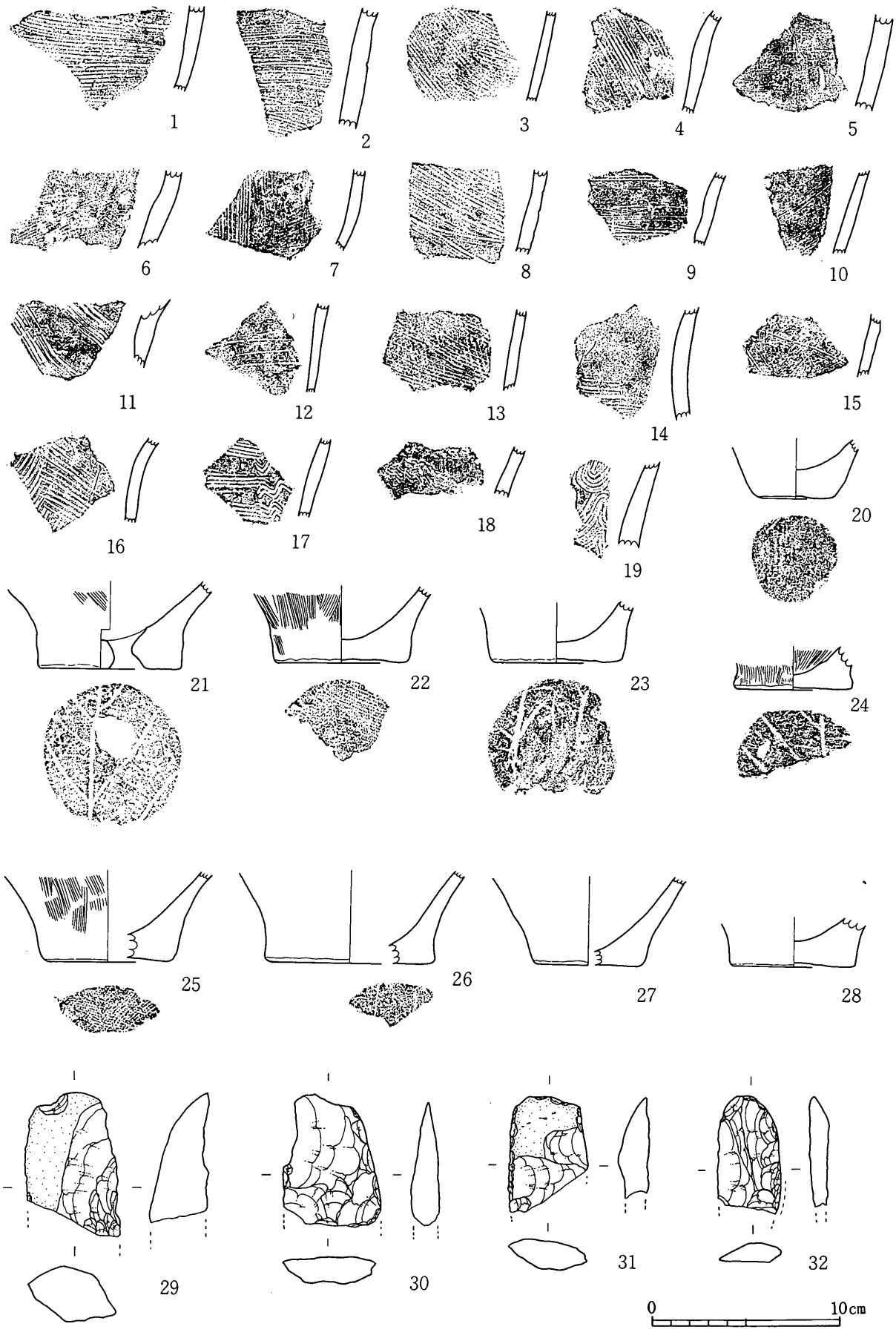
第12図　ＳＭ０３出土土器



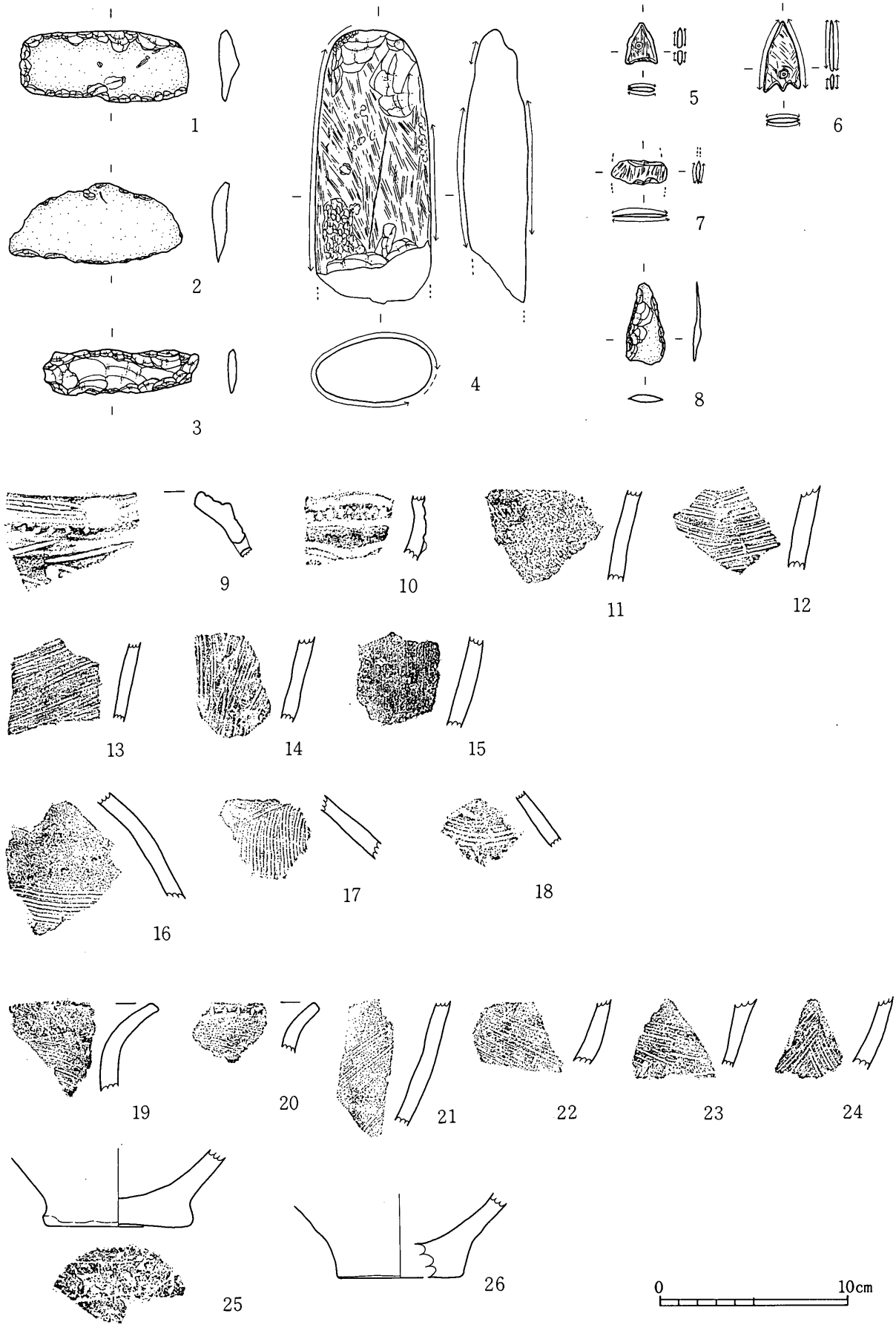
第13図　ＳＭ０３（１～12）・ＳＭ０４周溝（13～16）出土遺物



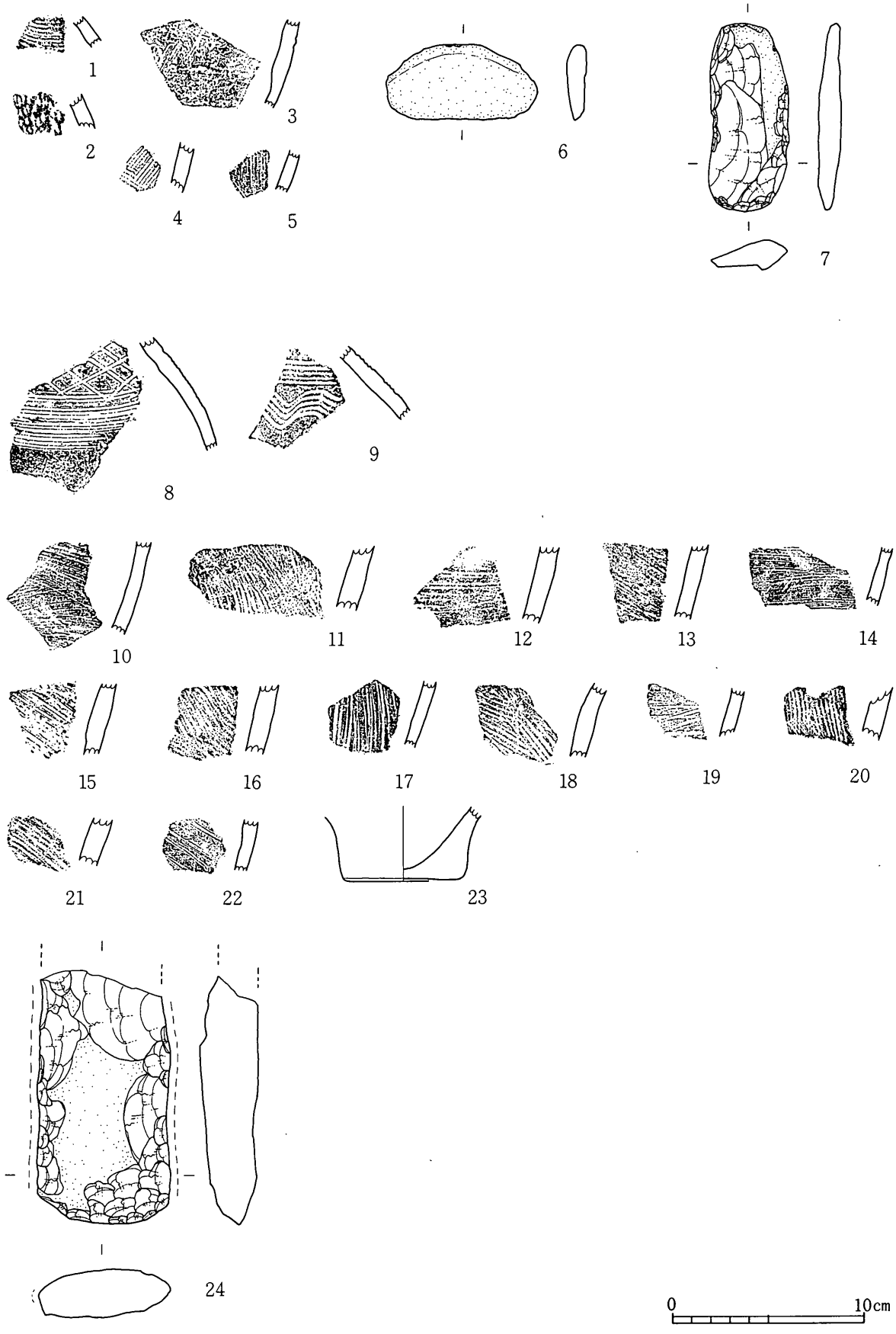
第14図　ＳＭ０４周溝出土土器



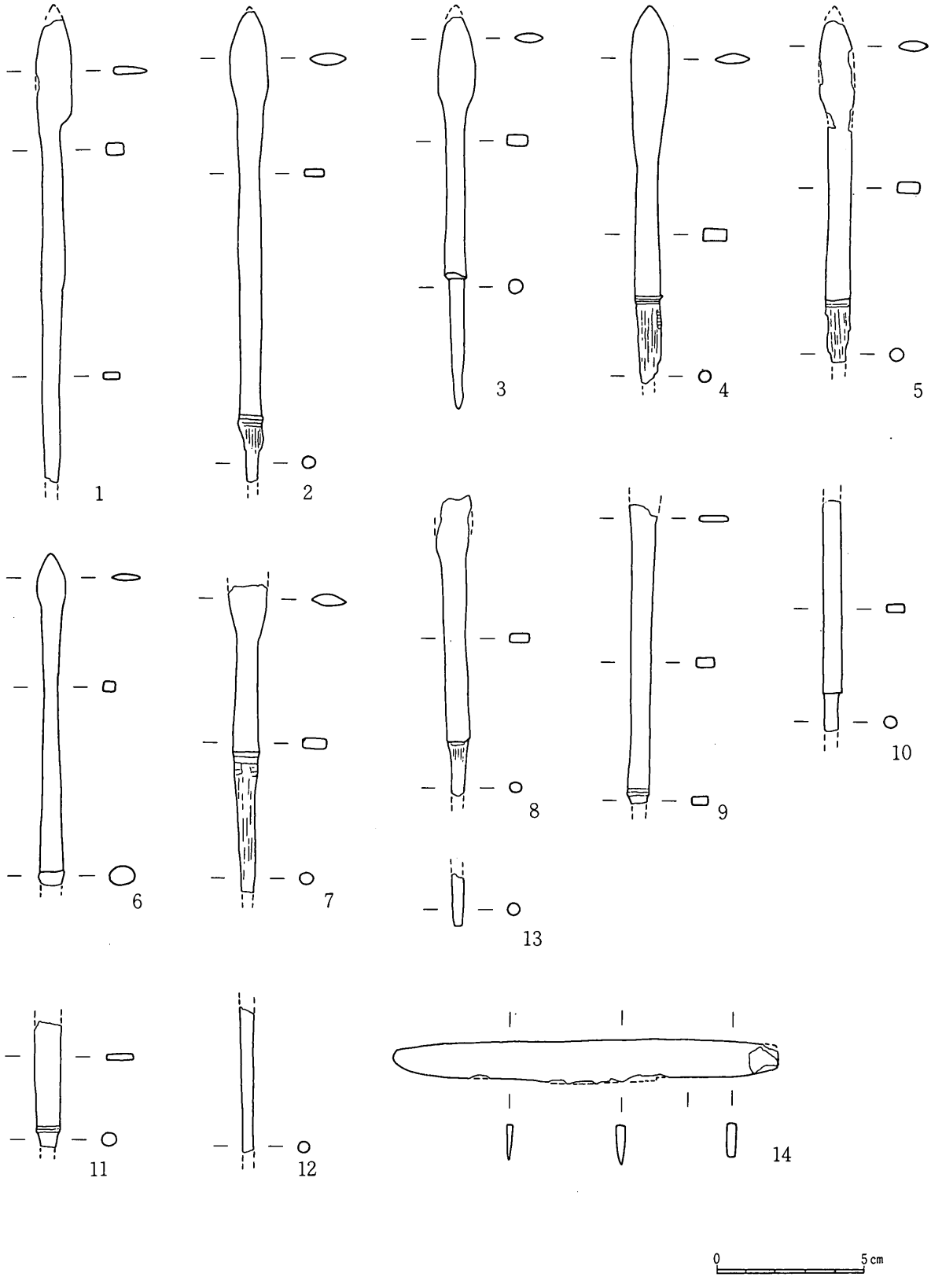
第15図　ＳＭ０４周溝出土遺物



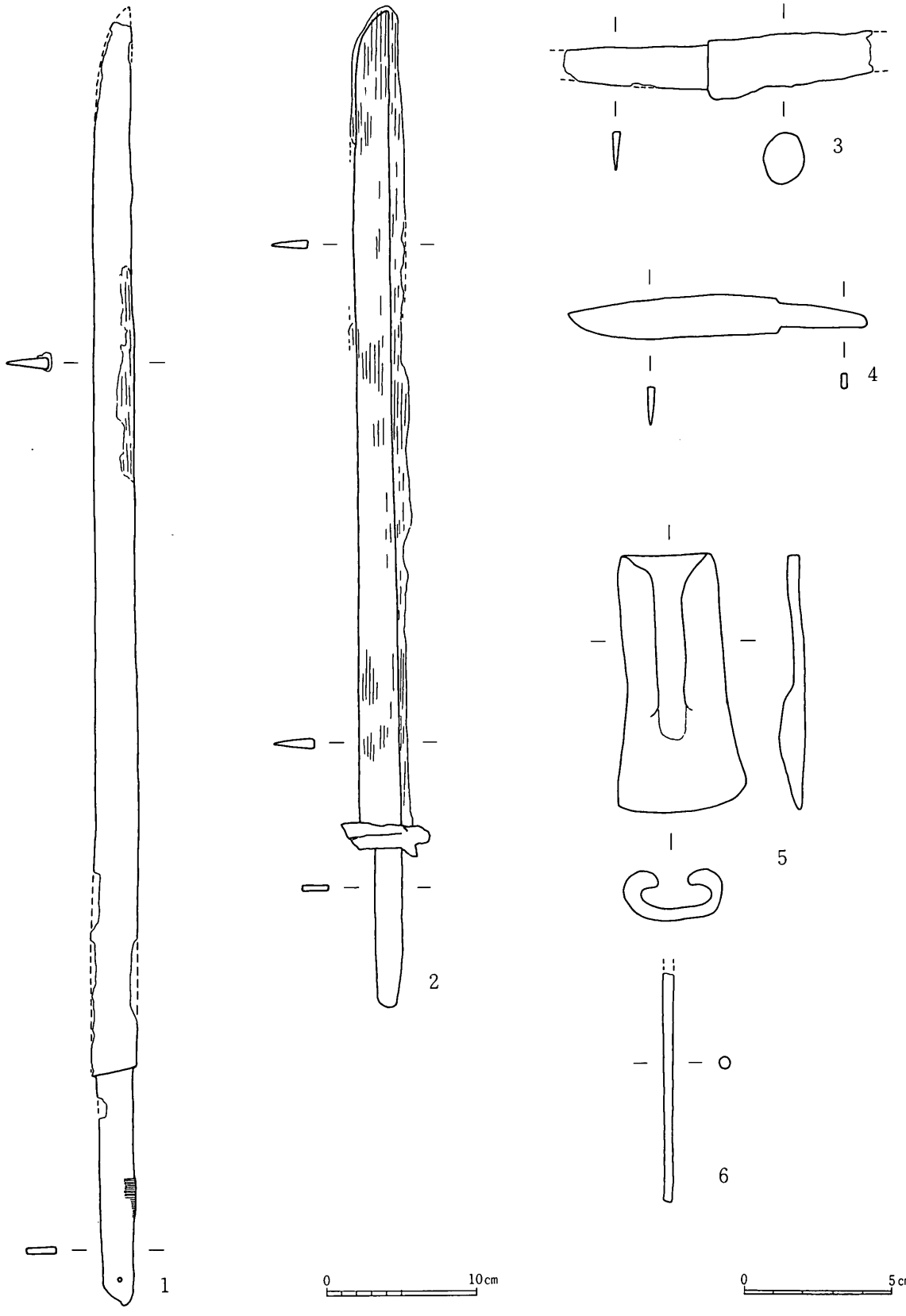
第16図　ＳＭ０４周溝（１～７）・ＳＭ０４主体部（８～17）・ＳＭ０５（18～25）出土遺物



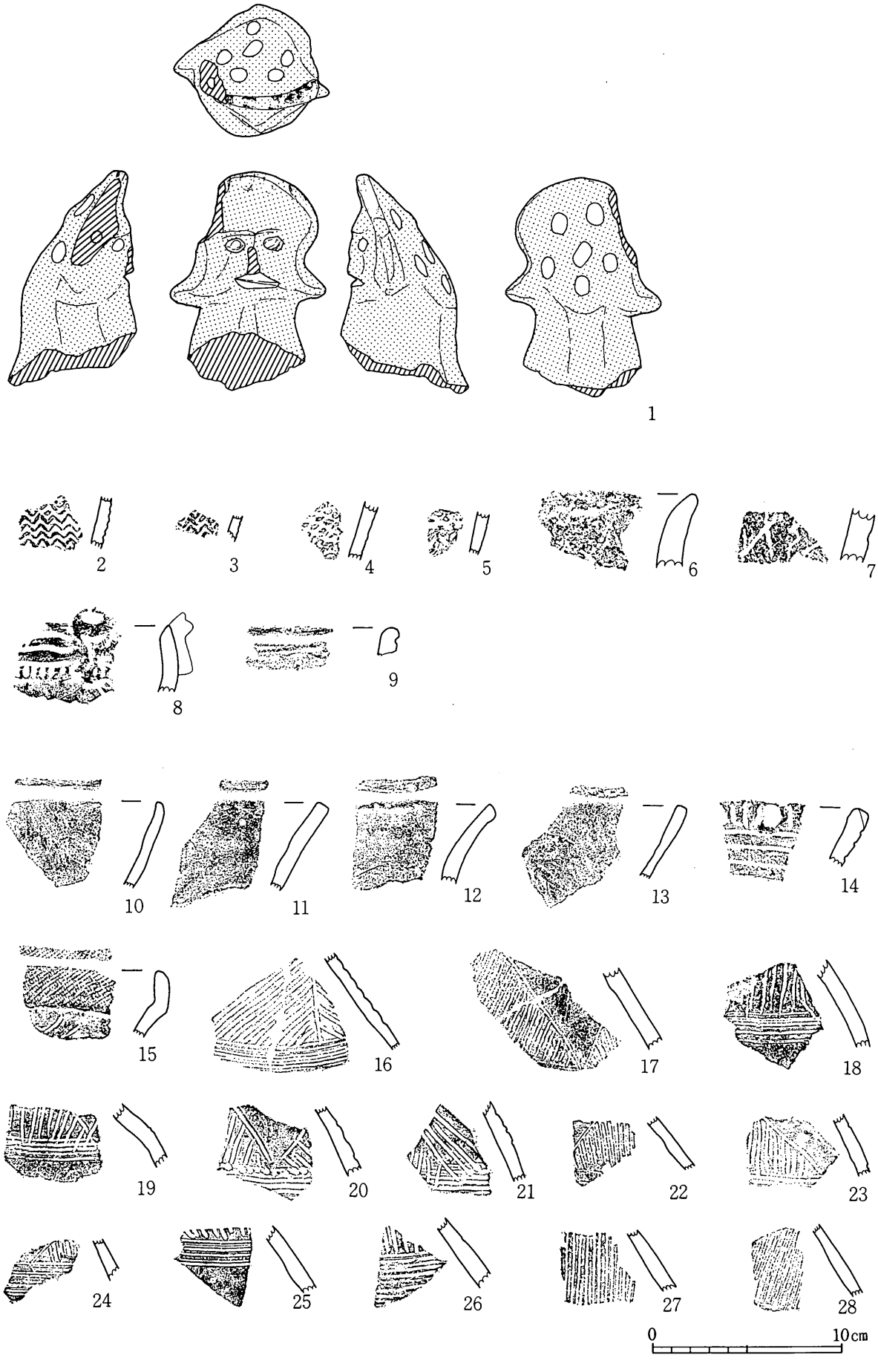
第17図　ＳＫ０１（１～５）・ＳＫ０３(6)・ＳＫ０５(7)・ＳＩ０１（８～24）出土遺物



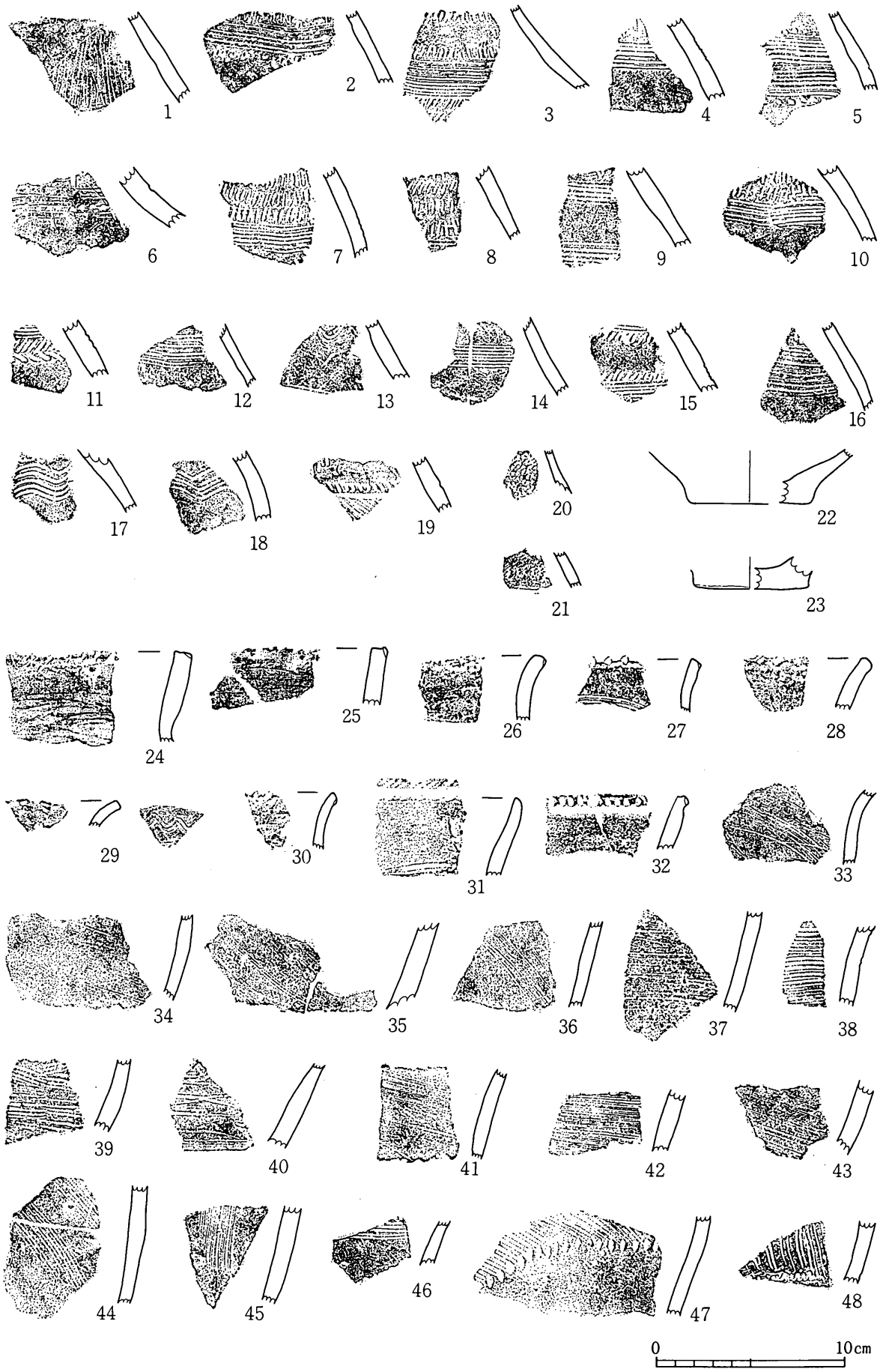
第18図　ＳＭ０１出土鉄器



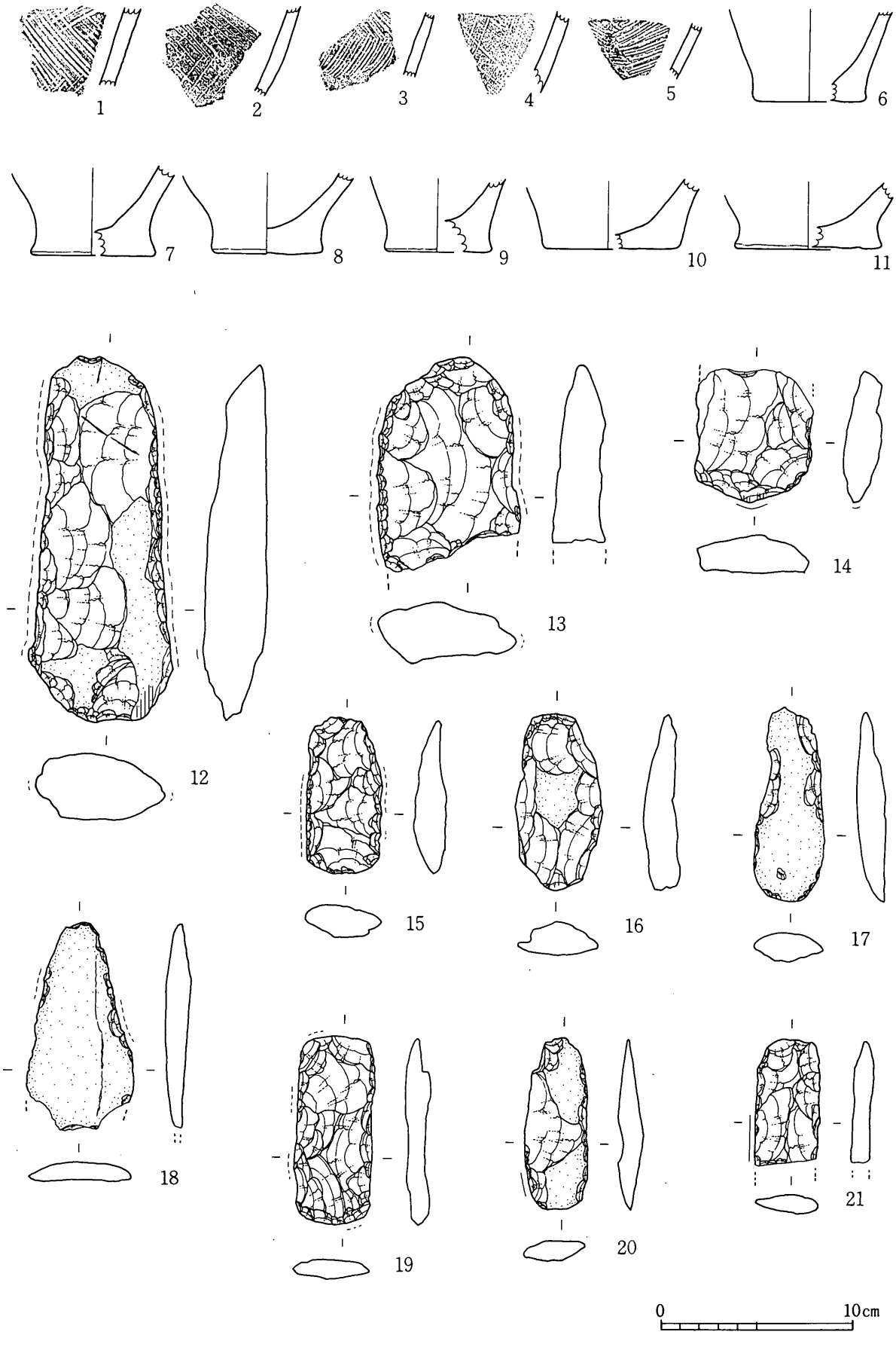
第19図　ＳＭ０４出土鉄器



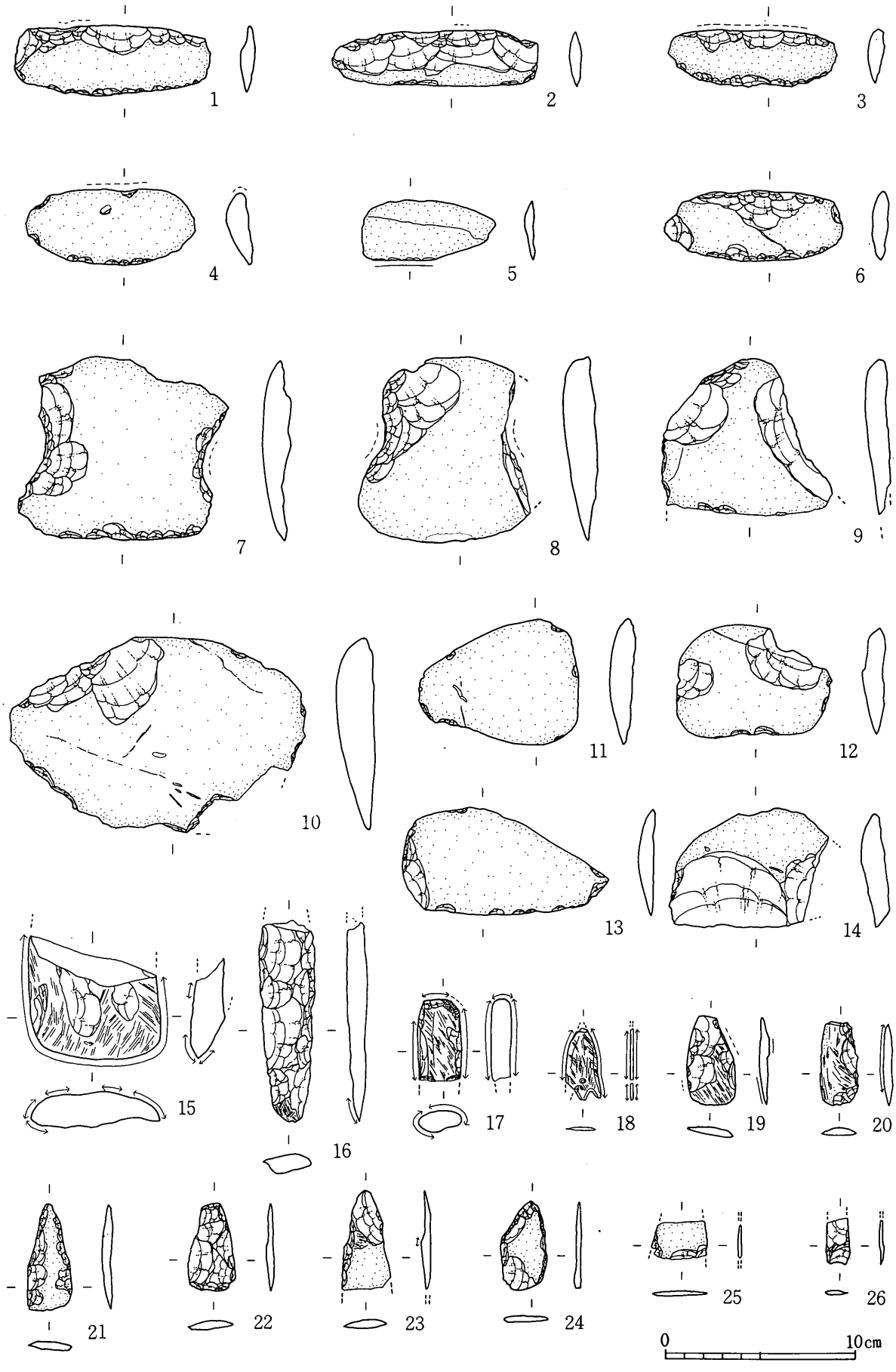
第20図　ＳＭ０１(1)・ＳＭ０４墳丘下（２～28）出土遺物



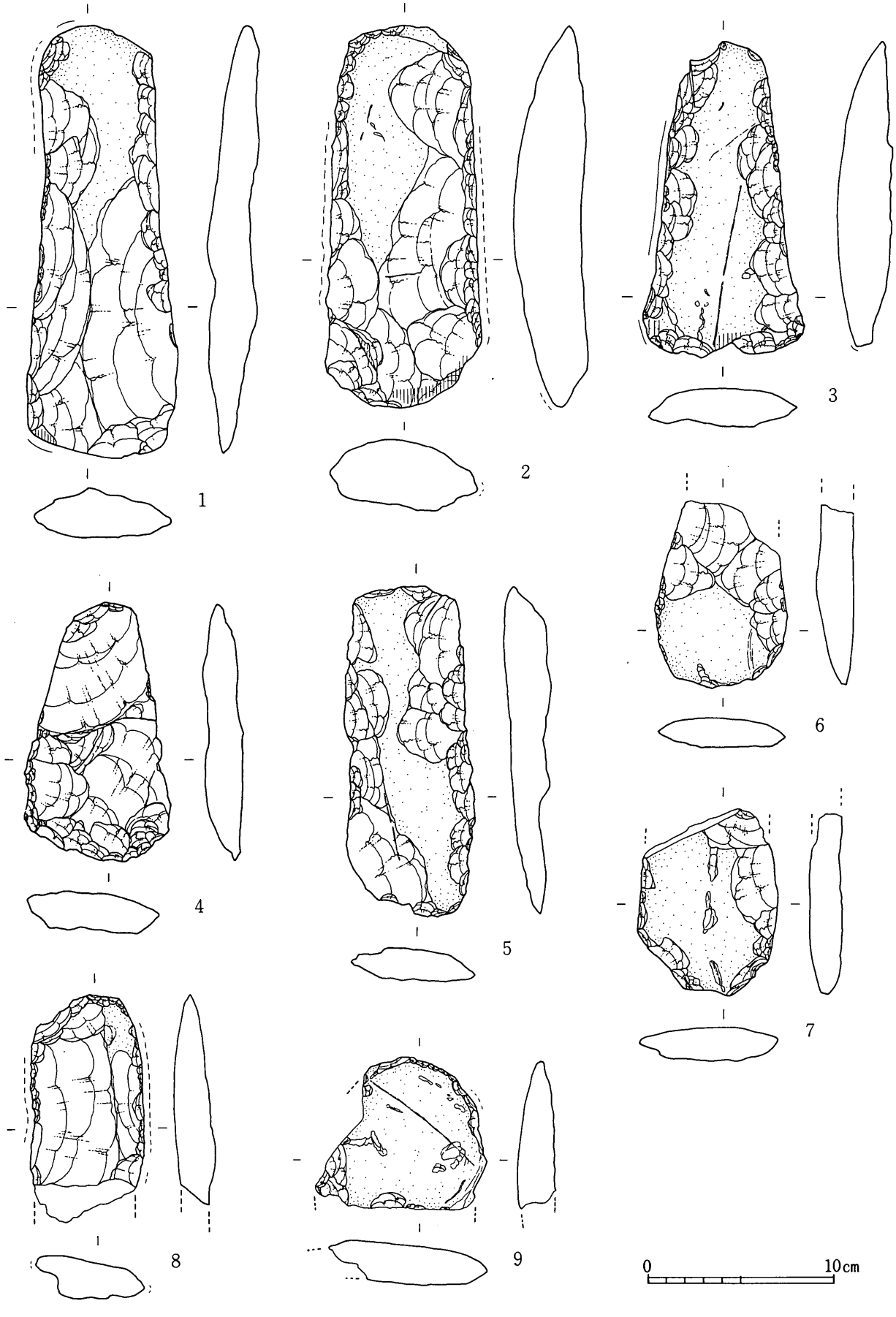
第21図　ＳＭ０４墳丘下出土土器



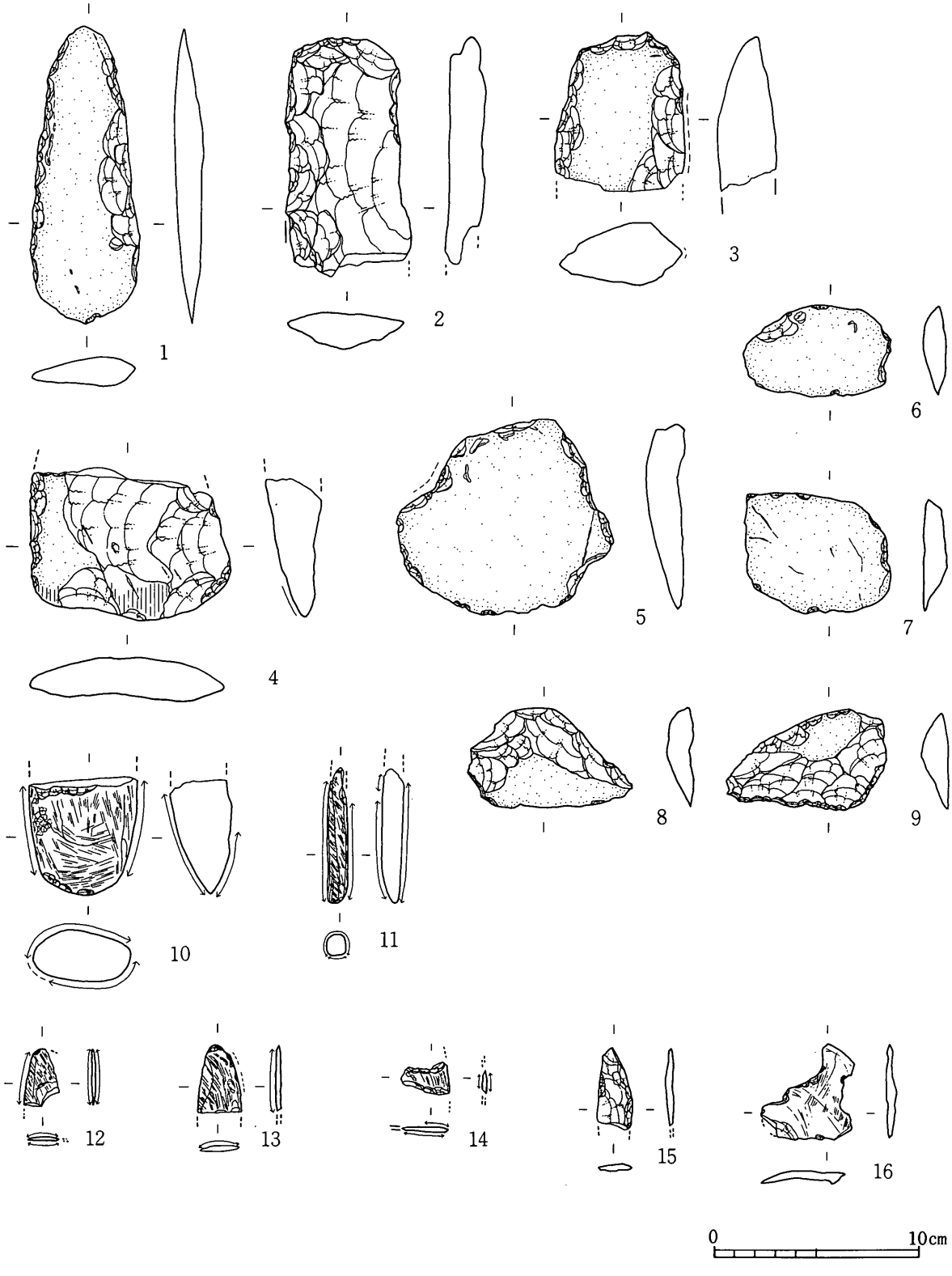
第22図　ＳＭ０４墳丘下（１～11）・ＳＢ１３上層（２～21）出土遺物



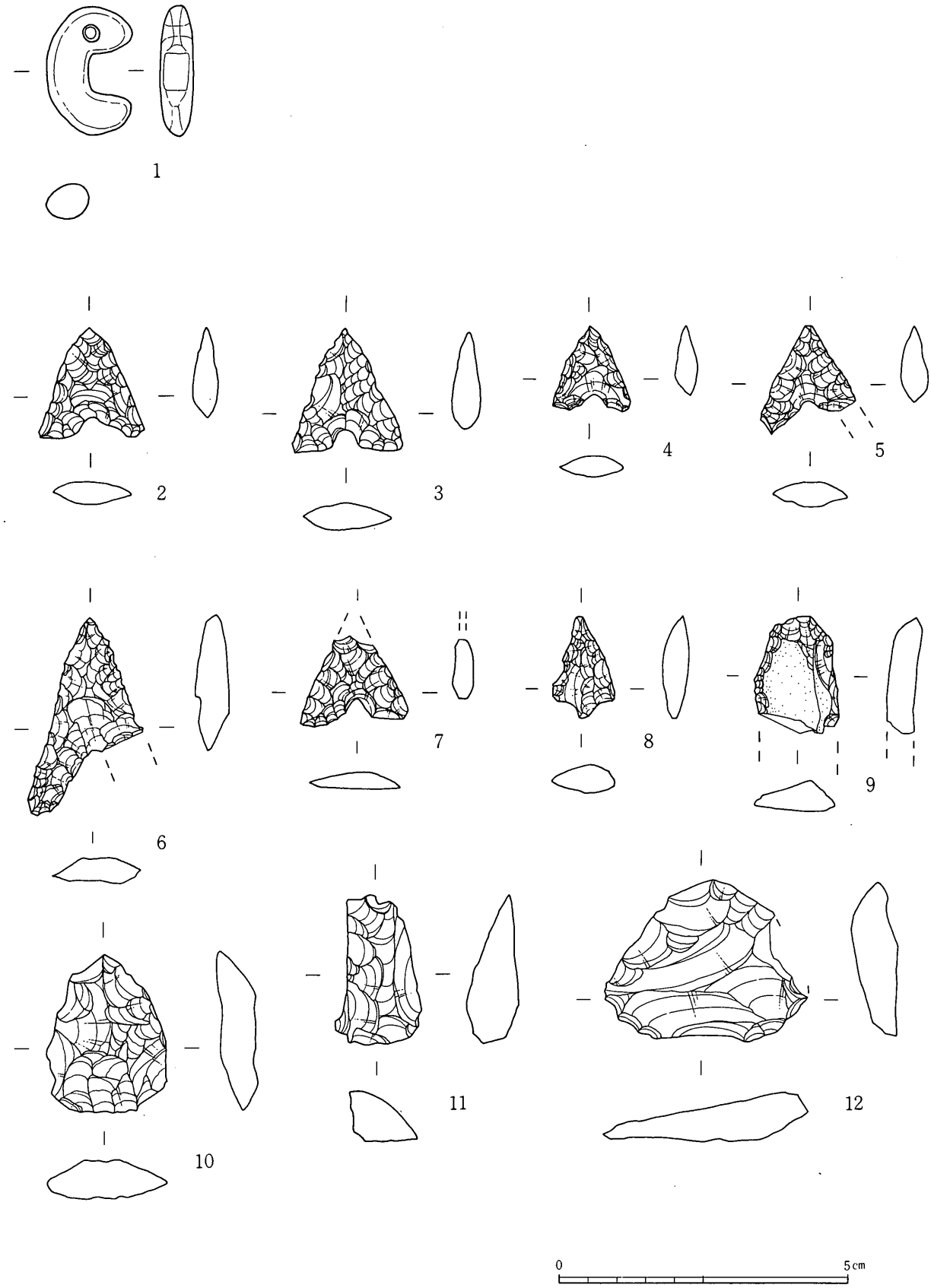
第23図　ＳＢ１３上層出土石器



第24図　遺構外出土石器(1)



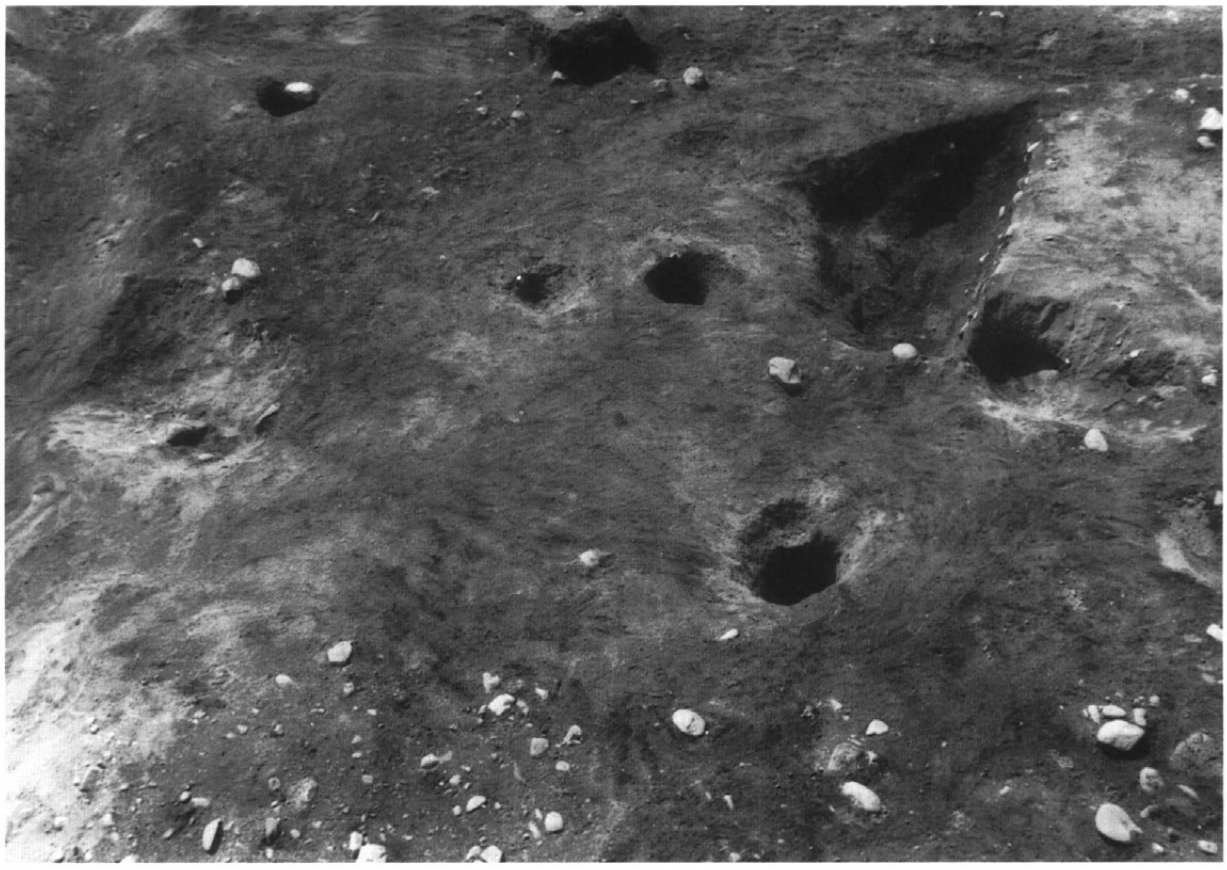
第25図　遺構外出土石器(2)



第26図　勾玉・小型石器

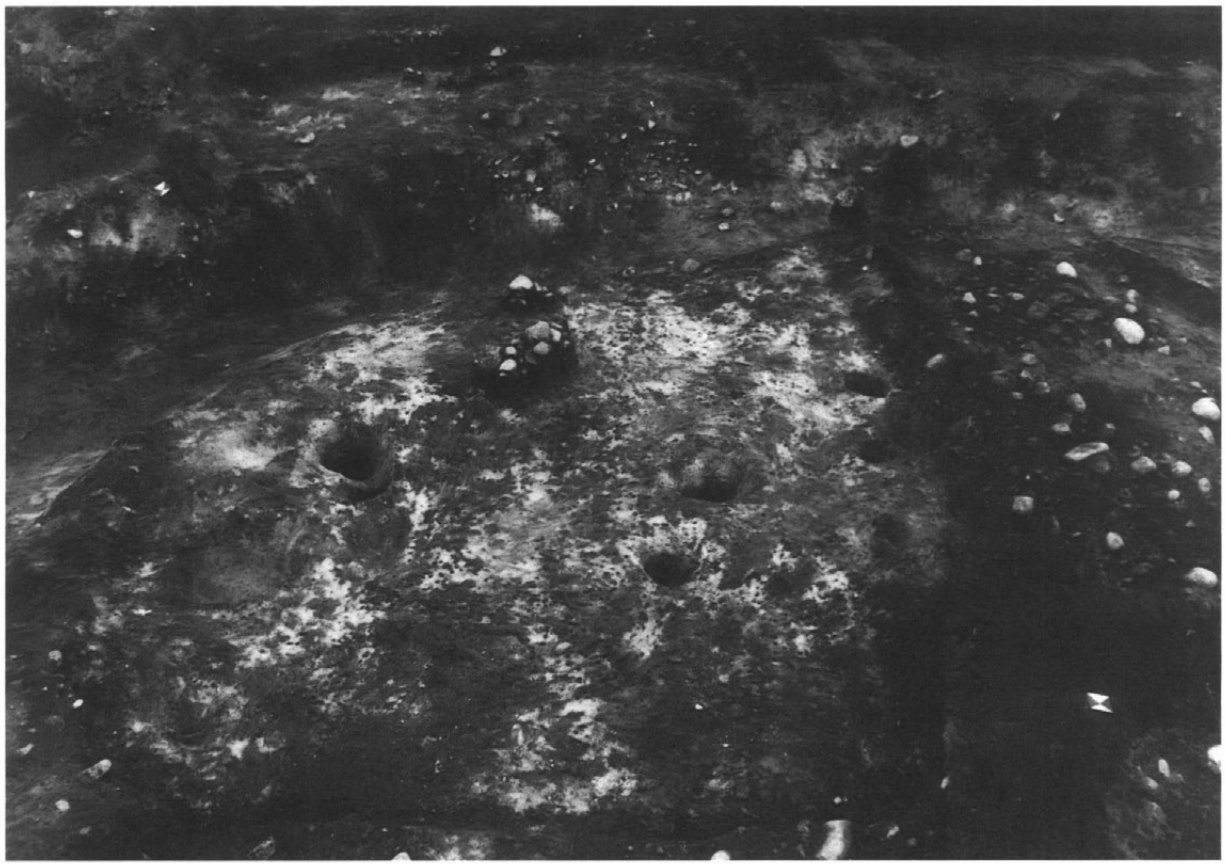
調査前（南西から）

調査前（北西から）



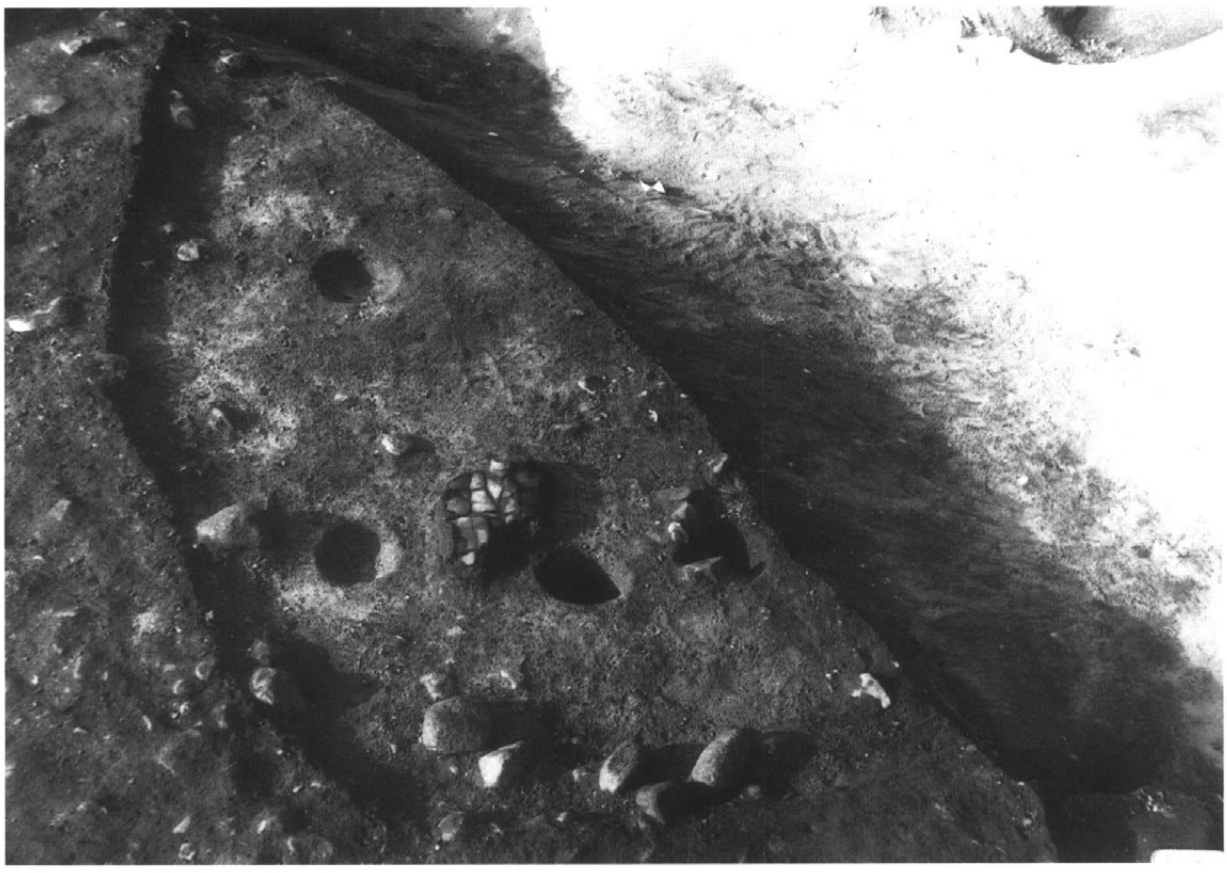
SB11

SB12



ＳＢ１３

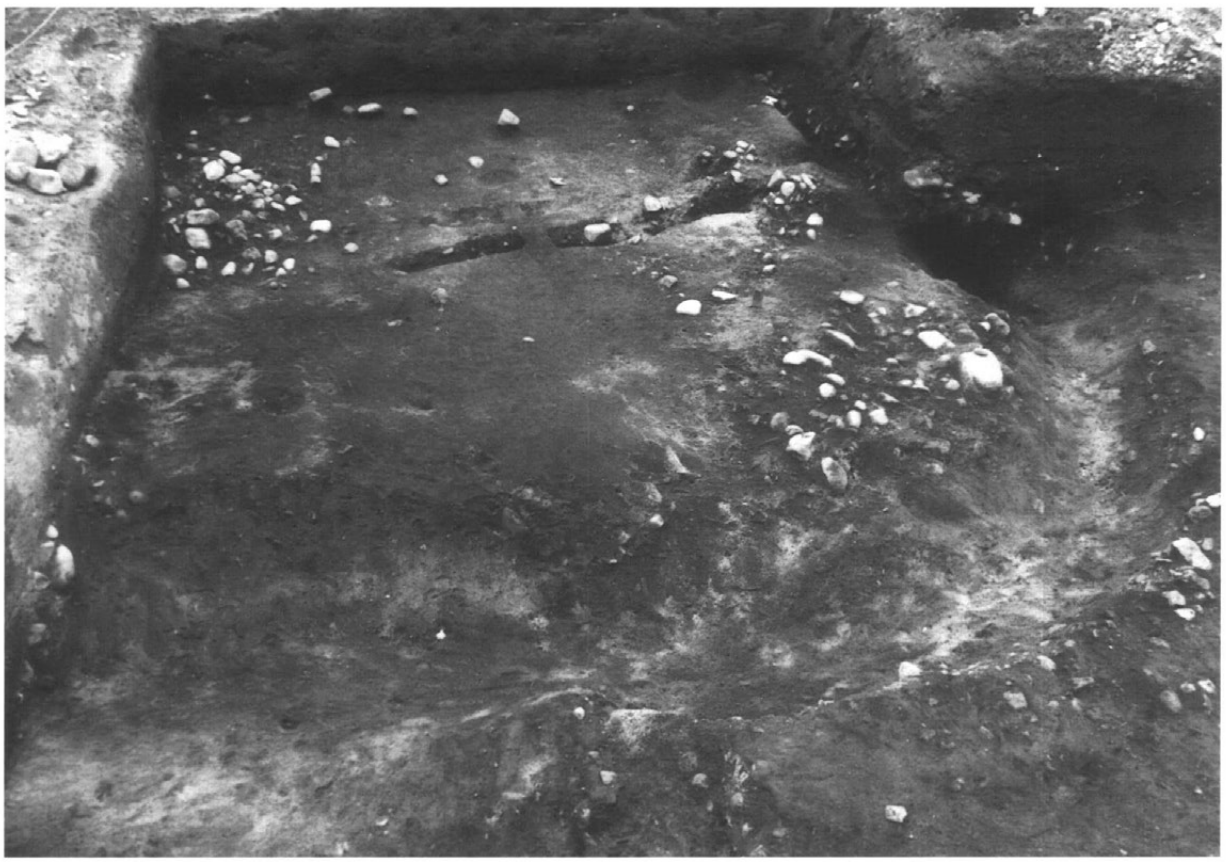
ＳＢ１３遺物出土状態



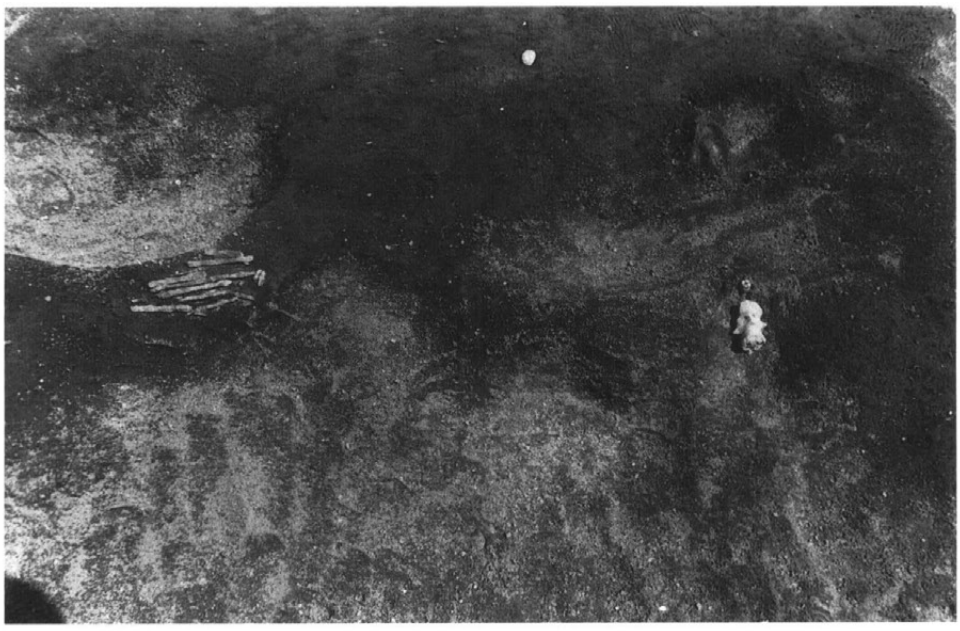
ＳＢ１４

ＳＢ１４甕出土状態

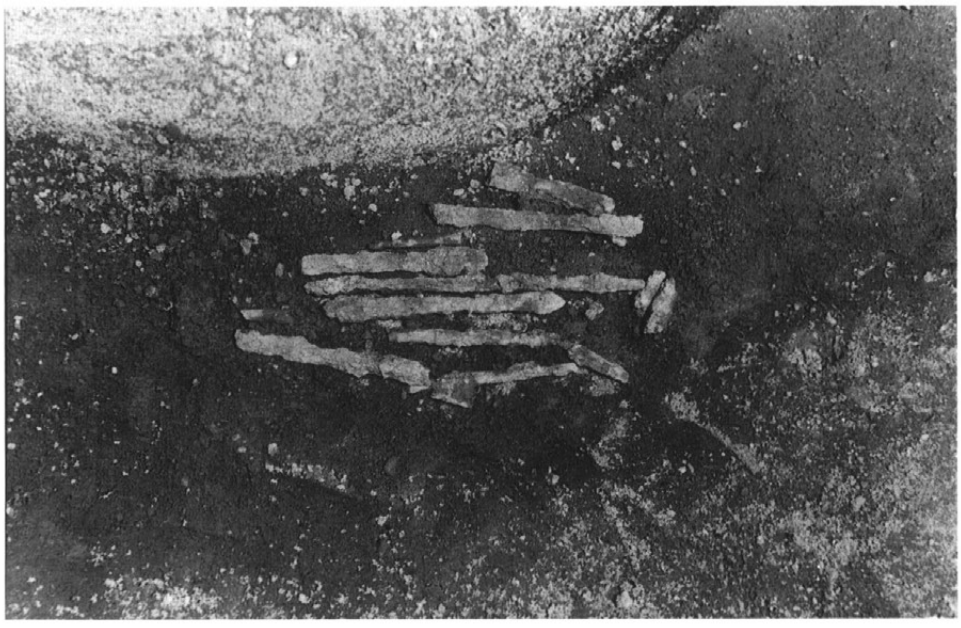
ＳＭ０１



ＳＭ０１貼石除去後



ＳＭ０１
主体部遺物出土状態



ＳＭ０１
鉄鏃出土状態

ＳＭ０１
土偶出土状態

ＳＭ０２（南から）

ＳＭ０２（東から）

ＳＭ０３（北から）

ＳＭ０３（西から）

ＳＭ０３石検出状態（北から）

ＳＭ０３石検出状態（西から）

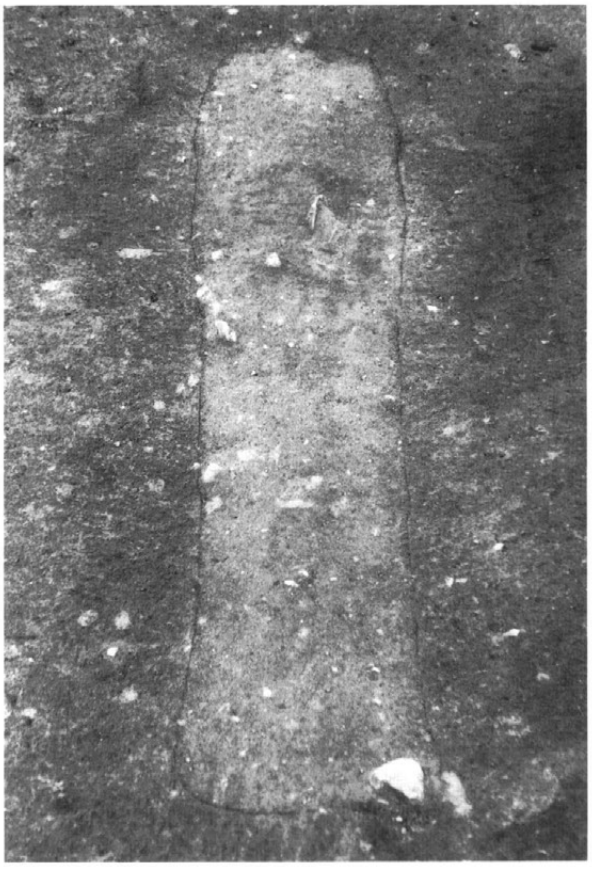
ＳＭ０３
遺物出土状態

ＳＭ０３須恵器
長頸壺出土状態

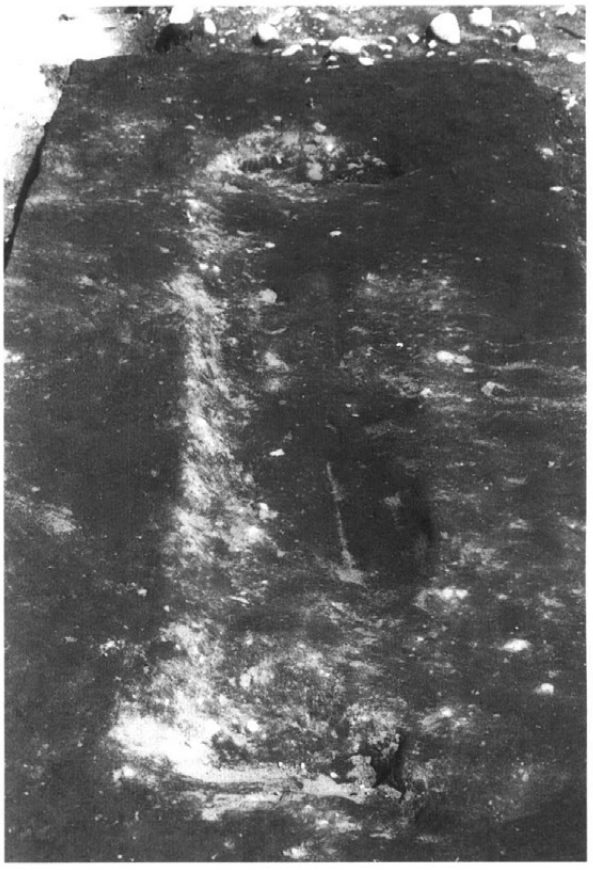
ＳＭ０３
土師器高坏出土状態

ＳＭ０４（南西から）

ＳＭ０４墳丘除去後（南西から）



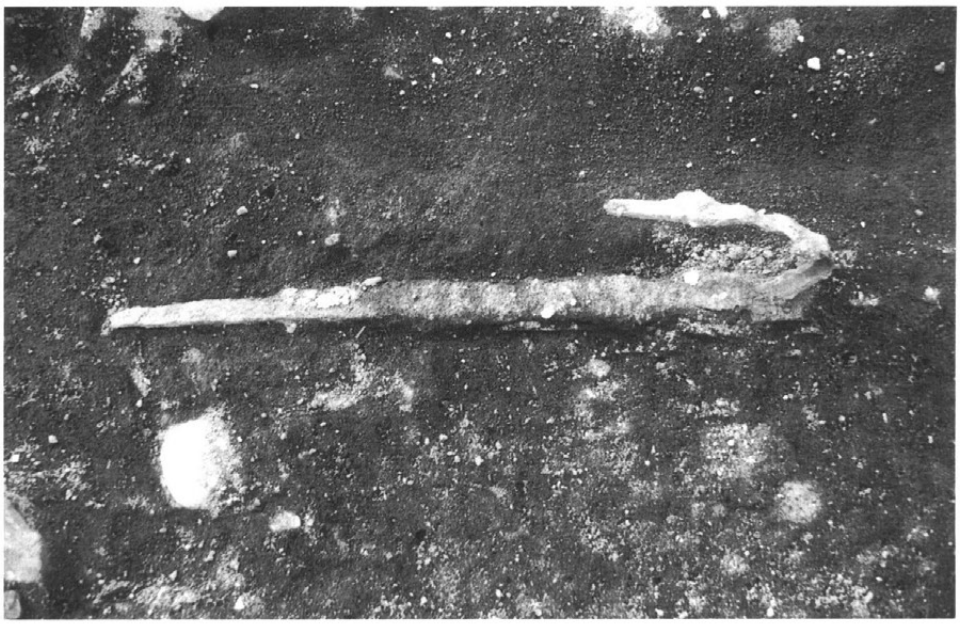
ＳＭ０４主体部検出状態



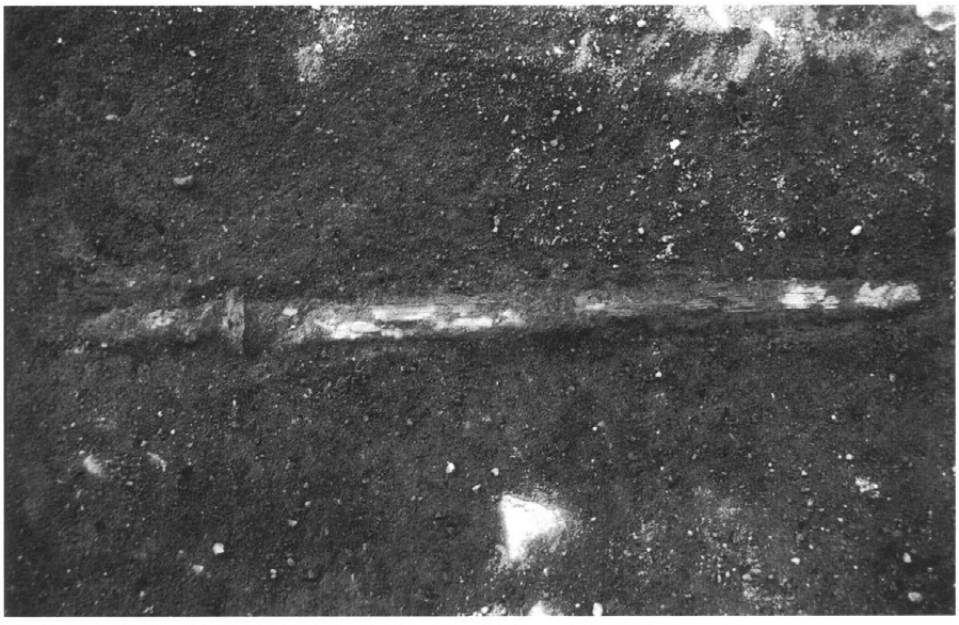
ＳＭ０４主体部完掘状態

ＳＭ０４主体部遺物出土状態

ＳＭ０４主体部遺物出土状態

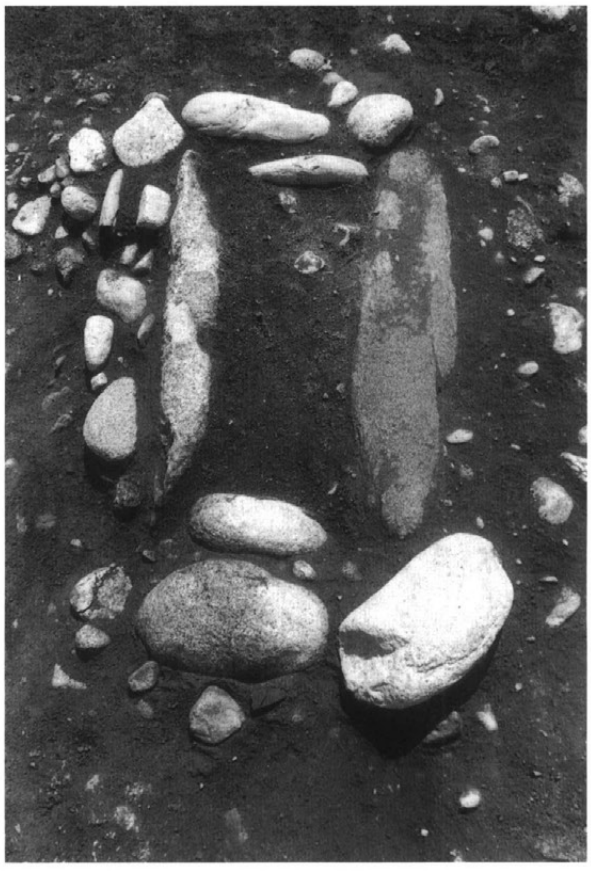


ＳＭ０４
主体部直刀出土状態



ＳＭ０４
主体部直刀出土状態

ＳＭ０４
主体部刀子出土状態



ＳＭ０４石組遺構

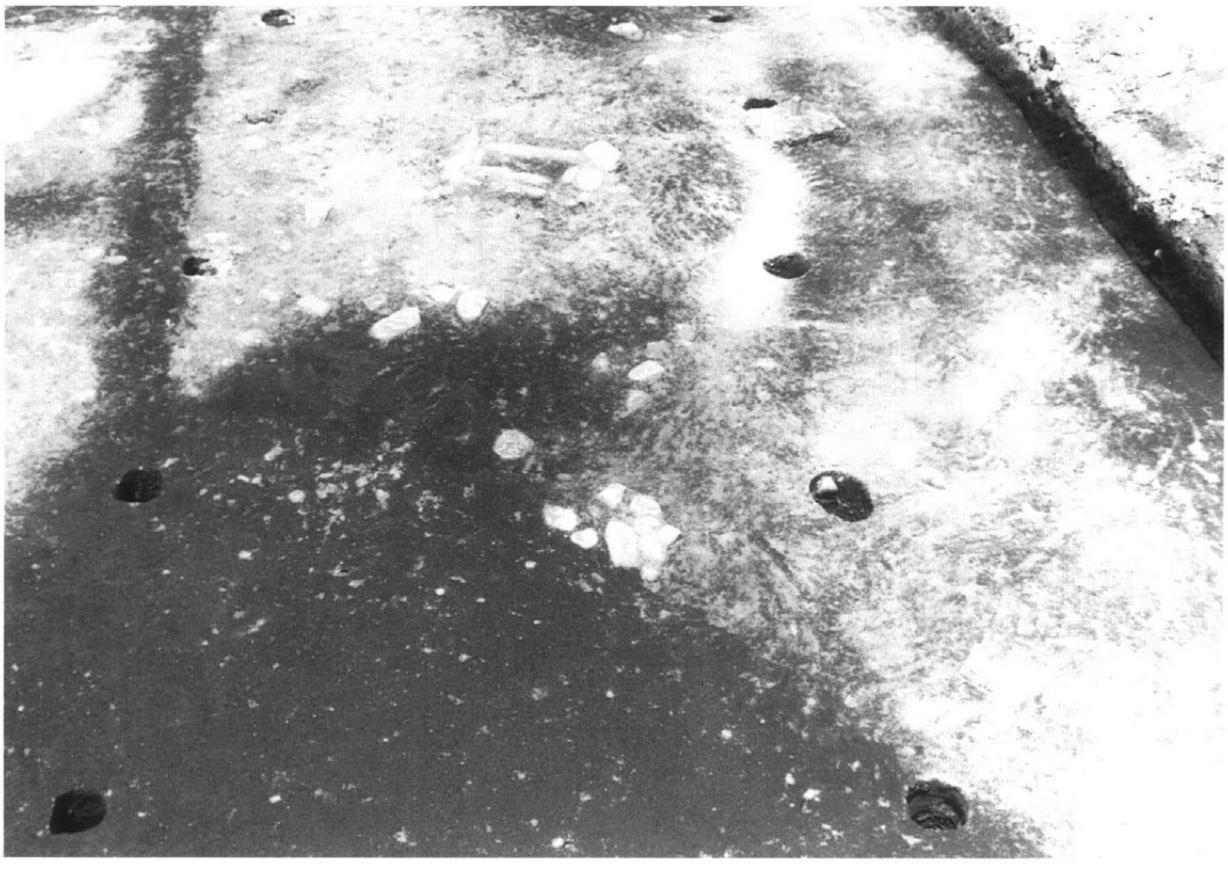
ＳＭ０４石組遺構刀子出土状態

ＳＭ０４周溝
土師器甕出土状態

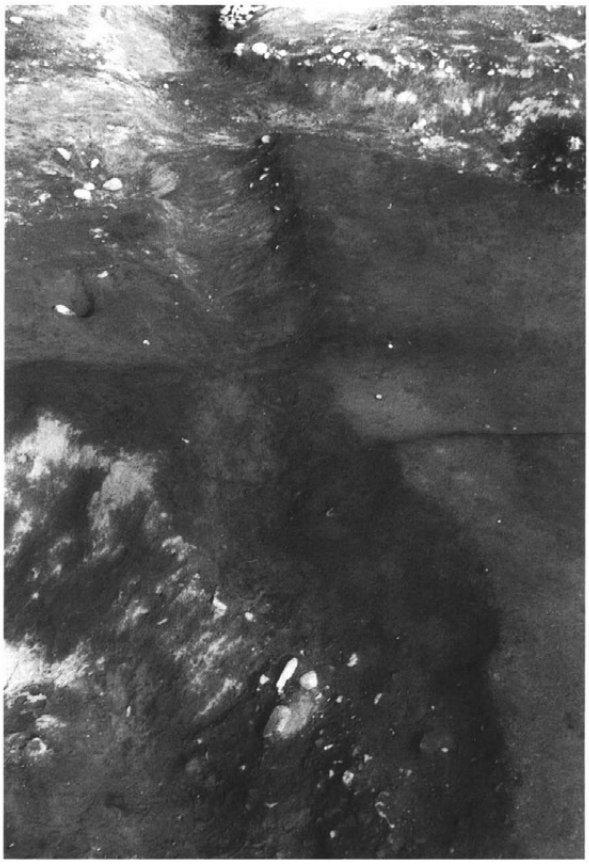
ＳＭ０４周溝
須恵器甕出土状態

ＳＭ０４
南東周溝石出土状態

ＳＭ０４墳丘土層



ＳＴ０１（南東から）



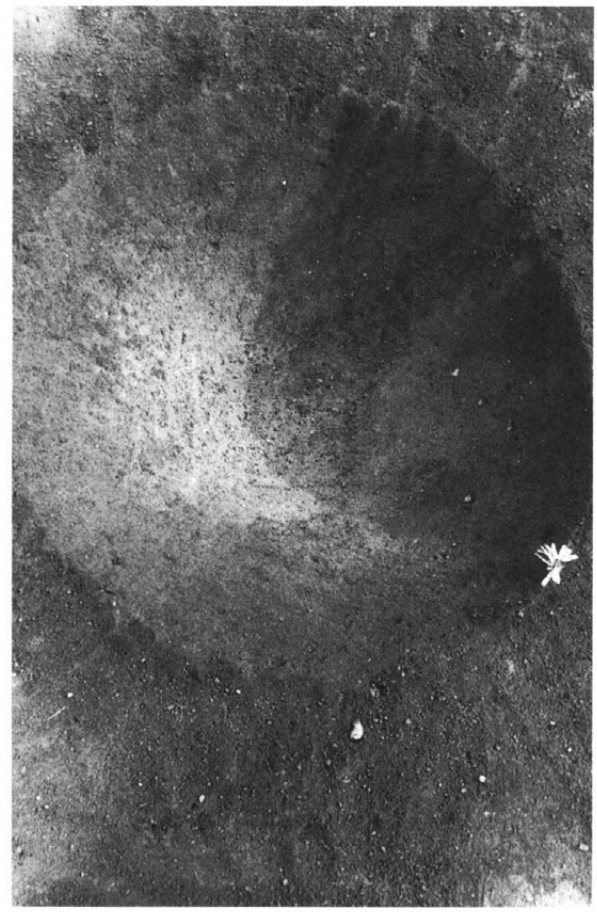
ＳＤ０４（西から）

ＳＤ０５・０６・０７・０８、柱穴（北から）

ＳＤ１０（北から）

ＳＤ１１（東から）

ＳＫ０１



ＳＫ０２

SK04

SK05

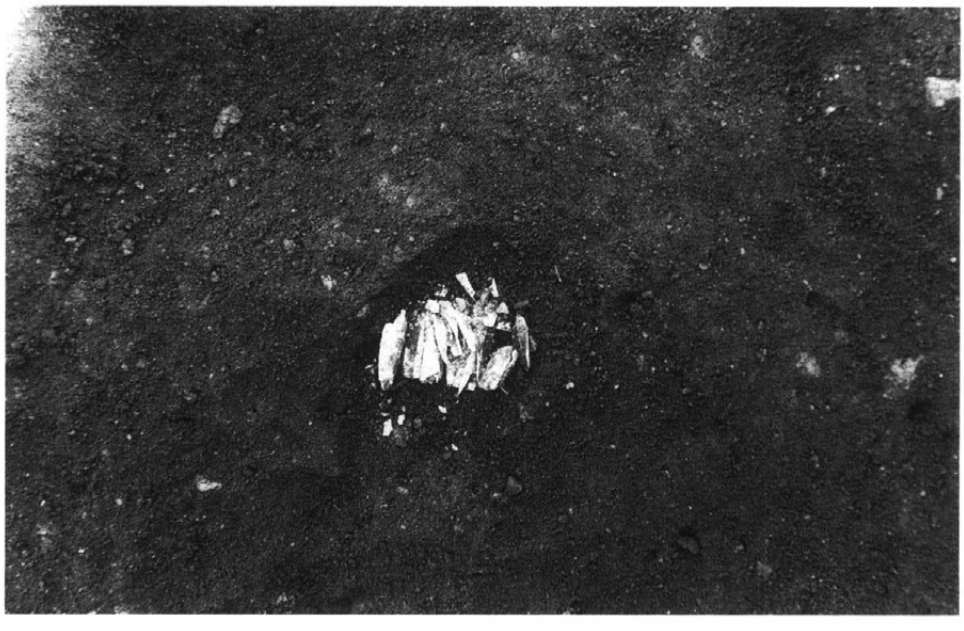
SI01

ＳＫ０３

ＳＫ０３馬の歯出土状態

ＳＭ０２
馬の歯出土状態

ＳＭ０３
馬の歯出土状態



ＳＭ０４
馬の歯出土状態

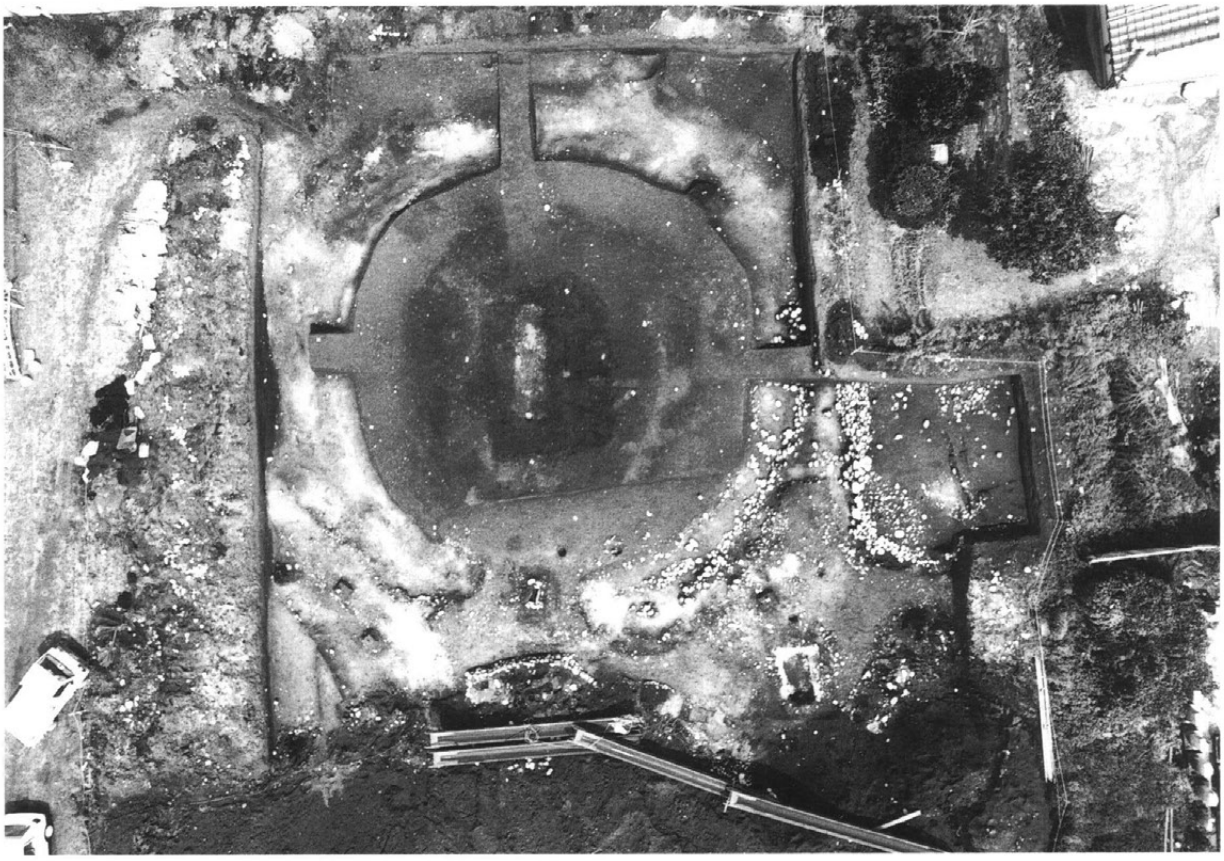
南側調査区全景（北から）

南側調査区全景（西から）

南側調査区全景（斜め上空　南西から）

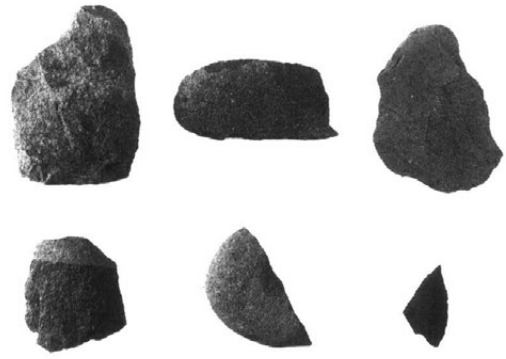
南側調査区全景（上空から）

北側調査区全景（斜め上空　南から）

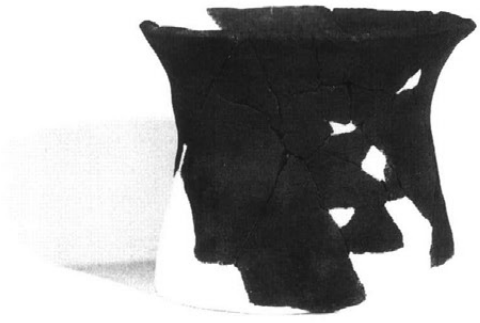


北側調査区全景（上空から）

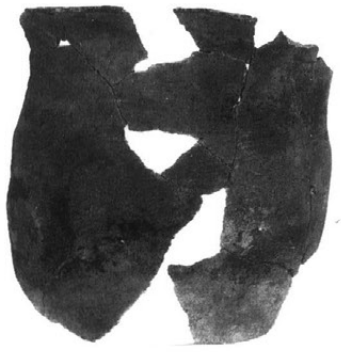
ＳＢ１１磨製石斧



ＳＢ１２　石器



ＳＢ１３　甕

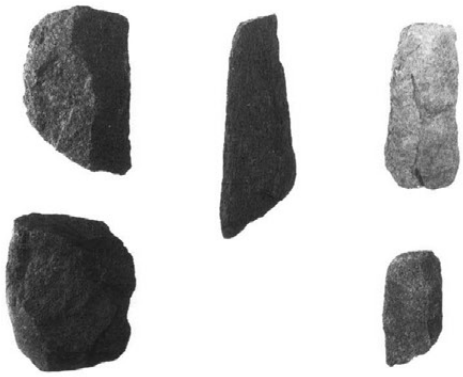


ＳＢ１３　甕

ＳＢ１３台付甕

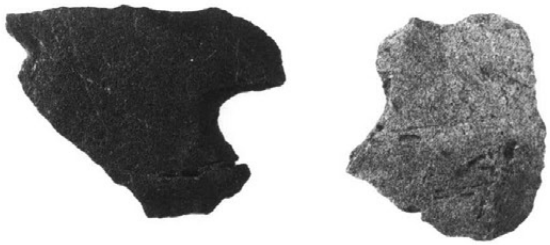
ＳＢ１３打製石斧

ＳＢ１３打製石斧

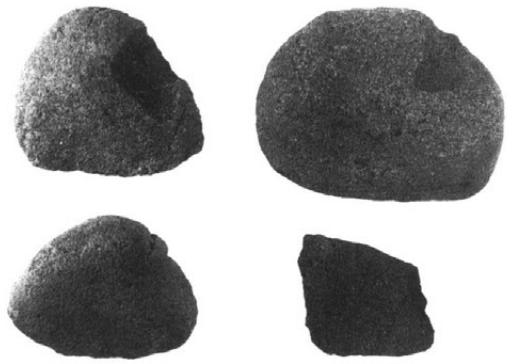


ＳＢ１３打製石斧

ＳＢ１３横刃型石庖丁

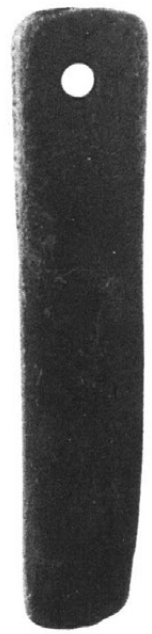


ＳＢ１３有肩扇状形石器

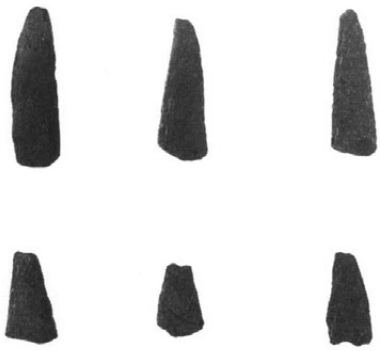


ＳＢ１３横刃型石器

ＳＢ１３　石器

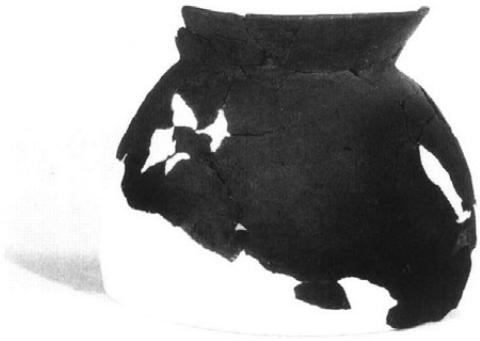


ＳＭ０１　砥石

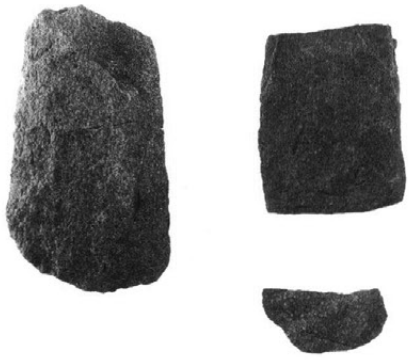


ＳＢ１３磨製石鏃未成品

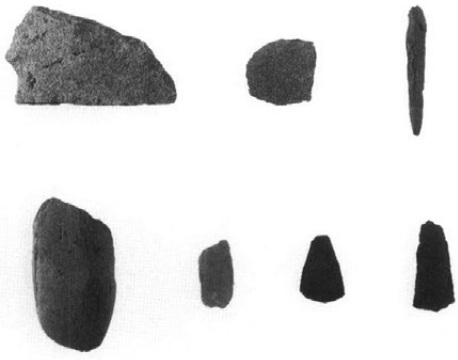
SM01　石器



SM02　甕



SM02打製石斧



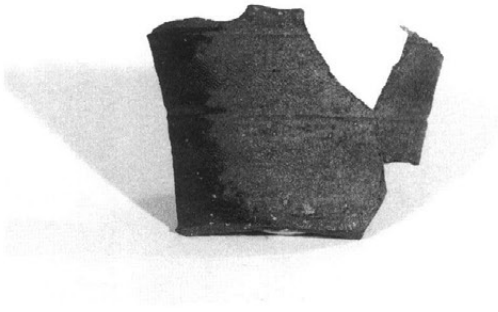
SM02　石器

SM03直口壺

SM03　甕

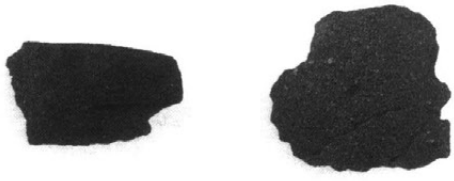
SM03　坏

SM03須恵器長頸壺

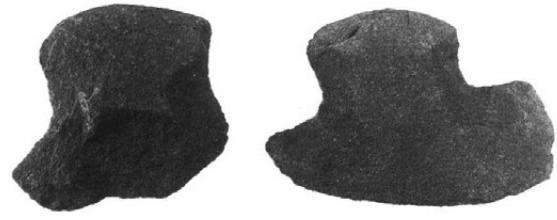


ＳＭ０３須恵器長頸壺

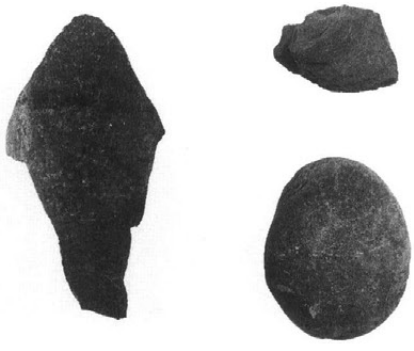
ＳＭ０３打製石斧



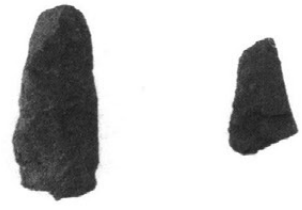
ＳＭ０３　石器



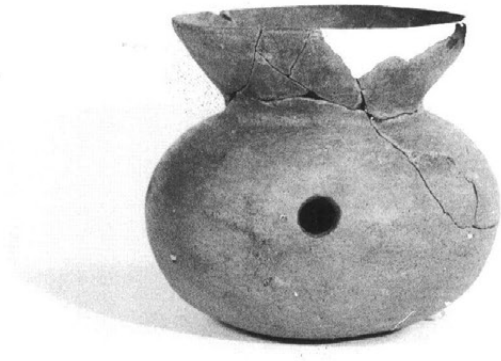
ＳＭ０３有肩扇状形石器



ＳＭ０３　石器



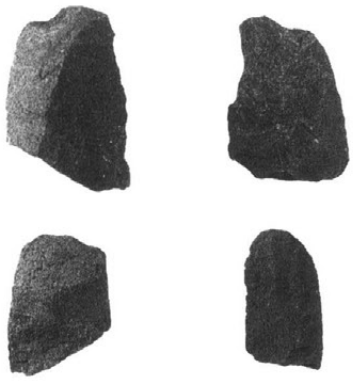
ＳＭ０３　磨製石鏃未成品



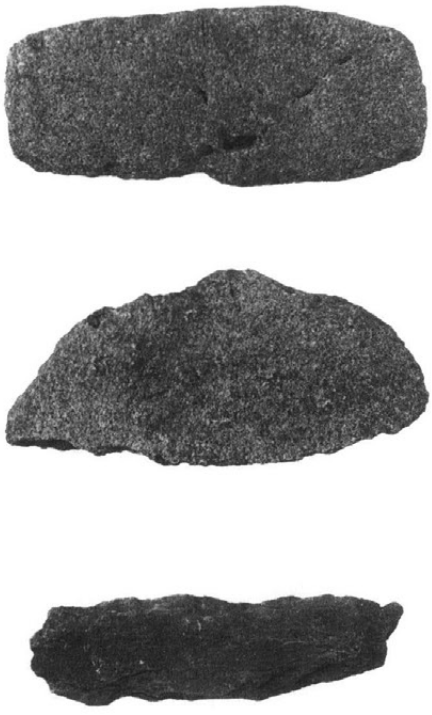
ＳＭ０４土師器瓹

ＳＭ０４須恵器甕

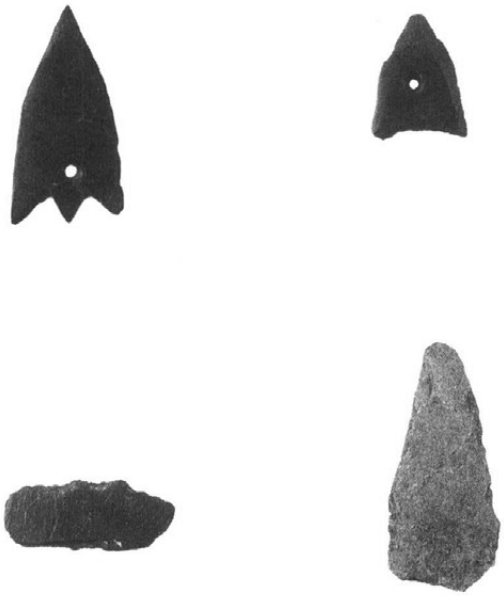
ＳＭ０４周溝弥生土器壺



ＳＭ０４打製石斧

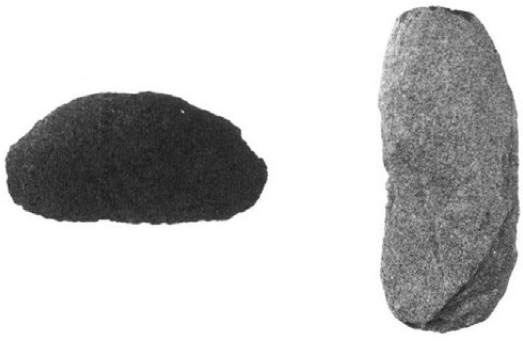


ＳＭ０４周溝横刃型石器

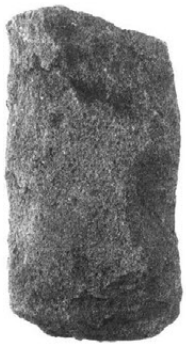


ＳＭ０４周溝磨製石鏃・同未成品

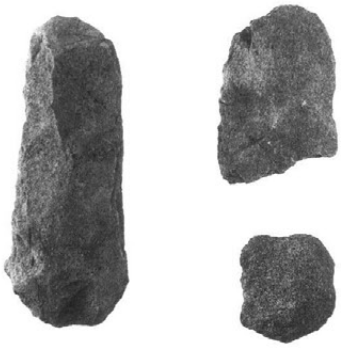
ＳＭ０４周溝磨製石斧



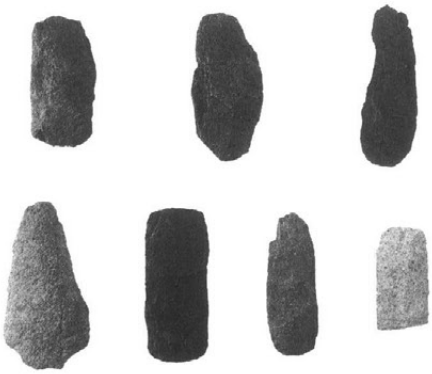
ＳＫ０３・０５　石器



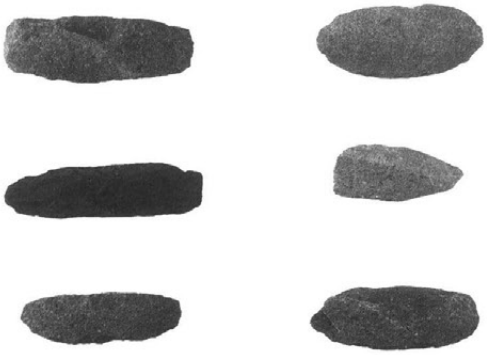
ＳＩ０１打製石斧



ＳＢ１３上層打製石斧

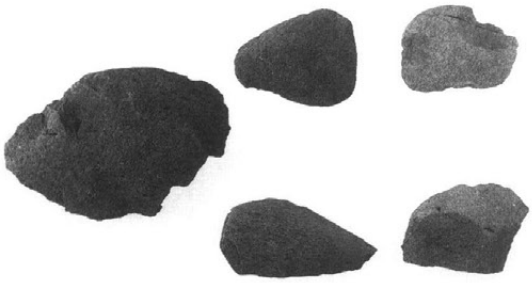


ＳＢ１３上層打製石斧

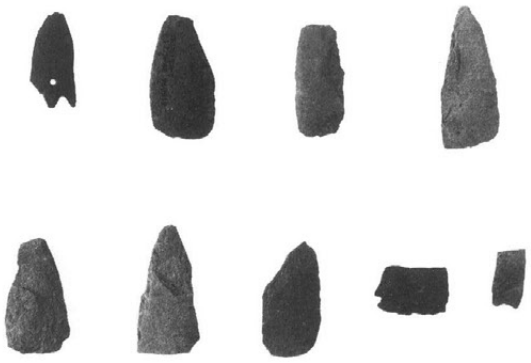


ＳＢ１３上層横刃型石包丁

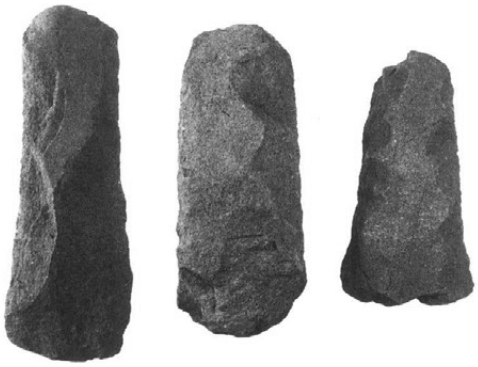
ＳＢ１３上層有肩扇状形石器



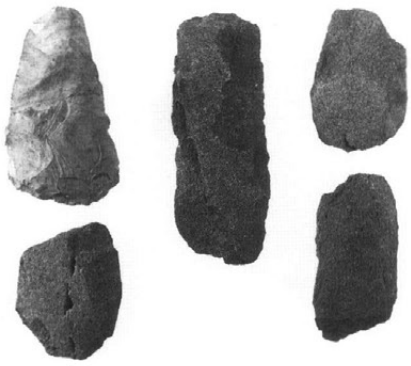
ＳＢ１３上層横刃型石器



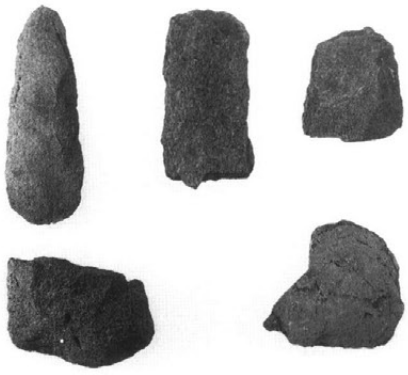
ＳＢ１３上層磨製石鏃・同未成品



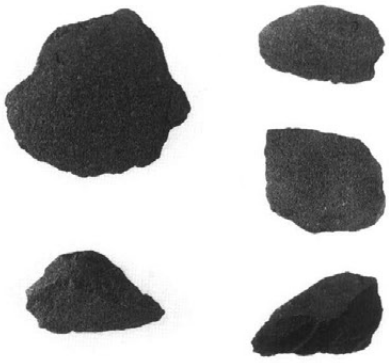
遺構外出土打製石斧



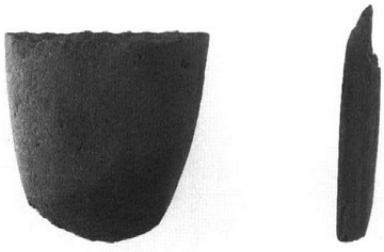
遺構外出土打製石斧



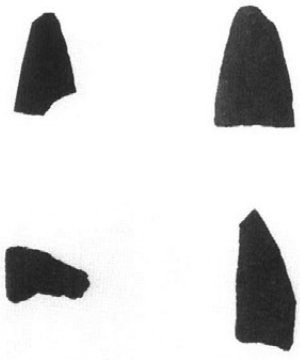
遺構外出土打製石斧



遺構外出土石器

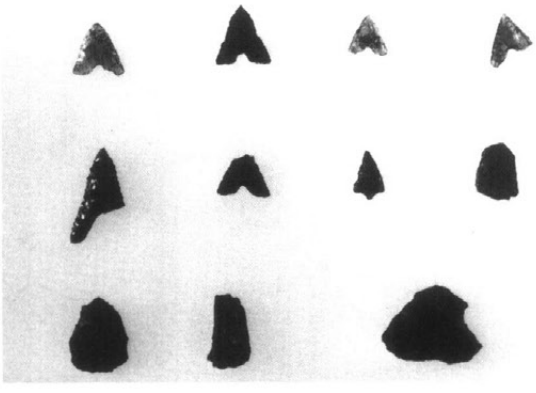


遺構外出土磨製石斧



遺構外出土磨製石鏃・同未成品

遺構外出土石匙

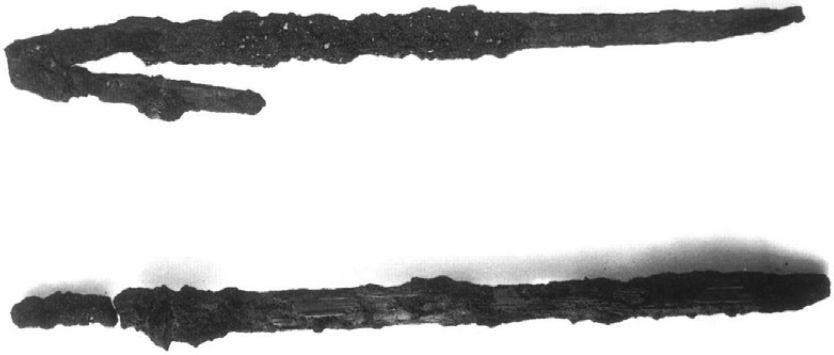


小型石器

ＳＭ０４　勾玉

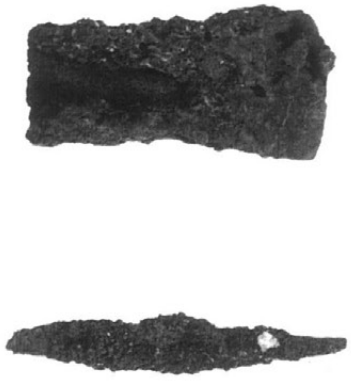
ＳＭ０１　鉄鏃

ＳＭ０１　刀子



ＳＭ０４
主体部直刀

ＳＭ０４
主体部刀子



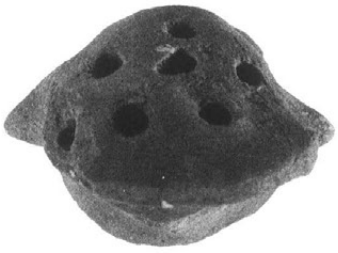
ＳＭ０４
鉄斧・刀子

ＳＭ０１土偶（正面）

ＳＭ０１土偶（裏面）

ＳＭ０１土偶（側面）

ＳＭ０１土偶（側面）



ＳＭ０１土偶（上面）

調査スナップ

調査スナップ

付編　墳丘墓主体部の遺体埋葬に関する自然科学分析調査

はじめに

寺所遺跡は、天竜川や松川の氾濫原に近い低位段丘上に立地する。これまでの調査により、弥生時代中期、古墳時代、中世の遺構が検出されている。特に、古墳時代の墳丘墓が検出された。

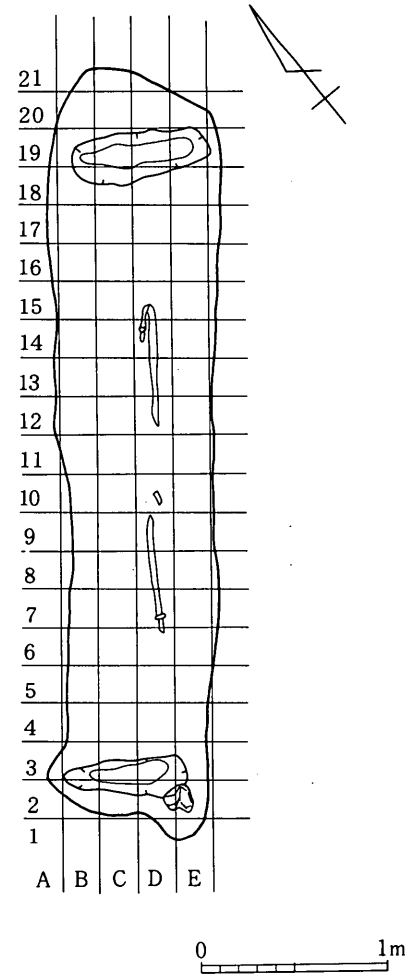
墳丘墓は円形を呈し、周溝を持つ。周溝は南西側で途切れており、そこには石組遺構が構築されている。石組遺構では、刀子が出土しており、副葬品埋納施設と考えられている。また、墳丘部では中央部に主体部が認められている。主体部には割竹形と考えられる木棺の痕跡が確認され、わずかに骨片も認められている。また、直刀や刀子等の副葬品も検出された。

本地域では、龍江阿高Ｂ遺跡にて弥生時代後期の方形周溝墓などを対象として遺体埋葬の検証を目的とするリン・カルシウム分析、腐植含量測定を実施した。その結果、主体部覆土の含量が相対的に高いことから遺体埋葬の可能性を示唆した。なお、その際の調査では主体部の半裁面を対象として含量の分布状態を層位的に検討できた。今回は遺体埋葬施設である墳丘墓主体部の覆土を対象として平面的に資料採取を行い、成分の分布状態を確認し、埋葬状態に関する情報を得ることとした。

1．資　料

主体部はやや不定形だが、長さ４ｍ、幅約0.8mの隅丸長方形を呈し、墳丘墓の周溝が途切れる方向に長軸を合わせるように構築されている。主体部の両側には小口痕が認められ、中央部に直刀と刀子が出土した。試料は、主体部底面から平面的に採取された。その際には、20cmのメッシュが組まれ、井桁状に合計39点が採取された。また、石組遺構覆土からも土壌１点が採取された。

この他、対照試料として調査区北壁に認められた基本土層の３層、２層（旧水田耕土）、１層（現水田耕土）の土壌各１点が採取された。今回の分析には、採取試料全点（合計43点）を用いた。



2．分析方法

分析は、土壌標準分析・測定法委員会編（1986)、土壌養分測定法委員会編（1981)、京都大学農学部農芸化学教室編（1957)、農林水産省技術会議事務局監修（1967)、ペドロジスト懇談会(1984)等を参考にした。以下に、分析方法を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0mmの篩を通過させる（風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料2.00ｇをケルダールフラスコに秤とり、はじめに、硝酸（ＨＮ03）５mℓを加えて加熱分解する。放冷

後、過塩素酸（HCI04）10mℓを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mℓに定容して、ろ過する。今回は、リン酸含量をリン酸（P205）濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。

別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含有量（P205mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

また、試料0.100～0.500gを100mℓ三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mℓを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定し、試料中の有機炭素量（Org－C乾土%）を求める。この有機炭素量に係数1.724を乗じて腐食含量（乾土%）を算出する。

3．結　果

結果を第1表に示す。対照試料の基本土層では、腐食含量が1.41～2.72%、リン酸含有量1.84から3.21P205mg/gであり、いずれも2層で低い含量であるが、概して下位ほど低い傾向が見られる。カルシウム含量は3.75～5.53CaOmg/gであり、下位で低い傾向にある。

一方、石組遺構の試料はリン酸、カルシウム、腐植の各含量が基本土層よりも低い。主体部試料は、腐植含量とカルシウム含量が基本土層より低い傾向があり、リン酸含量は基本土層2層や3層とほぼ同じ、あるいは高い傾向にある。しかし、16－Cと15－Dではリン酸含量が5.77P205mg/gと3.88P205mg/g、カルシウム含量が4.88CaOmg/gと3.06CaOmg/gであり、いずれも他試料と比較して含量が高い。また、カルシウム含量は8－E（3.10CaOmg/g）や16－E　（3.76CaOmg/g）でも高い。

4．考　察

石組遺構や主体部底部の土質は、砂壌土であった。理化学成分は土壌中の粘土分に吸着されることが多いため、今回のような土質ではリン酸やカルシウムが残留しにくいことがうかがえる。しかしリン酸は基本土層試料と比較して同等、あるいは高い傾向にあり、カルシウム含量も部分的に高い場所が認められた。さらに、前述の龍江阿高B遺跡の弥生時代後期の方形周溝墓や土坑でのリン酸含量と比較しても同等、あるいは高い含量である。龍江阿高B遺跡の分析試料の土質は、粘土分を含む埴壌土であり、理化学成分が残留しやすいと考えられる。これらから、今回の主体部底部は理化学成分が残留しにくいにもかかわらず、リン酸やカルシウム含量が高い場所が認められ、これら成分が濃集していることがうかがえる。

ところで、リン酸の土壌中に普通に含まれる量、つまり天然賦存量は約3.0P205mg/g程度とされ（Bowen,1983;Bolt・Bruggenwert,1980;川崎ほか,1991;天野ほか1991）、人為的な影響を受けた黒ボク土の平均値は5.5P205mg/gであったとする報告例もある（川崎ほか,1991）。また、土壌中のカルシウム含量は普通1～50CaOmg/g（藤貫,1979）といわれ、天然賦存量の含有幅がリン酸よりも大きい。

今回の主体部床面では概して、これら天然賦存量よりも低い含量であるが、16－Cや15－Dなどのように含量の高い場所も認められた。これらは、腐植含量と比較してリン酸含量がかなり高い。リン酸は、

表1　墳丘墓1試料理化学分析結果(1)

試料名		リン酸含量 P205mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g	腐植含量 C%	土色	土性
対照試料	基本土層　1層	3.21	5.53	2.72	5YR/1黒	L
	基本土層　2層	1.84	4.25	1.14	2.5Y3/2黒褐	L
	基本土層　3層	2.27	3.75	2.20	2.5Y3/1黒褐	SL
墳丘墓1	石組遺構	1.56	1.79	1.25	10YR2/3黒褐	SL
	主体部　3－B	2.06	2.52	1.95	10YR2/3黒褐	SL
	主体部　5－B	2.41	2.43	1.68	10YR2/3黒褐	SL
	主体部　7－B	2.65	2.69	1.89	10YR2/3黒褐	SL
	主体部　9－B	2.28	2.56	1.06	10YR2/3黒褐	SL
	主体部　11－B	1.82	1.86	1.70	10YR2/3黒褐	SL
	主体部　13－B	2.51	3.37	1.48	10YR2/2.5黒褐	SL
	主体部　15－B	2.64	2.70	1.82	10YR2/2黒褐	SL
	主体部　17－B	2.59	3.32	2.15	10YR2/1黒	SL
	主体部　19－B	1.91	2.24	1.14	10YR2/2黒褐	SL
	主体部　2－C	1.84	3.72	2.27	10YR2/3黒褐	SL
	主体部　4－C	2.00	2.33	1.42	10YR2/3黒褐	SL
	主体部　6－C	2.49	2.31	1.75	10YR2/3黒褐	SL
	主体部　8－C	2.20	2.32	1.43	10YR2/3黒褐	SL
	主体部　10－C	2.57	2.57	1.52	10YR2/3黒褐	SL
	主体部　12－C	2.38	2.32	1.41	10YR2/3黒褐	SL
	主体部　14－C	2.84	2.43	1.64	10YR2/2黒褐	SL
	主体部　16－C	5.77	4.86	1.65	10YR2/2黒褐	SL
	主体部　18－C	1.84	2.32	1.72	10YR2/2黒褐	SL
	主体部　20－C	2.19	2.56	1.21	10YR2/2黒褐	SL
	主体部　1－D	2.33	2.61	2.07	10YR2/2黒褐	SL
	主体部　3－D	1.88	2.21	1.15	10YR2/2.5黒褐	SL
	主体部　5－D	2.53	2.51	1.52	10YR2/2黒褐	SL
	主体部　7－D	2.58	2.61	1.45	10YR2/2.5黒褐	SL
	主体部　9－D	2.48	2.13	1.70	10YR2/2.5黒褐	SL
	主体部　11－D	2.38	2.24	1.21	10YR2/2黒褐	SL
	主体部　13－D	2.72	2.34	1.41	10YR2/2黒褐	SL
	主体部　15－D	2.88	3.06	1.58	10YR2/2黒褐	SL
	主体部　17－D	2.64	2.53	1.92	10YR2/2黒褐	SL
	主体部　19－D	1.71	2.62	1.18	10YR2/2.5黒褐	SL

表2　墳丘墓1試料理化学分析結果(2)

試料名			リン酸含量 P205mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g	腐植含量 C%	土色	土性
墳丘墓1	主体部	2－E	2.16	2.40	1.46	10YR2/2.5黒褐	SL
		4－E	1.84	2.14	1.84	10YR2/2黒褐	SL
		6－E	2.39	2.57	2.42	10YR2/2黒褐	SL
		8－E	2.58	3.10	2.51	10YR2/2.5黒褐	SL
		10－E	2.40	2.42	1.85	10YR2/2.5黒褐	SL
		12－E	2.71	2.61	1.97	10YR2/2.5黒	SL
		14－E	2.57	2.44	1.62	10YR2/3黒褐	SL
		16－E	2.82	3.76	2.21	10YR2/1黒	SL
		18－E	2.31	2.90	2.04	10YR2/1黒	SL
		20－E	2.28	2.94	2.12	10YR2/1黒	SL

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1976）による。
土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性の判定法による。
SL：砂壌土（砂の感じが強く、ねばり気はわずかしかない）
L　：壌土（砂と粘土を半々に感じる）

物遺体の他に植物遺体からも供給されるが、その場合には植物体から腐植も形成される。そのため、リン酸含量とともに腐植量も高くなる傾向にある。しかし、動物遺体由来のリン酸が供給されている場合には、腐植含量に比べてリン酸含量が高くなる。今回のリン酸含量の高い場所も動物遺体から供給されたものと思われる。これらの場所は、副葬品が出土した位置に近い場所である。

今回の調査対象である主体部床面では遺体由来と考えられる骨片や副葬品が出土しており、遺体の埋葬が示唆されている。また、石組遺構は副葬品埋納施設とされるが、成分含有量からは遺体の埋納は考えにくく、発掘調査所見を裏付ける結果であった。このように、主体部床面の成分含量の高い場所が認められる点は、遺体に由来する成分が周囲より濃集して残留していることを反映していると考えられる。

なお、東京都北区豊島馬場遺跡では、弥生時代終末～古墳時代前期にかけての方形周溝簿を対象として今回と同様なリン酸、カルシウム、炭素の各含量を測定した結果、副葬品や棺材、周溝内土坑の付近に特徴的なリン酸の濃集が認められ、遺物の出土状態などを詳細に記録することにより遺体の埋葬位置に関する情報が得られる可能性を示唆している（辻本・小林,1995)。

今回の調査では、主体部底部全体をカバーするように平面的に試料が採取されたこと、対照試料を設けたことにより、成分含量の違いを明確にすることができた。遺体由来の成分は、遺体付近を中心にして残留すると考えられ、遺体が埋納された施設の中でも局地的に成分が濃集すると思われる。今後、同様な遺体埋納に関する調査を行う場合にも、今回と同様に主体部などの遺体が埋納された場所を中心にして平面的に試料を採取し、検討することが望まれる。

引 用 文 献

天野洋司・太田健・草場敬・中井信(1991)「中部日本以北の土壌別蓄積リンの形態別計量」
『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』農林水産省農林水産技術技術会議事務局　P.28－36

Bowen,H,G(1983)『環境無機化学－元素の循環と生化学』浅見輝男・茅野充男訳　博友社　P.297
[H.J.M.Bowen(1979) Environment Cemistry of Elements]

Bolt,H,G・Bruggenwert,M,G,M(1980)『土壌の化学』岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳
学会出版センター　P.309
[H.G.Bolt and M.G.M.Bruggenwert(1976) Soil Chemistry P.235－236]

土壌標準分析・測定法委員会(1986)『土壌標準分析・測定法』博友社　P.354

土壌養分測定法委員会(1981)『土壌養分分析法』養賢堂　P.440

藤　貫正(1979) カルシウム・地質調査所化学分析法, 52：57－61, 地質調査所.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久(1991) 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省
農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, P.149：P.23－27

京都大学農学部農芸化学教室編(1957)　農芸化学実験書　第1巻. P.411, 産業図書

農林水産省農林水産技術会議事務局監修(1991) 新版 標準土色帖.

パリノ・サーヴェイ株式会社(1991) 自然科学分析. 東京都板橋区後段田遺跡第二次発掘調査報告書,
P.262－281

ペドロジスト懇談会(1984) 野外土性の判定. ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」,
P156,：P.39－40.

辻本崇夫・小林　高(1995) 豊島馬場遺跡における周溝内埋葬について
－土壌分析結果を中心として－. 北区埋蔵文化財調査報告16集「豊島馬場遺跡」, P.368－371,
東京都北区教育委員会,

報 告 書 抄 録

	てら どこ
書　　名	寺　所　遺　跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	山　下　誠　一
編 集 機 関	飯田市教育委員会
所　在　地	〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地　TEL 0265-53-4545
発行年月日	西暦1999年２月10日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯 °　′　″	東　経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
てらどこ 寺　所	長野県 飯田市 松尾新井	2053		35度 29分 55秒	137度 51分 33秒	1996/7/10 ～ 1996/10/1	620	新井コミュニティ消防センター

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺　　所	集落址 墓　域	縄文時代 弥生時代 古墳時代 中　　世	土　坑 竪穴住居址　4軒 土　坑 墳丘墓　5基 溝　址　1本 掘立柱建物址　1棟	縄文土器・石器 弥生土器・石器 土偶 土師器・須恵器 鉄器・勾玉	弥生時代中期後半の集落と古墳時代中期の墓域が確認された。後者には、大型や貼石を持つ墳丘墓と周溝等に埋葬された馬が調査された。

寺所遺跡

1999年2月10日　発行
編集・発行　長野県飯田市上郷飯沼3145番地
飯田市教育委員会
印　　刷　杉本印刷株式会社